

# 死せる魂

または チチコフの遍歴 第一部 第一分冊

MYORTVUIE DUSHI (MEPTBYE ДУШИ)

青空文庫



## 第一章

県庁所在地のNNという市の或る旅館の門へ、弾機つきのかなり綺麗な小型の半蓋馬車が乗りこんで来た。それは退職の陸軍中佐か二等大尉、乃至は百人ぐらいの農奴を持つている地主といった、まあ一口に言えば、中流どころの紳士と呼ばれるような独身者がよく乗りまわしている型の馬車で。それには紳士がひとり乗っていたが、それは別に好男子でもないかわりに醜男でもなく、肥りすぎてもいなければ痩せすぎてもいず、また年配も、老けているとはいえないが、さりとしてあまり若い方でもなかった。

この紳士が乗りこんで来たからとて、市には何の騒ぎも起こらねば、別に変った出来ごともしあがらなかつた。ただ僅かに、旅館の向い側にある居酒屋の入口に立っていた露助の百姓が二人、ぼそぼそと蔭かげぐち口をきいただけで、それも、乗っている紳士のこ  
とよりも、馬車の方が問題になつたのである。「おい、どうだい、  
』と、一人がもう一人の方に向つて言つた。「大した車でねえ  
か！ ひよつと、あの車でモスクワまで行くとしたら、行きつけ  
るだか、行きつけねえだか、さあ、お前めえどう思う？』——『行き  
つけるともさ。』と、相手が答えた。——『だが、カザンまであ  
行かれめえと思うだが？』——『うん、カザンまであ、行かれね  
えだよ。』と、また相手が答えた。これでその話にも覺けりがついて

しまったのである。あ、それからまだ、馬車が旅館の間近までや  
つて来た時、一人の若い男と擦れ違つた。その男は、おそろしく  
細くて短かい綾織あやおりもめん木綿の白ズボンをはいて、なかなか凝こつた燕  
尾服を著きていたが、下からは、青銅のピストル型の飾りのついた  
トゥーラ製の留針ピンを挿したシャツの胸むね当あてが覗のぞいていた。この若  
い男は振り返つて馬車を一目ひとめながめたが、風で吹つ飛ばされそう  
になつた無縁帽カルツーズを片手でおさえると、そのまま志す方へすたす  
たと歩きだした。

馬車が中庭へ入ると、宿屋の下男というか、それともロシアの  
旅館や料亭で一般に呼ばれているように給ポロウオイ仕イというか、とに  
かく、おつそろしくてきぱきして、あまりせわしなく動きまわる

ので一体どんな顔かおつき附つきをしているのか、見分けもつかないような男が飛び出して、紳士を出迎えた。その男はひよる長い軀からだに、襟えりが後頭部までも被かぶさりそうな、長い半木綿のフロックコートきを著きていたが、片手にナプキンを掛けたまま素す早はやく駆け出して、さつと髪を揺りあげるように一いち揖ゆうするや否や、木造の廊下づたいに、そそくさと紳士を二階の有り合わせの部屋へ案内して行つた。それは至極しごくありふれた部屋であつた。というのは、第一、旅館そのものが、極ごくくありふれたものであつたからだ。つまり県庁の所在地などによくある旅館で、なるほど一昼いち夜にち二ルにーブリも払えば、旅客は静かな部屋をあてがわれるけれど、部屋の四隅よすみからはまるで杏子あんずのような油虫がぞろぞろと顔を覗け、隣りの部屋へ通じる

扉口はいつも箆筒たんすで塞いではあるが、そのお隣りには決まって泊り客があつて、これが又ひどく無口で物静かな癖に並はずれて好奇心が強く、新來の客の一挙一動に興味をもつて聴きき耳みみを立てていようといった塩梅あんばいである。この旅館のおもてつきが又、いかにもその内部にふさわしく、無闇に間口ばかり広い二階建だてで、一階の外壁は漆しっくい喰くも塗らないで赤黒い煉瓦が剥むき出しになつてゐるが、もともと汚ならしい煉瓦が烈しい天候の変化に逢つて一層くろずんでゐる。二階の方は、相も変らぬ黄色のペンキで塗つてあり、階下には、馬の頸圈くびきだの、細引ほそびきだの、環麵麩バラシカだのを売つてゐる店が並んでゐる。その並びの一番はずれの、店というよりは一つの窓に、赤銅あかがねのサモワールと並んで、そのサモワールそ

つくりの赤銅いろの顔をしたスビデニ蜜湯屋が控えておるが、その顔に漆黒の顎鬚さえ生えていなければ、遠目にはつきりサモワールが二つ窓に並んでいるとしか見えない。

新来の客が、あてがわれた部屋を検分している間に、身のまわりの荷物が運びこまれた。真まつさき先に来たのは白い革の旅行鞆トラシクで、それがあちこち擦すり剥けているところは、旅に出たのは今度が初めてではないぞといわんばかりだ。旅行鞆トラシクを運びこんで来たのは、馭者のセリファンと従僕のペトウルーシカとで、セリファンの方は毛皮外がいとう套きを著た背丈の短い男だが、ペトウルーシカの方は、まだ三十そこそこの若者で、どうやら旦那のおさがりらしく、いかげん著古きふるされた、だぶだぶのフロックを著こんだ、おそろし



く鼻と唇の大きい、見たところ少し険けんのある男だ。旅行鞆トランクについて、木目白樺もくめで象嵌ぞうがんをほどこしたマホガニイの手箱だの、長靴の型木だの、青い紙に包んだ鶏の丸焼だのが持ちこまれた。こうした物をすっかり運びこんでしまうと、馭者のセリファンは厩きゆう舎しゃの方へ馬の始末をしに行き、従僕のペトウルシカは、まるで犬小舎いぬごやのような、いやに薄暗い小さな控室ひかえしつのなかを取りかたづけはじめたが、そこへはもう既に自分の外套といっしよに、彼特有の変な臭いまでちゃんと持ちこんでいた。その臭いは、後から運びこまれた従僕向きの七つ道具の入っている袋からもプリン臭っていた。彼はその小部屋の壁際に、窮屈きうくつそうな三本脚の寝台を据えつけて、その上へ、こちこちのまるで揚煎餅あげせんべいのよう

に薄っぺらな、また恐らくは揚煎餅のように脂じみた、小っぼけな、どうやら蒲団らしい代物しろものをかぶせたが、それは宿屋の主人からうまく借り出して来た品しなである。

こうして召使たちが大騒ぎをして、いろいろの始末をつけている間に、紳士は食堂へ出かけて行つた。その食堂という奴が抑々もどんなものであるかは、凡そ旅およをする程の人なら誰でもよく

知つている。つまり例によつて例の如く、油性塗料を塗つた壁は上の方が煙草の煙で黝くすみ、下の方は種々雑多な旅客の背中にこすられて、てかてか光つていようといった塩梅だが、旅客というよりも寧ろむし、土地の商人仲間の方が多し——というのは、市の立つ日には、きまつて商人仲間が六人づれ七人づれで此処ここへやつて来

ては、お茶をお定りきまりの二杯ずつ飲んで行くからである。それから、型の如く煤けた天井と、同じく煤けたシャンデリアで、それにはカットグラスが沢山ぶらさがっていて、給仕が型の如く、海辺に集つどう鳥の数ほど夥おびただしい茶碗を載せた盆を、大胆に振り廻しながら擦りきれた油布の上を駈けまわるたんびに、跳ねあがったり、ちりんちりん音を立てたりする。また壁じゆうには、型どおりの油絵が幾つも懸かけ並べてある。つまり何もかもが何処どこにでもあるのと同じ調子で、ただ一つ異ちがうのは、中の一枚の絵に描かれた水精ニシフが、おそらく読者もついぞこれまでに見たことがないだろうと思われるような、すばらしく大きな乳房をもっているぐらいのものである。尤もつとも、こういった変態は、誰がいつ何処から我がロシア

帝国にもたらしたのか見当もつかない。さまざまな歴史画の中にもしばしば発見されるが、どうかすると、我が帝国のけんかんれん頭官連や美術愛好者たちがイタリアへ行った際、案内人にそそのかされて買いこんできた絵の中にさえもちよいちよい見受けられる。紳士は被っていたカルツーズ無縁帽をぬぎすてると、虹色の毛編のけあみ頸卷くびまきを解いた——こういう頸卷は、女房持ちの男には、細君が手ずから編んで、ちゃんと巻き方まで教えてくれるものだが、独身者には一体、誰がそんなことをしてくれるやら、作者にはさっぱり分らないから、何とも申し上げ兼ねるが、とにかく、作者はまだ一度もそんな頸卷など巻いた覚えがないので。さて頸卷を解くと、紳士は食事を言いつけた。で、こういう宿屋ではお定まりのいろんな

料理、例えば、わざわざ不時の客にそなえて幾週間も蔵しまつてあつた渦巻型の肉饅頭を添えた玉菜汁シチイだとか、豌えんどう豆をあしらつた脳味噌だとか、キヤベツを添えた腸詰だとか、去勢鶏ブリヤルカの焙あぶりにく肉だとか、胡瓜きゅうりの塩漬しおづけだとか、お望み次第、いつ何時なんどきでも用意の出来ている、今もいう甘つたるい渦巻型の肉饅頭だとか——

そう言つた料理の、暖めなおしたのや冷たいままのが次つぎ次つぎと運ばれる間に彼は宿屋の下男、つまり給ポロウオイ仕をつかまえて、この宿屋は前には誰が経営していたのか、今は誰が持つているのか、収益はよほど多いのかとか、お前たちの主人は酷い悪党じやないのかというような、つまらないことをいろいろ問ただい糺した。それに対して給仕は型の如く、『ええもう、旦那、ひどい悪党でござ

いますよ！』と相槌を打ったものだ。近頃では文明開化のヨーロッパと同じように文明開化のロシア帝国でも、旅館で食事をしたためるのに、何か給仕と話をするか、時には面白そうに彼等をからかいでもしながらでないと、頓とんと物が美味しく食べられないという変った御仁ごじんがざらにあるもので。とはいえ、この新来の客は、そういったくだらない質問ばかり並べた訳わけではない。彼は、この市まちにいる県知事は誰だとか、裁判所長は誰だとか、検事は誰だとかいうようなことを、おそろしく綿密に訊ねた——つまり、主だおもった役人のことは、一人残らず訊きもらさなかつたのである。が、なお一層こまごまと、まんざら無関心でもなさそうな調子で、目ぼしい地主たちのことを訊ねた——誰だれだれ々々は農奴を幾人もつてい

て、市まちからどのくらい離れたところに住んでいるか、どんな性質の男で、市へは余程たびたび出て来るのか、などということ根掘り葉掘り訊ねた。それからまた、この地方の状態をいろいろと丹念に訊いた——この県下に何か病気はなかったか、つまり流行性の熱病とか、猛烈なマラリヤとか、天然痘といった風なものが流行はやらなかったかなどということ、どうも矢張りやはただの好奇心とは思われないような身の入れ方で根掘り葉掘り質問したものだ。紳士の態度には、何処いとなく厳いいところがあつて、洩はなをかむのにもおそろしく大きな音をたてる。一体どうしてやらかすのか分らないが、彼の鼻はまるで喇叭らっぱのような音をたてるのだ。一見この何の罪もなさそうな仕草によつて、彼は旅館の給仕から多大の尊

敬を贏<sup>か</sup>ち得たものだ。で、給仕はその音を聞きたんびに、髪の毛を振りあげるようにして、一層シヤンと直立不動の姿勢をとり、遙かの高みから会<sup>えしやく</sup>釈<sup>やく</sup>をしながら、『何か御用でございましょうか?』と訊ねたものである。食事がすむと、紳士は珈琲を一杯のみほしてから、長椅子にどっかり腰をおろし、背中にクツションをあてがったが、それがまたロシアの宿屋のクツションというやつは中身にふんわりと弾力のある毛のかわりに、まるで煉瓦屑か小石のようなものが詰めこんである。やがてのことに、欠伸が出はじめたので、彼は自分の部屋へ案内するように言いつけて部屋へもどると、いきなり横になつて、ちようど二時間ばかり眠つた。こうして一休みしてから、旅館の給仕の求めるままに、然<sup>しか</sup>るべく



警察へ届けるため、一枚の紙きれに官等や姓名などを書いて渡した。給仕は階段を降りながら、その紙きれに書いてある次ぎのよ  
うな文字をたどたどしく拾い読みした。『六等官パーウエル・イ  
ワーノヴィツチ・チチコフ。地主、私用のための旅行』と。給仕  
がまだそれを一字々々拾い読みしている間に、パーウエル・イワ  
ーノヴィツチ・チチコフは市内見物に出かけて行つたが、この市  
が他の県庁所在地に比べて少しも劣っていないところを見て、ど  
うやら満足がいったらしい。石造家屋の黄いろい塗料は眩しく眼  
を射、木造家屋の鼠いろの塗料はつつましやかに黝くすんで見えた。  
家屋は一階建のも、二階建のもあり、また、地方の建築師の考え  
では素晴すばらしく美しいものとされている、相も変らぬ中二階つき

の、一階半建というやつもあつた。こうした家々が、ところによつては野原のようにだだっぴろい通りと涯はてしもない木柵もくさくの間にぽつんぽつんと立っており、ところによつては蝟集かたまつてごちやごちやと立てこんでいた。そういうところでは人間ひとの動きが目立たつて、一層活気があふれていた。殆ほとんど雨に晒さらされてしまったような、輪型固麵麩クレンデリや長靴の絵を描いた看板が眼についた。また青いズボンの絵を描いてワルシヤワの裁縫師何某なにがしというような名前を掲たげているのもあつた。無縁帽と海軍帽の絵を描いて、『外国人\*1ワシーリイ・フョードルフ』と名乗りをあげている店もあつた。また二人の男が玉突をやっている絵看板もあつたが、その男たちには、ちやうど我が国の劇場で、よく大詰の幕に出る

客人に扮した役者が著きているような燕尾服が著せてあつた。その競技者たちは、キューを握った手を少し後ろへひいて、立った今ピヨンと一つ跳躍したばかりだと言わんばかりに、足を斜にかまえて、玉に狙いをつけているところである。こうした絵の下には必らず『これ即ち当店なり』と書き添えてある。また無雑作に通りにヘテールブルを据えつけて、胡桃くるみだの、石鱈いしがらだの、石鱈そつくりの生薑餅しょうがだのを売つているところもあれば、丸々とふとつた魚にフォークを突きさした絵看板を出した煮売屋にうりもあつた。中でも一番多く眼につくのは、今でこそ『酒場』という簡単な文字に變つてしまつたけれど、その頃はまだ帝室の紋章たる\*2双頭の鷲を看板につけていたのが穢きたなく黝くすんでしまつたやつである。舗道

は到るところ、でこぼこしていた。彼は公園もちよつと覗いてみたが、そこには細いひよろひよろした木が、まだ根も碌々張つていないらしく、下の方に三角形に突支棒を組んで植えてあるだけで、その突支棒がまた恐ろしく奇麗に緑いろのペンキで塗らたてである。それでも、こんな葦の背丈ほどもないような木立のことも、何かで町にイルミネーションの施されたことが新聞に出た折には、『市当局の配慮により、我が市は今や、樹木の鬱蒼と繁茂せる公園によつて飾られ、炎暑の候にも清涼の気を満喫し得るに至れり。』とか、また、『市民の胸の感激にあふれて打ち顫え、市長閣下に対する感謝の涙漕然として下るを見るは誠にじらしき限りなり。』などと書き立てられたものである。で、

彼は巡查をつかまえて、教会へはどう行くのが一番ちかいか、官庁へはどう、知事の邸へはどうといった風に、詳しく道を訊ねてから、市の中央を流れている河を見に行つた。その途中で木の柱に貼りつけてある芝居のビラを一枚はぎとつた。それは宿へ帰つてゆっくり見るためである。また、板敷きの歩道を歩いて行く見<sup>み</sup>目<sup>め</sup>うるわしい一人の婦人を、しげしげと見送つた。お仕着<sup>しきせ</sup>の軍服をきて、手に小さい包みを持った少年が婦人のお供について行つた。彼はその場所の様子を一層はつきり憶えておこうとでもするよう<sup>ひ</sup>に、一と渉<sup>わた</sup>り四方を見まわしておいて、まっすぐに宿へ帰ると、給仕にちよつと軀<sup>からだ</sup>をささえられながら階段を登つて、さつさと自分の部屋へ入つてしまった。お茶を一杯のんでから、テーブル

ルにむかつて腰をおろすなり、蠟燭を持って来させて、例のビラをポケットから取り出したが、それを蠟燭の灯に近づけると、右の眼をちよつと瞬しばたくようにしながら読みにかかった。別段そのビラには大たいしたことは書かれていなかった——\*3コツエブーの芝居がかかつていて、ロールの役をポプリヨーヴィンが、コーラの役をジャブロワ嬢がやるというだけで、その他の役者は一いつこう向名もない手合てあいばかりであつた。それでも彼は残る隈なくそれに眼をとおして、平土間の料金まで調べあげ、おまけに、このビラは県の印刷部で刷つたものだということまで確かめた。それから裏にも何か出ていないかと思つて、引っくり返して見たが、何も書いてなかつたので、眼をこすつて、ビラをきちんと畳むと、それ

を自分の手箱の中へしまいきんだ。彼には何でも手あたり次第にこの手箱へしまいき癖があつた。さてこの日は、犢こうしの冷肉を一皿とクワス一本を平たいらげてから、広大無辺な我がロシア帝国の地方によつては、よく言い草にされている、謂いわゆる『鞞ふいごのような大お軒おいびき』をかいて寝こんでしまうことで、どうやら幕になつたらしい。

翌あくる日はまる一日じゆう、諸しよほう方の訪問ついでに費やされた。新来の旅人は先まずこの市まちのお歴々がたを訪問した。初めに県知事に敬意を表した。知事はチチコフと同様に、あまり肥つてもいなければ瘦せてもいない人物で、頸にアンナ十字章をかけていたが、まだその上に、近く星大授章を貰うことになつてゐるといふ噂であつた。

その癖、大のお人好しで、時には自分で紗しやの布きれに刺繡しゅうをしていたりさえした。それから副知事のところへ顔を出し、検事のところへ行き、裁判所長のところ、警察部長のところ、徴税代弁人のところ、官営工場監督官のところ……いや、これ以上一々かぞえあげていた日には、世せ上じょうの有力者を一人残らず網羅することになつて、とてもできない相談だから、残念ながらこの辺でやめるが、とにかくこの旅人は、訪問ということにかけて異常な活躍を示したと言つても差支えなく、彼は医務局の監督から市の建設技師にまで敬意を表しに伺候しこうしたのである。それでもまだ、誰か訪問すべき人は残っていないかと考えながら、長いこと馬車のなかに坐すわっていたが、もうこれ以上、官吏らしいものは市まちにいなかった。



こうした有力者たちとの談合のあいだに、彼は実に手際よく、その一人々々に取り入ってしまった。先ず知事にはそれとなしに、この県へ入るとまるで天国へ来たよう、道路という道路は到るところビロードを敷きつめたようだ、それにこういう賢明な粒よりのお歴々を任用している当局はまことに絶大な賞讃に値するなどと仄めかした。また警察部長には、市の巡査のことで何かたつぷりとお世辞を振りまき、副知事と裁判所長に対しては、二人ともまだ五等官に過ぎなかつたのに、談話のあいだに二度までもわざと間違えて『閣下』と呼んだものだから、それがひどく彼等の御意ぎよゐになつた。結果として、知事は早速その晩、自分の家の夜会に御来臨に預りたいと招待するし、他の役人連もそれぞれ、或

る者は午餐ごせんに、或る者はボストン骨牌カルタに、また或る者はお茶に招くという始末であつた。

この旅人は自分自身の身の上については、多く語ることをどうやら避けているらしく、話すにしてもひどく控え目がちな、どつちつかずの御座形おやなりで、そんな場合にはいつも判で捺おしたように、自分は世間的には誠につまらぬ蛆虫同様の者で、人様からかれこれ心配していただくほどの人間ではないとか、これまでには**ずいぶん**辛い目にもあい、職責上、正義のためには**忍び難き**がたをも**忍び**、自分の生命を狙うような敵をも多く持ったとか、しかし今はもう安穩よせいに余世を送りたいと思つて、安住の地をもとめているとか、**図らずも**この市へやって来たので、何はさて一流のお歴々がたに

敬意を表するのを第一の義務だと存じましてなどと述べたてるだけであつた。で、さつそく知事の夜会へ出席することを怠らなかつたこの新来の人物について、市の人々が知り得たのは以上が全部であつた。ところで、その夜会に出席する支度に彼はたつぷり二時間の余よもかかつたが、この際彼が身じまいに払つた入念さ加減は、ちよつと他に類のないものであつた。食後に少し午睡ごすいをとつた後、洗面の用意を命じた彼は、両方の頬を代る代る、中から舌でつっぱりながら、おそろしく長いこと石鹼で磨き立てたが、やがて給仕の肩からタオルをとると、相手の鼻の前さきでまず二度ばかりブルつと鼻を鳴らしてから、耳の後ろから手始めに、その丸々した顔をまんべんなく拭きあげた。それから鏡に向つて胸当

をつけ、鼻の孔からのぞいていた鼻毛を二本ひっこ抜くと、間髪を入れず、ピカピカ光る蔓苔つるこけもも桃いろの燕尾服を著けていた。こんな風にして身装みなりをととのえると、彼は自分の馬車に乗りこんで、まばらに灯影ほかげのさしている家々の窓の光りに照らされて、うつすらと見える涯しもなくだだっ広い通りを揺られて行つた。知事の邸はしかし、まるで舞踏会でもあるように煌々こうこうと灯りがついていた。角燈ランタンをつけた軽馬車が幾台も並んでおり、玄関前には二人の憲兵が立っていて、遠くの方では馭者の喚き声が聞こえてくる——つまり、何もかもが注文どおり備わっていた訳だ。大広間へ足を踏み入れると、ランプや、蠟燭や、婦人連の衣裳が余りにもキラキラと光り輝いていたので、一瞬間チチコフは眼をそばめ

ずにはいられなかつた。何もかもがふんだんに光りを浴びていた。黒い燕尾服があちこちに、塊まりになつたり離ればなれになつたりして、ちらちらしながら揺れ動いていた——それはちようど、夏も七月の暑い日ひざか盛りひざかに開けはなつた窓の前で、年とつた女中頭が真白に輝いている精製糖せいせいとうの棒を打ち砕いて、キラキラする破か片けらにしているとき、その上をまいまい飛び回っている蠅はらのようだ。子供たちは皆そのまわりに集まつて、槌を振りあげる女中頭の強張わばつた手の動きを、面白そうに見まもっている。ところが、軽い空気かぜに乗つた蠅はらの空軍くうぐんは、さも我われは顔がおに、遠慮会釈なく舞いこんで来て、老婆が視力の鈍い上に、太陽の光りに悩まされているのをいいことにして、この美味しい御馳走の上に、或あるいは一匹ずつ離

ればなれに、或はぎつしり塊まって集り寄る。そうでなくても、

往く先々で美味しい御馳走にありつくことの出来る豊饒な夏に飽

うまん

満した蠅どもは、別にそれを食べるのが目的ではなく、ただ己

おの

れを誇示せんがために砂糖の塊まりの上を往ったり来たりして、

前肢なり後肢なりの片方の肢で他の肢をこすったり、その肢で自

分の翼はねの下を搔いたり、二本とも前肢を伸ばして自分の頭をこす

ったりして、ここできると向きを変えると、また何処かへ飛び

去ってゆくが、再びうるさい大軍となつて飛来するのである。チ

チコフは一わたりひとぐるりを見まわす暇もなく、はやくも知事に腕

をつかまれていた。そして早速、知事夫人に紹介された。新来の

客はこんな場合にも決してまごつくようなことはなかった。彼は

官等のあまり高くもなければ低くもない中年の紳士として、極めきわて妥当なお世辞を言った。それぞれ相手を決めた幾組もの踊りの組が、一同を壁ぎわへ押しつめた時、彼は両手を後ろに組んだまま、二三分のあいだ非常に注意ぶかくその連中を眺めまわした。大概の婦人連は立派な流行の衣裳をつけていたが、中にはせいぜい県庁所在地の田舎町で手に入る程度の品で間に合わせている向きもあつた。男の連中は、何処でも同じように、ここでも二つの種類に分れていて、その一方は瘦形の連中で、この手合いは絶えず婦人のまわりに付き纏い、中でも二三の者に至つては、ちよつとペテルブルグつ児こと区別がつかない位で、非常に凝つて気のきいた型に頬鬚をととのえているか、さもなければつるつるに剃り

あげた体裁のいい卵形の顔をしていて、無遠慮に婦人連の側へ割りこんだり、フランス語で話したり、女共どもを笑わせたりするところは、ペテルブルグに於けると変りがなかった。もう一方の手合いといえ、よく肥った連中か、さもなければチチコフと同じような、つまりあまり肥ってもいなければ、そうかと言って決して痩せてもない連中で。この手合いは反対に、婦人連を横目で見やりながら後ずさりをして、知事の従僕が何処かへ緑いろの骨牌カルタを出さないかと、あたりを見まわしながら、そればかり狙っている。この連中の顔は、肥えて丸々していて、中には疣の出来たものもあり、また薄痘痕うすあばたのものもある。髪の毛は、前髪を立てたり捲まきかみ髪かみにしているのもなければ、フランス人の所謂いわゆる なに構うも



んか といった流儀のもなく、一様に短かく刈りこんでいるか、さもなければぴつたりと撫でつけている、従つて顔の輪郭かたちが一層ずんぐりしていか厳つくと見える。これがこの市の尊敬すべき役人連であつた。噫あゝ！ この世の中では、瘦形やせがたの連中よりも肥り肉じしの連中の方が確かに上手に物事をやり遂げてゆく。瘦形の連中というもの、どちらかといえば、せいぜい囑託ぐらいの勤めにありつかか、それともただ名目だけの役を当てがわれて、あちらへペタペタこちらへペタペタと、頓と尻が落ち着かず、妙にその存在がふわふわしていて、吹けば飛びそうで頼りないこと夥しい。肥つた連中はそこへ行くと決して傍系的な地位などには止どまつていないで、いつも重要な直属の地位を占め、そこに坐つたが最後、

がっちり腰を落ちつけて構えこんでしまうから、寧ろ椅子の方で悲鳴をあげてへたばつてしまふけれど、彼等自身は敢てビクともすることではない。彼等はけばけばした外見が嫌いで、著ている燕尾服も痩せた連中のほど上手な仕立ではないが、その代り金箱の中にはお宝が唸つていなのだ。瘦形の連中は、三年もすれば一人残らず農奴を借金の抵<sup>かた</sup>当に入れてしまふが、肥り肉の方は泰然と構えていながら、いつの間にか——何処か町はずれに、細君の名前で買った家がひよっこりあらわれる。また他の町はずれに別の家が建つ。それから市の近在の小村が手に入り、次いで地所や山林の完備した立派な村が我がものになる。やがてのことに肥った男は神と国家への奉公を終え、世間的な尊敬を贏<sup>か</sup>ち得て目出

たく職を退くと、田舎へひっこんで地主になる——つまり、押しも押されもせぬロシアの旦那衆として納まり、お客好きの地主となつて、後生安楽に余生を送ることになる。ところがその死後には、またもや瘦形の相続人が現われて、ロシアの習慣にたがわず、忽ちたちまにして親爺の全財産を撒き散らしてしまふのである。チコフが一同を眺めまわしながら、ぎつとこんなようなことを胸に浮かべていたことは否いなみ難がたい。その結果、彼はついに肥った連中の仲間へ入つたが、そこには、既に彼の見知り越ごしの人物が、殆んど全部そろつていた。真黒な濃い眉をした検事は、まるで『おい、君、あちらの部屋へ行こう、ちよつと話があるから』とでも言うように、左の眼で絶えずめくば胸むねせをしているような癖がある。け

れどこの男は、至極真面目まじめなむつつり屋なのだ。郵便局長は背丈のちんちくりんな男だが、しかし頓智があつて、なかなかの哲学者だ。裁判所長は非常に思慮しりよふんべつ分別のある愛嬌あいきようもの者だ——こういつた連中がみな、チチコフを古い知合いのように歓迎した。それに対して彼は、ちよつと気取つた会釈をしたが、それでも一々嬉しそうな顔つきをすることは決して忘れなかつた。その場で彼は、ひどく愛想がよくて腰の低い地主のマニローフや、見たところ聊いささかがさつなソバケーヴィツチと知合いになつたが、このソバケーヴィツチは、しよつぱなから彼の足をふんづけておいて、『やあ、御免なさい。』と言つたものだ。さつそくヴィストの札を押しつけられたので、彼は相も変らず慇懃にお辞儀をして、そ

れを引き受けた。彼等は緑いろのテーブルにむかつて陣取ると、そのまま晚餐の出るまで腰をあげなかった。何か真剣な仕事に身を入れるといつもそうであるように、会話ははたと跡絶えてしまった。郵便局長は非常に口達者な男であったが、その郵便局長ですら、骨牌の札を手に取ると同時に、その顔に仔細しさいらしい表情を浮かべて、上唇を下唇でかくしたまま、勝負がつづいている間じゆう、その容子ようすを変えなかった。彼は絵札を出す時には、片手でトンとテーブルを叩いて、それがクイーンなら『さあ行け、老耄おいぼれの梵妻ほんさいめ！』またキングなら『行っちゃまえ、タンボフ県の土百姓め！』などと捨台詞すてぜりふを言ったものだ。そうすると裁判所長がこんなことを言った。『じゃあ、僕がそいつの髭っ面をこう切

つてくれるわき！ その女の髭つ面もこう切つてな！』時にはまた、札がテーブルへ叩きつけられるたんびに、『えい！ 伸るか  
そるかだ、他にないからダイヤと行こう！』などと掛声がかけられる、そうかと思うと、簡単に『そら、ハートだ！ ハートの虫  
つ喰いだ！ スペ公だ！』とか、『スペード野郎だ！ スペード  
女だ！<sup>あま</sup> スペつ子だ！』とか、また、もつと簡単に『スペだ！』  
と呶鳴<sup>どな</sup>つたりする。これは、この仲間うちで各々の札につけ替  
えた名前である。一勝負かたづくつと、例によつて例の如く、かな  
り騒々しく議論を闘わした。わが新来の客も同じように議論に加  
わつたけれど、ひどく要領がよかつたので、一同は、この男は議  
論をしながら、それでいて氣持<sup>きもち</sup>の好い科白<sup>せりふ</sup>を使うわいと思つた。

彼は決して、『おいでなすったね』などとは言わないで、『はあ、そうおやりになるのですね、ではこの二はひとつ切らせて頂きますよ』などといった調子である。何事かを自分の敵に一層よく納得させようと思うと、そのたんびに彼はエナメルをかけた銀の嗅煙草入を相手の前へ差し出した。その底には、香りをよくするために、董の花が二つ入れてあるのが眼についた。特にこの旅人は、前に述べた地主のマニローフとソバケーヴィツチに注意を向けていた。彼は早速、裁判所長と郵便局長をちよつと傍らへよんで、二人の身の上を訊き糺した。彼の持ちかけた若干の質問から、このお客の肚には単なる好奇心ではなく、何か下心があるのだということが領かれた。というのは、彼はまず何より真先に、二人

がそれぞれどのくらい農奴を持っているか、また領地はどんな状態に置かれているか、などということをも、根掘り葉掘り訊ねてから、初めて、名前や父称を訊いたからである。彼は忽ちたちまのうちにこの二人をすっかり俘虜とりこにしてしまった。地主のマニーロフは、まだ決してそれほど年配ではなく、砂糖のように甘ったるい眼つきをしていて、笑うたんびにその眼を糸のように細くする男であつたが、このお客にすっかり夢中になつてしまつた。彼はとても長いことチチコフの手を握りしめながら、とても熱心に、是非いちど自分の村へも御来駕ごらいがの栄えいを賜りたいと懇願した。その村は彼の言うところによれば市の関門からほんの十五露ヴェルスト里しか離れていないとのことである。それに対してチチコフは、非常に鄭



重に頭をさげ、心をこめて相手の手を握り返しながら、自分は大喜びでそのお招きに応ずるばかりでなく、貴村を訪問するのを最も神聖な義務と考えるなどと答えた。またソバケーヴィツチも、これは極めてあっさりとして、『僕の方へもどうぞ』と言つて、途方もなく大きな靴をはいた足でがたりと足擦りあしずをしたものだが、だんだん豪傑というものが影をひそめてきた当節では、いかなロシアにも、こんな図体の靴に合う足が果してあるかどうか疑わしい位だ。

翌る日、チチコフは警察部長のところの午餐と夜会に招かれ、午後の三時からヴィストをやり出して、夜中の二時まで勝負をつづけた。その間、かんここで地主のノズドウリヨフと知合いになつた

が、それは年のころ三十ぐらいの、すばしっこい元気者で、二言か三言、口をきいただけでもう、『君、君』と言うようになった。警察部長や検事に対しても、ノズドウリヨフはやはり『君、君』で、極めてぎつくばらんにふるま振舞っていた。けれど賭の大きい勝負が始まると、警察部長も検事も非常に注意ぶかく彼の取り札を見張り、この男の出す札にいちいち眼を配っていた。その翌日、チコフは裁判所長のところで一いつせき夕を過ごしたが、この人はお客に接するのに少し垢じみたへやぎ寛衣を著きていた。然しかもそのお客の中には何でも婦人が二人もまじっていたのだ。ついでチコフは副知事の家の夜会に出席したり、徴税代弁人の家の大午餐会に出たり、検事の家のささやかな、とはいえ金のかかった午餐に招かれたり、

市長の催しにかかる、これも殆んど午餐に等しいようなお茶の会によべれたりした。一口にいえば、彼は一時間として家にじっとしていることが出来ず、宿へは、ただ寝に帰るだけであつた。この新来の客は、どんな場合にも決してまごつくようなことがなく、いかにも世故に長けた人間であるという実じつを身をもつて示した。どんな話題が出て、いつでもそれに巧くばつを合わせる事が出来た。例えば馬の飼育が話題にのぼれば、彼は馬の飼育について話し、優良な犬の話が出れば、それにも極めて剴がいせつ切な意見を述べ、県本金庫の手で行われた審査について議論がはじまれば、裁判上のからくりにもまんざら無智でないことを示し、玉突の話が出れば、玉突の話でも決してへまなことは言わなかつた。慈善

のことが話題にのぼると、慈善についても実に立派な意見を述べて、あまつさえ眼めがしら頭に涙さえ浮かべたものだ。燗酒のつくり方について話が出たら、燗酒のこつをちゃんと知っており、税関の役人や監視人の話になると、まるで自分自身が税関役人か監視人ででもあったような塩梅に、そういう連中の噂をしたものだ。しかも刮かつもく目に値するのは、必らずこういう話を一種厳肅な調子で包み、その場に適ふさわしい態度を保つ心得のあったことである。彼の話し声は高すぎもしなければ、低すぎもしない、ちょうど頃あいの声であった。一言にしていえば、どちらへ向けても、彼は実に申し分のない人間であった。役人たちはこの新らしい人物の出現に、一人残らず好感を抱いた。知事は彼のことを、誠に心掛け

の好い男だと言ひ、検事は——道理を弁わえた男だと評し、憲兵大佐は——学者だと褒め、裁判所長は——なかなか物知りで、尊敬すべき人物だと持ちあげ、警察部長は——尊敬すべくまた愛すべき男だと讃え、警察部長の細君は——とても優しく、愛想のいい方だと言つた。滅多めったに人のことを好く言わないソバケーヴィツチですら、市まちからかなりおそくなつて帰宅すると、すっかり着物をぬいで、痩せ萎びた細君の横へ入つて床につくなり、こう言つて話しかけたものだ。『なあ、お前、きようは知事んとこの夜会へ出たし、部長んとこで昼飯を食つたがな、パーウエル・イワーノヴィツチ・チチコフつていう六等官と知合いになつたよ。まつたく氣持の好い男さ!』それに対して奥方は『ふん!』と答えて、

良人おつとを足で小突いた。

こういつた我らの客にとって誠に悦ばしい評判が、市じゆうにひろまって、それは、この客のある奇怪な本性と、企らみというか、それとも田舎でよくいう『やまこ』というやつが、殆んど全市を疑惑のどん底へ突き落とすに至るまで、ずっと続いたのであるが、その経緯いきさつについては、間まもなく読者の探知するところとなろう。

\*1 ワシーリイ・フォードルフ これは明らかに純然たるロシア名前であるのに、特に『外国人』と称しているところが滑稽である。

\*2 双頭の鷲のついた看板 当時、酒類は政府の専売となつ

ており、酒場よりの収入が帝室の歳費に繰り入れられていたため、酒場の看板に帝室の紋章がつけてあったのである。

## \*3

コツエプー アウグスト・フリードリツヒ・フェルジナンド (1761-1819) ドイツの劇作家。十七世紀末と十八世紀初頭の二期に亘りロシアに在住し、後にウィーンの帝室劇作家となったが、間諜の嫌疑によって死刑に処せられた。

## 第二章

旅の紳士は、もう一週間以上もこの市に逗留<sup>まち</sup>して、夜会だの午餐会だのといつて方々へ出歩きながら、まあいわば、面白おかしく時を過ごした。そこで今度はいよいよ訪問の銚先を市外に向けて、予<sup>かね</sup>ての約束を果すために地主のマニローフやソバケーヴィツチを訊ねることにした。こう彼が肚を決めてのは、どうやら他にもっと肝<sup>かんじん</sup>腎な理由があつてのことらしい——もっと真剣で、切実な問題が……。それは、しかし読者にこのさきを一通り辛抱して読んでいただければ、やがてだんだん分つて来るはずである。



とにかくこの物語は頗る長くて、しかも華々しい大団円に近づくに随い、いよいよますます大規模になつて行くものとご承知ねがいたい。さて、馭者のセリファンは、朝早く例の半蓋馬車ブリーチカに馬をつけるように言いつけられた。ペトウルーシカは宿に残つて部屋トランクと旅行鞆の番をしておれとの命令だ。ここで、本篇の主人公に仕えている、この二人の農奴を読者に紹介しておくのも、あながち余計なことではあるまい。無論、こんな連中はそれほど重要な人物ではなくて、いわば二流、或は三流どころに過ぎず、この叙事詩の主なる発展や動機が決して彼等に由来するのではないのだから、とどころで言及するにしても、極くあつさりあしらつておけばよい訳であるが、しかし作者は万事につけて几帳面なことわたし

が非常に好きで、この点では元来ロシア人であるにも拘らず、ドイツ人のように綿密でありたいと希うのである。と言ったところで大して時間も場所も費えることではない。それは、読者が既に御承知のこと、つまりペトウルーシカが旦那のおさがりの、少々ゆるすぎる羊羹色のフロツクコートを著<sup>き</sup>ており、こういう階級の人間には得てありがちな、おそろしく大きな鼻と唇を持っているということに、ほんの少しばかり附け足せばよいからである。彼の性質は、口数が多いというよりは寧<sup>むし</sup>ろしんねりむつつりの方で、常に教養を高めようという誠に殊勝な心掛けさえもついていた。つまり、それは書物を読むのが好きなことであるが、尤<sup>も</sup>もその内容の如何<sup>いかん</sup>などはちつとも問題にしなかつた。恋に落ちた主人公の波

瀾曲折の物語であろうと、単なる初等読本であろうと、乃至は祈祷書であろうと、彼にとっては全く何の変りもなかった——どんなものでも同じように注意を払って読んだ。で、もし彼に化学の本を宛<sup>あて</sup>がったとしても、やはりそれを拒みはしなかつただろう。読む本の内容よりも、寧<sup>むし</sup>ろ何かものを読んでいるということ、更に的確にいえば、ものを読んでいる経過が好きなので、なるほど字というものが寄り集まると何かしらきつと言葉が出来あがるが、時にはそれが何のことだかさっぱり分らないわいと言った具合である。読書は大概、控室で、寝台の蒲団の上に寝そべてやったもので、その結果、蒲団がまるで煎餅のように固い薄っぺらなものになってしまったのである。この読書に対する熱情のほかに、

この男にはもう二つ習性くせがあつて、それが別の二つの特徴をなしていた。それは、着物をぬがないで、著きのみ著きのまま、例のフロックコートそのままで寝ることと、妙に世帯染しよたいじみたような一種独特な臭いのする特別な雰囲気を始終身のまわりに漂わせていることで、それがために彼が何処かに自分の寝台を据えつけるなり、外套がくだの身のまわりの品だのを持ちこんだが最後、たといそれまでは人氣ひとけのなかつた空き部屋あまでも、忽たちまち十年も前から人の住んでいた部屋のようになるのであつた。チチコフはおそろしく潔癖で、時には氣難すがすがかしいくらいすがすがの男であつたから、朝などその臭いがプーンと爽すがすが々すがすがしい鼻を見舞うと、たちまち眉をしかめて、首を横に振り振り、こう言つたものである。『おい、どうも堪らなくお

前は汗臭いぞ。銭湯へでも行けばいいのに。』それに対してペトルーシカは返辞<sup>へんじ</sup>一つしないで、壁にかかっている主人の燕尾服にブラシを掛けるとか、ただちよつとそこいらを片づけるとか、さつさと何か仕事に取りかかったものである。こうして黙りこんでいる時には、いったい彼は何を考えているのだろうか？ 恐らく肚の中ではこんなことを呟やいていたのかもしれない。『だがね、お前様だつて、ずいぶんお目出たいやな、よくもまあ倦<sup>あ</sup>きもしねえで、おんなじことを繰り返し繰り返し、四十遍も言つてなさるだ……』だが、主人から訓戒を与えられる時、下男というものが一体どんなことを考えているか、それは神様にだつて分るものではない。だから、ペトルーシカについても、先<sup>ま</sup>ずさしあた

りこの位のことしか言えない訳である。ところで馭者のセリフア  
ンとくると、これとはまるで別な人間で……。だが作者は、こう  
いつまでも読者諸子をこんな下等な人物の相手に引きとめておい  
ては、甚だはなは気が咎とがめる。というのは、これまでの経験から、読者  
というものが下層階級の人間と知合いになることを余り悦ばない  
ことをよく知っているからだ。ロシア人という奴は兎角とかくそうで、  
自分より一級でも位の上の人間には、躍起やつきになって接近したが  
り、伯爵や公爵にちよつと会釈でもして貰える方が、仲間同士のど  
んなに親密な友情より嬉しいのだから仕方がない。作者は本篇の主  
人公がかつかつ六等官に過ぎないということが既にきがか気懸りな  
のである。七等官あたりなら、まだしも彼と相識ちかづきになつてくれるか

も知れないが、もう勅任官ちよくにんかんの位を贏かち得たほどの人物だった  
ら、おそらく、誰でも自分の足許あしもとに這いつくばうものに向つて  
傲然として投げつける、あの侮蔑に充ちた眼差まなざしをなげることだ  
ろう。いや、罷り間違まかえば、作者にとつては全くもつて致命的な、  
黙殺という憂目うきめに逢うかも知れないのである。しかし、それやこ  
れやが如何いかに辛くても、やはり主人公のことに話を戻さなければ  
なるまい。で、もう前の晩に必要な指図を与えておいたチチコフ  
は、翌あくる朝とても早く眼を覚ますと、さつそく顔を洗い、水をし  
ませた海綿で頭の天辺てっぺんから足の爪先まで軀からだをよく拭ぬぐつた——こ  
れは日曜日だけにだけすることであつたが、ちようどその日が日曜に  
當つていたのである——それから頬が本物の縹しゆす子のようにすべす

べして光沢つやの出るまで丹念に顔を剃りあ、まずピカピカ光る蔓苔つるこけ  
桃ももいろの燕尾服を著きた上へ大きな熊の毛皮の裏をつけた外套を  
引っかけて、旅館の給仕に、或は右側から、或は左側から腕をと  
られながら階段を降りて、例の半蓋馬車ブリーチカに乗りこんだ。ガラガラ  
と音をたてながら、馬車は旅館の門をくぐって通りへ出た。通り  
すがりの坊さんが帽子を脱とり、汚れたシャツを著た子供が四五人、  
一様に手を差し出して、『旦那、孤みなしご児こに何かやっておくんない！』  
とせがむ。その中の一人がしつこく馬車の後ろの馬丁台ばていに乗つか  
つて来るのを見つけた馭者が、いきなりそれを鞭でひっぱたいた。  
馬車は石ころに跳ねあがりながら駈けて行つた。だんだらに塗つ  
た関門の柵が遙か彼方に見え出すと、これでようやく、他のあら



ゆる苦痛の終りと同じく、有難いことに、間もなく敷石道がしま  
いになることが分り、それからもう二三度、馬車の車体にかなり  
ひどく頭をぶつけた挙句あげく、やっとチチコフは柔らかい土の上へ運  
び出されたのであつた。市を後にすると同時に、例によつて例の  
如く両方の道端に、やれ丘がある、もみばやし 樅林がある、こまつばやし 小松林の  
背の低いのや疎まばらなのがある、焼け残りの老木の幹がある、しやく 石  
なげ 楠があるといったような、およ 凡そ愚にもつかぬ有象無象の描写に  
かからなければならぬのだ。紐のようにだらだらと長い部落に  
もさしかかった。その家々が、まるで古い薪を積みかさねて灰い  
ろの屋根を被せたような恰好で、その屋根の下には、よく壁に掛  
けてある手拭てぬぐいの刺繡模様みたいに、木で彫刻をした裝飾がつい

ている。羊の毛皮の外套を著た二三人の百姓が、門の前の腰掛こしかけに坐つて、申し合わせたように欠伸をしている。上の窓からはちきれそうな顔をして、乳房をぎゅつとつつんだ百姓女が覗いておれば、下の窓からは、仔牛が顔をのぞけたり、豚が盲めくら滅めつぼう法はうにはなつら鼻面はなづらだけ突きだしている。要するに陳腐な光景である。チチコフは十五露ヴエルスト里ヴエルストの里程標をとおり過ぎながら、マニローフの言葉によると、この辺に彼の村がある筈だと思つた。けれど十六露ヴエルスト里またの里程標も瞬またたく間にとおり過ぎてしまったのに、村らしいものはいっこう眼につかなかつた。で、もしそこへ二人の百姓が来あわせなかつたら、彼は満足に目的地へ達することが出来たかどうか、ちよつと怪しいものであつた。『ザマニロフカ村はま

だ遠いかね?』という質問に対して、二人の百姓は帽子を脱とつたが、その中の一人で、少し利口そうに見える、楔形の顎鬚を生やしたのが、『ザマニロフカじゃござえめすめえ、おおかたマニロフカでござえましよう?』と答えた。

「そうさ、そのマニロフカだよ。」

「マニロフカですかね! それなら、このままもう一露ヴェルスト里ばばかり行かつしやると、ちようど右手にあたりますだよ。」

「右手かい?」と、馭お者うむががえ鸚お鵡うむ返がえしに念をおした。

「右手だよ。」と、百姓が答えた。「そう行けばマニロフカへ出られるだよ。だが、ザマニロフカなんちゆう村はこけえらにやねえだ。あの村はそう称よぶだ、つまりその地名がマニロフカちゆ

うだ。ザマニロフカなんちゆうところは、こけえらにや頓とんとねえだ。で、そこへ行くちゆうとな、真直まっすぐに、山の上に、石造りの二階建が見えるだ。それが地主様のお邸で、つまりそこに旦那が住んでござるだよ。そこが、お前さんのいわっしやるマニロフカで。だが、ザマニロフカなんちゆう村はこけえらにやありもしねえし、あつた例ためしもねえだよ。」

マニロフカを探し索もとめて馬車は駈けだした。二露里ほど走ると、村道へ外それる曲り角へ来たが、それからまた二露里どころか、三露里も、四露里も走ったけれど、その石造りの二階建なんてものは、さつぱり見当みあたらなかつた。ここでチチコフは、友達から十五露里ほどだと言つてその村へ招待されたら、てつきりそこまでは

三十露里もあるのだ、ということを想いだした。マニロフカはその位置の関係から、訪ねる人も至って少なかった。地主館やかたは一つだけぼつねんと四方を見晴らして立っていた。つまり高台の上にあつて、風があり次第、どちらからでも吹き曝さらしになつていたのである。その邸のある丘陵の斜面は、きれいに刈りこんだ芝生に蔽おおわれていた。そこには、紫丁むらさきはしどい香花はりえにしだや黄いろい針金雀児はりえにしだの株を植えこんだ、イギリス風の花壇が二つ三つ散在し、五六本の白樺がそこここに小さい木立となつて、細かい葉をつけた疎らな木こ梢すえをもたげている。その中の二本の木蔭には、青い木の柱に平べつたい緑いろの円屋根まるやねをつけた四阿あずまやが見え、それには『静思せいしあ庵あん』と銘がうつてある。その少し下には、青い浮草で蔽われた

池があるが、しかしこれは、ロシアの地主連が持つているイギリス式の庭園には別に珍しいものではない。この丘の麓ふもとや、また一部はその斜面さかにかけて、灰色っぽい丸太造りの百姓家がべた一面に黒々と群がっていた。我々の主人公は、どういう理由わけか知らないが、それを一目見るなりその戸数をかぞえはじめ、二百軒以上あることを確かめた。家と家との間には一本として樹木らしいものも青いものの姿も見られなかった。到るところ、見えるものはただ小屋組こやぐみの丸太ばかりであった。その光景に生気をそえるように、二人の百姓女が、絵に描いたように着物をまくりあげ、くりと裾はしよを端折はしよつて、膝ひざまで水につかりながら、二本の木の竿に結びつけた破れた曳網ひきあみをひっぱって池の中を歩いていた。網には

ざりがに

蛄が二匹ひつかかっていたし、鯉も一尾網の中で光っていた。女たちは、どうやら喧嘩でもしているらしく、何かしきりに唾いがみあっている。そこから少し片側へよったところに、松の林が妙にくすんだような青さで黝くろずんでいた。天気具合までが、まったくお誂えむきで、その日はからりと晴れているのもなければ、曇っているでもない、一種の明るい灰いろを帯びていた。こういった色合いは、あの、ふだんは至っておとなしいが日曜だと間々まま酔っぱらう連中を見受ける衛戍兵えいじゆへいの著きている古い軍服によくあるものだ。画面を補うために、雄鶏も一羽ちゃんと登場していた。謂いわゆる天候の変化の予言者であるが、こいつは、言わずと知れた恋の意趣から他の雄鶏どもの嘴くちばしにかかって、頭に脳味噌がとびだす

ほどの傷を負わされていたが、平気なもので、大きな声を張りあげてときをつくり、あまつ剩さえふるむしろ古ふるむしろ 蓆むしのように引き撈むしられた翼はねでバタバタと羽搏はばたきをやらかしていた。邸に近づきながらチチコフは、入口のポーチの上に他ならぬ主人あるじの姿を見つけた。マニローフは緑いろのシャロン織おりのフロツクコートを著て突つ立つたまま、眼の上に庇ひさしを拵こしらせるような恰好に片手を額にかざして、乗りこんで来る馬車の正体を見届けようとしていた。半蓋馬車ブリーチカがポーチに近づくとつれて彼の眼はだんだん嬉しそうになり、相好そうごうが次第に崩れて行った。

「パーウエル・イワーノヴィツチ！」と、彼はチチコフが半蓋馬車チカから降りたつた時、とうとう叫び声をあげた。「それでもまあ、



よく手前どものことを憶えていて下さいましたねえ！」

二人の友人同士が非常に力をこめて接吻を交わしてから、マニ  
ーロフはお客を部屋の中へ招しょうじ入れた。二人が玄関から控室を通  
つて食堂へと抜けて行くだけの間では、少し時間が足りないけれ  
ど、何とかその暇を利用して、この家の主人あるじについて少しばかり  
語ってみようと思う。しかし作者は、こういった企てが甚だ困難  
であることをここで告白しなければならぬ。もっと大人物の描  
写をするのだったら、ずっとその方が楽で、それならただもう縦  
横無尽えのぐに絵具を画布へなすりつけてからに——黒い、射るような  
眼と、垂れさがった眉と、皺しわの深く刻まれた額と、肩に投げかけ  
られた真黒かまたは燃えるような緋のマント——そういったもの

を描きさえすれば、肖像はちゃんと出来あがる。ところが世の中には、どれもこれも似たりよつたりの顔をしているくせによくよく見ると実に微妙な特徴を多くそなえた人物がざらにあるもので——こういう人物の肖像を描く段になると、なかなかおいそれとはゆかない。何しろ、そのデリケートな、殆んど眼にもとまらないような特色が残りなく自分の眼がんぜん前にほうふつ髻あがとして浮かび上るまでは、じつと精神を緊張させていなければならず、しかもあまり探求に凝って過敏になつた眼というものは、とかく見当違いな深入りをするものだからである。

マニローフが一体どんな性格の男であつたかは、神より他には、何とも言うことが出来ないだろう。世間には、諺にもあるとおり、

都の名士でもなければ、村のどん百姓でもない、どつちつかずの中ぶらりん という尊称あまねで普く知られている人種がある。マニ—ロフも多分、この仲間に入れるべき人物だろう。見たところ風采も堂々としており、顔だちにも気持の好いところがあるけれど、どうもその気持の好きには、ちと砂糖が利きすぎているようだ。又その素振りそぶや物腰ものこしには何かしら相手の好意と知遇おもに阿ねるようなどころがある。彼が笑うととてもチャーミングで、髪は薄色で、眼は蒼かった。この男と話を始めると、最初は誰でも、『なんて気持のいい善良な人だろう！』と言わずにはいられない。ところが次ぎの瞬間には、何も言うことがなくなり、それから今度は、『ちえつ、まるで得体えたいの分らぬ男だ！』と言って引き退さがるよ

り他はない。引き退らずにいたものなら、きつと死ぬほど退屈な  
思いをさせられるに違いない。誰だつて自分の氣にさわるような  
ことを言われたなら、少しは生気のある、時には横柄おうへいな口さえ  
きくものであるが、この男から、そんな思いきつた言葉を期待す  
ることは断じて出来ない。人間にはそれぞれ情熱というものがあ  
る。或る人は、それをボルゾイ犬に傾注する。また或る人は自分  
が大の音楽通で、どんな深遠な妙所でも聴き分けることが出来る  
と思ひ込む。そうかと思うと、恐ろしく巧者ぶつた飯の食い方を  
したがる人もあり、また自分に宛がわれた役割よりほんのちよつ  
ぴりでも上の役を演じたがる人がある。また或る人はずつとけち  
な望みしか抱いておらず、せめて侍従武官と一緒に散歩でもして

いるところを自分の友達や知合いや、赤の他人にまで見せびらかしてやりたいなどと寢床の中で夢想する。或る人はまた、ダイヤの一か二の札を威勢よく打ち出してやろうなどという飛んでもない野心でうずうずしているような手を授かっており、そうかと思うと或る人の手は、ともすれば得手勝手えてかってを通そうとして、駅長や馭者の頭上へ飛んでゆく。——要するに、誰でも皆めいめい自分の個性を發揮したがるものだが、マニローフには全然そんなところになかった。家では口数もあまりきかず、大抵たいてい、何か考えこんで物思いに耽ふけっているが、一体何をそんなに考えているのか、そいつは神様にだつて分ることじゃない。農事に携たずさわっているなどとは、間違つても言うことが出来ない。第一、野良へなど出か

けた例しが一遍もないのだ。それでも、どうやら仕事の方で勝手にかたがついてゆくようだ。管理人が『旦那様、これこれこういう風にしたらよろしいでしょう』と言えば、『うん、それも悪くなかろうね』と答えながら、いつも煙管をすばすばやっているが、煙草は彼がまだ軍隊に勤めていて、誰よりも温和で、思いやりが深くて、教養のある士官だと思われていた頃から喫すいなれていたのだ。『うん、まったくそれも悪くなかろうね』と彼は繰り返す。百姓がやって来て、頭を搔きながら、『旦那様、済みましねえが、仕事を休ましておくんなせえ、税金を稼ぎに行きてえだから。』と言えば、『ああいいとも』と、いつも例の煙管をスパスパやりながら許しを与えるが、その百姓が酒を喰らいにゆくのだなどと

は、夢にも考えたことがない。時おり彼はポーチの上から庭や池を眺めながら、ひとつ地下道をつくって家から真直ぐに行かれるようにしたらいいとか、池の上に石橋を架けて、その両側に屋台店をひらき、そこへ商<sup>あきんど</sup>人を坐らせて、百姓に入用な細<sup>こまじま</sup>々々した雑貨でも売らせるようにしたら素敵<sup>すてき</sup>だなどと言ったりする。そんな時、彼の眼はひときわ甘ったるくなり、顔にはさも満足らしい表情が浮かんだものだ。しかし、こうした計画はただ口先だけで、いつもそれなりになってしまふのだ。彼の書齋には、一冊の本が四六時中、十四頁目のところに葉<sup>しおり</sup>をはさんだまま置いてあったが、それを彼はもう二年越し読んでいるのである。彼の家では、いつもきまつて何かしら欠けていた。例えば客間には素晴らしい家具

が並んでいて、それには定めし高い金をかけたらしい、粹いきな絹布けんぷが張つてあつた。ところが二脚の安楽椅子には、その布が足りなかつたと見えて、粗い麻布を張つただけで並べてある。尤も主人もつとは、この数年間というもの、お客のあるたんびに、『その椅子にはお掛けになつちやいけませんよ、実はまだ仕上げが出来ておりませんので。』と、前もつて断わりをいつた。また或る部屋には全然家具らしいものが具えてなかつた。ほんとうは、新婚早々、細君にむかつて『ねえお前、明日にもこの部屋に、たとえ一時しのぎにでも、家具を入れることにしようね』などと言つたものだ。晩になると、くすんだ青銅で三人の美の女神を象かたどり、しやれた真珠貝ひよけの火除ひよけをつけた、非常に優美な燭台がテーブルの上へ出さ



れたが、それと並べて、脚がびつこで、一方へ傾き、おまけに蠟の滓が一面にこびりついた、粗末ながらくた同様の銅の燭台が置いてあつても、主人をはじめ、主婦も、召使たちも、一向それを異としない。彼の細君はといえは……、ところでこの夫婦は互いに満足しきつているのだ。二人が結婚生活に入ってからもうかれこれ八年の余にもなるのに、今だにどちらか一人が相手のところへ、そつと林檎の一切れだの、金平糖だの、胡桃だのを持って来て、水も漏らさぬ愛情を表わす、とろけるような甘ったるい声で、『さ、ああと口をおあきなさい、美味しいものを入れてあげますから』と言う。そうすると、いうまでもなく、相手の口はいともしおらしく開けられたものだ。誕生日などには、例えば

ビーズ刺繍の小楊枝入こようじいれといった風な、相手の思いもかけぬような贈物おくりものが用意される。又これは始終あることだが、二人が長椅子に掛けてある時など、よく不意に、いったい何がきつかけになるのかまるで見当がつかないけれど、一方が煙管を手から離すと、片方も、その時手すさびにしていた仕事を傍らへ押しやって、二人は身も心も溶け入るような、長い長い接吻を交わしたもので、しかもその長いことといったら、細巻の葉巻なら一本は楽に喫のみ終ることが出来るくらい続くのである。要するに、円満な夫婦とはこんなものだといわんばかりであった。勿論こんな長つたらしい接吻や、相手を吃びっくり驚させるような贈物に耽たつてゐること以外に、家の中には他の用事がさらにあつたり、またいろんな煩わづらわし

い問題が次々と起こつてもくるのだ。例えば、どうして台所では、ああ無闇矢鱈むやみやたらに料理を拵こしらえるのか？ どうして蔵の中があんなに空からになつてゐるのか？ どうして女中頭はああ手癖てくせが悪いのか？

どうして下男どもはあんなに不潔で、いつも酔っぱらつてばかりゐるのか？ どうして召使たちはあんなにだらしなく、どうもこいつも寝てばかりいて起きている間はいつも悪戯わるさばかりしてゐるのか？ といったようなことだ。しかし、こんなことはみな甚だ低級な問題だが、一方マニローワ夫人は、実に立派な教育を受けた御婦人ときている。ところで、立派な教育というやつは周知の如く寄宿女学校で授かるもので、その寄宿女学校ではこれまた周知のとおり、三つの主なる題目が婦徳ふとくの基礎となつてゐる。

第一にフランス語で、これは家庭生活の幸福のために欠くべからざるもの、第二はピアノで、これは良人に愉快な時を過ごさせるため、そして最後に、ようやく本来の家事、つまり巾着きんちやくやその他のいろんな贈物を拵もつともえることが挙げられている。尤も、その教授法に種々の改善や変更の施されることが、殊ことに現今に於いては甚だしく、これは主として、その寄宿学校を經營してござる女の校長先生の常識と伎倆によつて左右されるものである。で、或る寄宿学校ではピアノを第一にし、それからフランス語、そして最後に家事という順序でやっているところもある。またどうかすると家事、つまり贈物の手芸を第一に置き、次ぎにフランス語、最後にピアノというやり方のところもある。とにかく、いろいろな方

式がある訳だ。ところで、もう一つ、こんなことを指摘するのも妨げにはなるまい、つまりマニーロワ夫人は……だが、正直なところ、どうも御婦人がたについてかれこれ申しあげるのは甚だもつて心こころもと許無い次第で、それに、もうそろそろ我々の主人公たちのことに戻らなければなるまい、というのは、もう二三分の間、二人は客間の扉口の前に立ったまま、互いに先を譲りあっているからである。

「どうかまあ、そんな御斟酌ごしんしゃくには及びませんよ。手前は後から入らせて頂きますから。」と、チチコフが言うのである。

「いや、それあいけませんよ、パーウエル・イワーノヴィツチ、あなたはお客さまですもの。」そう言いながら、マニーロフが片

手で扉口を指さした。

「まあ、まあ、そんなに仰おつしやらないで、どうかお先へ。」と  
チチコフが言った。

「いや、何と仰つしやっても、あなたのような実に気持のいい、  
お偉いお客さまを差しおいて私風情ふぜいがお先に立つなんて、断じて  
出来ることじゃありませんよ。」

「どうしてまた、手前が偉いなんて?……さあ、どうかお通りく  
ださい!」

「まあ、とにかく、あなたからお先さきへ。」

「これは又、どうしてでしょうね?」

「どうもこうもあるもんですか、さあ!」と、気持の好い笑を含

みながらマニーロフが言った。

結局、二人はからだ軀を据じ向けて一緒に扉口へ入ったので、互いに少し揉みあつたものだ。

「では一つ、家内を紹介させて頂きましょう。」と、マニーロフが言った。「ね、お前！　これがパーウエル・イワーノヴィツチさんだよ！」

チチコフはマニーロフと入口でお辞儀ばかりしあつていたので、それまで少しも気がつかなかったが、この時はじめて一人の婦人の姿をみと認めた。なかなか美人で、顔に相応しい服装をしていた。白っぽい絹布のガウン寛衣が彼女に大変よく似合っていた。細ほっそりした可愛らしい手が、何か持っていたものを急いでテーブルの上へ

なげ捨てる、四隅よすみに刺繡のついたバチスト麻のハンカチを握りしめた。彼女は腰かけていた長椅子から立ちあがった。チチコフはまんざら悪くもなさそうな面持おももちで、彼女の差し出した小さい手に口を近づけた。マニローワ夫人は、少し甘えたような口調で、御来訪にあずかってとても嬉しい、殊に主人などはあなたのお噂をしない日は一日としてなかつたなどと言った。

「そうなんですよ。」と、マニローフもそれに相槌を打った。

「もう毎日のように彼女これが訊くのです。 どうして、あなたのお友達はいらつして下さらないのでしょうか？ 　つてね。で、まあ待つておいで、今においでになるから 　と、いつも宥なだめていたのですよ。ところが、とうとう望みが叶つて、お訪ねにあずかった



訳です。まったくこんな嬉しいことはありません——まるで五月祭りか……盆と正月が一緒に来たような気持ですよ……。」

とうとう話が盆と正月と一緒に来たなどというところまで発展しては、流石さすがのチチコフも少々てれてしまって、自分は大きくて名声を博している人間でもなければ、どれだけ立派な官等をもつ者でもない、慎ましやかに弁解した。

「いや、あなたにはどちらもありません。」と、マニーロフが相も変らぬ気色のいい微笑をたたえながら遮った。「どちらもありません。いや、それ以上ですよ。」

「市まちはいかがでして？」と、マニーロフが口を出した。「御愉快にお過ごしになりましたか？」

「たいへん立派な市まちです、素晴らしい市まちですよ。」と、チチコフが答えた。「とても愉快に過すごしました。なにしろ社交界の方々が至いたつて御親切ですからね。」

「あの知事さんをどうお思いになりました？」と、マニーロフが訊きねた。

「いや、まったく見あげた、また実に愛想のいい人物でしょう？」と、マニーロフが言い足した。

「まったく仰せのとおりで。」と、チチコフが言った。「この上もなく立派な方ですね。それに、御職ごしよくしやう掌てがびったり板いについていますよ！ ああいう人がもつと沢山あるといいんですがねえ。」

「ほんとに、どうしてああ誰だれ彼かれなしに寄せつけながら、その癖、自分の振舞いにちゃんと節度を保つことが出来るのでしょうかね。」  
マニローフはにこにこ笑いながら、そう言い足したが、まるで耳の後ろをそつとくすくす擦られる時の猫のように、いかにも満足らしく、糸のように目を細くしたものだ。

「実に親切で気持の好人ですねえ。」と、チチコフはつづけた。  
「それに何という器用な人でしょう！ まったく私には思いもよらなかつたことですが、あの方は御自分で実に上手にいろんなろ刺ざしをされるんですからねえ！ お手製の財布を見せて貰いましたかね、あんなに巧く刺ぬ繡いの出来る人は、御婦人がたにも滅多にありませんよ。」

「それから副知事も、なかなか好い人じゃありませんか？」と、マニーロフはまたしても眼をちよつと瞬いて、言つた。

「いや、実に立派な方です。」と、チチコフが答えた。

「それじゃあ、あの警察部長をどうお思いになりますか？ まつたく気持ちのいい人間じゃありませんか？」

「非常に気持ちのいい人です、それに実に利口で、博学な方です！」

私はあの人のところで、検事や裁判所長といっしよに、さんばん三番どり鶏の鳴く頃までヴィストをやりましたよ。実に、実に立派な人です！」

「では、あの警察部長の奥さんを、どう御覧になりました？」と、マニーロフが口をはさんだ。「ほんとお優しい方でございます

よう？」

「ああ、あれは私の知っているかぎりの、最も立派な御婦人の一人ですよ。」と、チチコフが答えた。

それに次いで、裁判所長や郵便局長が話題にのぼった。こんな具合に、市の役人は殆んど一人残らず品定めをされたが、結局どれもこれも皆この上もなく立派な人物ばかりだということになった。

「あなた方は始終、村でお暮らしになつていらつしやるのですか？」と、やっと今度はチチコフの方から質問した。

「主に村にいますがね、」と、マニーロフが答えた。「でも、時には教育のある人たちに逢うために市まちへも出かけますよ。いつも

井の中に閉じこもっていては、野暮くさくなりますからね。」

「いかにも御尤ごもつともで。」とチチコフが肯いた。

「それあ尤もつとも、」と、マニローフは言葉をついで、「近所に好い友達でもあつて、例えば、何かこう、世辞愛想や立派な応対ぶりの話をしたり、精神を目覚すような学問の話などの出来る相手でもあれば、また格別ですがね。それこそ、いわば天へも昇る心こころ

持もちになつて……。」ここで彼は何かまだ言いたそうであつたが、

少し法螺ほらを吹きすぎたのに気がついて、ただ宙に手を一つ振つただけで、こう言葉をつづけた。「そうなれば、無論、田舎の侘わびず

住まいも、これでなかなか面白いものでしょうがね。ところが、

そんな話し相手が頓とないのです……。で、時々\*1『祖国の子』

を読むぐらいが関の山ですよ。」

成程、静かな田舎にひっこんで、自然の風物を楽しみに、時々なにか本でも繙く……といった生活ほど愉快なものは決してあるものでないと、チチコフは、すっかりそれに賛同した。

「だが、しかしです、」と、マニーロフが言い足した。「共に興き懐ようかいを分つような友人がなかつたとしたら……。」

「いや、まったくです、まさに仰つしやるとおりです！」と、チチコフが口を挟む。「銀しろがねも黄金も玉も何かせんです！ 金を持つより、善き友を持って と或る賢人も訓おしえていますからね。」

「そうですよ、パーウエル・イワーノヴィツチ、」と、マニーロフはその顔に、ただ甘ったるいというだけではなく、世故にたけ

た如才ない医者が甘くさえしてやれば患者が悦ぶと思つて矢鱈に甘味をつける水薬同様、しつこいと言つてもいいほどの表情を浮かべて言うのだ。「いい友達に対すると、なにかこう、一種、精神的な喜びを感じますからねえ……。例えば現に今、凶らずもこうして、あなたとお話をしながら愉快的な御意見を拝聴していますと、まったく世にも稀な、模範的といつてもいいような幸福を覚えますからねえ……。」

「とんでもない、愉快的意見だなどと仰つしやられては恐縮です……私はまったく詰らない、これっきりの人間ですからね。」と、チチコフが答えた。

「いや、どうしてどうして、パーウエル・イワーノヴィッチ！



腹藏なく言わせて頂けば、私はあなたが具そなえておいでになる値打ねうちの、せめて何割かを身につけることが出来るなら、この身代の半分くらい、悦んで投げ出しますよ！……」

「ところがその反対で、私の方ではまた、あなたこそ、この上もなくお偉い……。」

ここへもし召使が入って来て、食事の用意が出来たことを知らせなかつたなら、この二人の友の心の丈の浴びせ合いが一体どうけり梟けりがついたかは、誰にもちよつと見当がつくまい。

「それでは、どうぞ。」と、マニローフが立ち上つた。

「どうかまあ、ととても豪勢なお邸や都で出るような料理はございませんけれど、それは幾重にもお許しを願つて、ほんの粗

末なロシア式の玉葉汁シチイだけです、まあ、心のこもっているのが取柄とりえでしてね。さあ、どうぞ。」

そこでまた二人は、どちらが先さきに食堂へ入るかということ、暫らく言い争っていたが、とうとうチチコフが横よこむき向になつて入つて行つた。

食堂にはもう、二人の男の子が待つていた。マニローフの子供で、どちらも食卓つちに列つらなることは許されても、まだ高い子供椅子に掛けさせられるといった年頃だ。それに附き添つっていた家庭教師は、にっこり微笑を含んで恭しくお辞儀をした。主婦が受持うけもちのスープレ鉢の前に坐り、客が主人と主婦との間に坐らされると、召使が子供たちの頸にナプキンを捲きつけた。

「実に可愛らしいお子さんたちですね！」と、チチコフが子供をちらと眺めて言った。「お幾つですか？」

「上のが八つで、下のはやつと昨日、六つになりましたの。」と、マニーロフが答えた。

「フェミストクリユス！」と、マニーロフが、召使の捲きつけたナプキンが顎に引つかかっているのを一心に外はずそうとしている上の子に向って声をかけた。チチコフは、マニーロフがどういう訳かユスなどという語尾をつけて呼んだ、そのギリシヤ人くさい名前を耳にすると、ちよつと吃びっくり驚して眉を釣りあげた。が、直ぐにまた急いでいつもの顔にかえった。

「フェミストクリユス、さあ言つて御覧、フランスで一番いい市まち

はどこだっけね？」

これを聞くと家庭教師は、全身の注意をフェミストクリュスに  
集注して、今にも真まっこう向から跳りかからんばかりの氣勢を示した  
が、フェミストクリュスが『パリ』と答えたので、やっと安心し  
て、首を領けた。

「それじゃあ、このロシアで一番いい市まちは？」と、マニーロフが  
また訊いた。

家庭教師は又しても全身を緊張させた。

「ペテルブルグ。」と、フェミストクリュスが答えた。

「それから、もう一つは？」

「モスクワ。」と、フェミストクリュスが答えた。

「いや、お利口お利口！」と、それに対してチチコフが言った。

「それにしても、まあどうです……」とここで彼は、さも驚いたような顔をマニーロフ夫妻に向けて続けた。「こんなお年で、よくそんな智恵がおりなんですわねえ。いや、まったく、このお子さんは屹度きつと、素晴らしいものにおなりですよ！」

「いや、まだまだあなたはこいつのことをよく御存じないんですよ！」と、マニーロフが答えた。「こいつは、なかなか頓智はしのいやつでしてね。その小さい方のアルキツドは、あまり敏はしつこくありませんがね。こいつとききたら、何かもう、かぶとむし 甲虫こがねむか黄金こがねむ虫しでも見つけようものなら、たちま 忽ち眼玉をキョロキョロさせまし

てね、直ぐにそれを追かけまわして、もう夢中になってしまっ

ですよ。こいつは一つ外交官にしてやろうと思つてますんで。フエミストクリユス！」と、彼はまた上の子の方へ向つて、語をついだ。「どうだ、大使になりたかないかい？」

「なりたい。」そう、フエミストクリユスは、麵麩パンをむしやむしややりながら、首を左右に揺ぶゆすつて答えた。

丁度ちようどその時、後ろに立っていた召使が、未来の大使の鼻を急いで拭いた、拭いてくれたからよかつたが、でなかつたら、とんだものが一雫ひとしずく、スープの中へ落ちるところであつた。食卓で

は平穩な生活の喜びについて談話が進められていたが、時々それを遮さへぎつて、主婦が市の劇場や俳優の話を持ち出した。家庭教師は、頻しきりに話し合っている人達の顔に注意を払いながら、彼等が笑い

そうだなと思うと、逸いち早く自分も口をあいて、骨身おしまわず一緒に笑ったものだ。よほどこの男は、恩義に感じ易い人間だと見えて、そんな風にしてまで主人の知遇に報いようとしているらしいか。それでも一度だけ彼は険しい顔をして、自分と相あいむか向いに坐っている子供たちを屹きつと睨みながら食卓を厳しく叩いた。それはまったく機き宜ぎに適した処置であつた。というのは、フェミス トクリユスがアルキツドの耳に咬みついたため、アルキツドが眼をくしやくしやにして、口をあけて、さも情けなさそうな様子で、今にもわつと泣き出しそうだったからだ。が、しかし泣き出せば屹度、折角の御馳走も取りあげられてしまうと思つたので、口をもとのようにして、涙ながらに羊の骨をがりがりしやぶりはじめ

たが、骨が両方の頬つぺたにさわってべたべたに脂だらけになつた。

主婦はもう、何度も何度もチチコフに向つて、『あなたは何にも召しあがって下さらないじゃありませんか。ほんとに少しつきりしかお取り下さいませんか。』などと言つた。そのたんびに、チチコフはこう答えたものだ。『いや、大變御馳走さまでした。もう満腹いっぱいなんです。愉快なお話が何よりの御馳走ですからね。』

一同はやがて食卓をはなれた。マニローフは殊のほか満足らしく、お客の背中へ手をまわして、そのまま客間へ案内しようとしたが、その時、不意にお客がひどく意味深長な顔附をして、実は或る重要な問題についてちよつとお話ししたいことがあるのだが、



と言ひ出したのである。

「それでは一つ、書齋の方へ御供おともいたしましょう。」そう言つてマニローフは、青々した森に向つて窓のついているあまり大きくもない一室へと客を導いた。「これが私の隠れ家です。」と、マニローフが言つた。

「氣持の好いお部屋ですね。」とチチコフは、さつと辺りあたを見まわしてから言つた。それはまったく、氣持の悪い部屋ではなかつた。壁は、ちよつと灰色がかった空そらいろの塗料で塗つてあり、小椅子が四脚に、安楽椅子が一脚、それにテーブルが一脚あつて、その上には、先刻もちよつと述べたとおり、葉をはさんだままの書物と、何か書きちらした紙が数枚のつていた。けれど、何より

一番多く眼につくのは煙草であつた。それはいろんな風にして置いてあつて、紙袋へ入つたのもあれば、また剥きだしにテーブルの上に山と積まれたものもある。両方の窓の上には又、煙管から叩き出した灰の山が、さぞ苦心して並べたように、整然たる列をなして並んでいる。どうやら主人は時々ひまつぶしにこんなことをしているものらしい。

「どうか、こちらの安樂椅子にお掛け下さい。」と、マニローフが言った。「この方が少しはお楽ですから。」

「なに、私はこの小椅子に掛けさせて頂きましょう。」

「いや、どうかそう仰つしやらずに。」と、マニローフは微笑を浮かべながら言った。「手前どもでは、この安樂椅子がお客様さま

用ときめてありますのでな、否でも応でも、お掛けになつて下さらなきやなりませんよ。」

チチコフは腰をおろした。

「煙草を一服いかがですか。」

「いや、不調法ぶちようほうでして。」と、チチコフは愛想よく、さも残念そうな面持で答えた。

「どうしてですか？」とマニーロフも、やはり残念そうな顔をして、愛想よく訊ねた。

「飲みなれないものですから、怖こわいんですよ。なんでも、煙草を飲むと痩せると言うじやありませんか。」

「失礼ですが、そいつは偏見というものですよ、私にいわせると、

寧ろ、煙管たばこは嗅煙草などよりずっと身体に良くらいですむしよ。私の連隊に中尉が一人おりましたね、これは実に立派な、また教養の高い男でしたが、この男ときたら、食事中ぐらいならまだしも、尾籠びろうな話ですがその、何処へ行つても、煙管を口から離したことがなかったものですよ。それが今ではもう四十を越していますが、お蔭なことに、この上もなく達者でありますからねえ。

チチコフは、成程そういうこともあり得ることで、この世には、どんな該博な知識をもつてしても説明のつかないようなことが間々見うけられるものだ、と言った。

「ところで、何はさて一つお願いがあるのですが……。」こう彼

は、何か変な、もしくは殆んど変に聞こえるような調子の声で切りだしたが、どうしたものか直ぐそれに次いで、ちらと後ろを振り返った。マニローフも、やはりどういわけか後ろを振りむいた。「あなたは、もうよほど前に\*2戸口調査名簿をお出しになりましたので？」

「左様さ、もう随分になりますねえ、と言うより、殆んど憶えがないくらいですよ。」

「それ以来、余程あなたのところでは農奴が死にましたでしょうか？」

「さあ、ちよつと分りかねますが、それは一つ管理人に訊ねてみる必要があると思います。おうい、だれか！ 管理人を呼んでこ

い。今日はたしか来ているはずだから。」

やがて管理人が現われた。それは年のころ四十前後の、顎鬚をきれいに剃つて、フロツクコートを著<sup>き</sup>た、見たところ非常に気楽な生活を送っているらしい男であつた。というのは、その顔がいやにぶくぶくと肥<sup>ふと</sup>り、黄ばんだ皮膚の色と小さな二つの眼とは、彼が羽根蒲団や羽根枕の寝心地のよさを、知りすぎるほどよく知つてゐることを示していたからだ。また、普通お抱えの管理人がするだけの出世は、もうしてしまつたということが、一目でそれと領かれた——つまり、初め自家<sup>うち</sup>にいる間は、ただちよつと読み書きの出来る小倅に過ぎなかつたのが、やがてお邸の奥様お気に入りいっしょの女中頭でアガーシユカとか何とかという女と夫婦いっしょになつ

て、自分は倉番になり、そのうち何時か管理人になつてしまつたのである。管理人になつてからは、いうまでもなく凡てすべの管理人と同じように振舞つて、村で小金でもためていそうな連中とは互いに交際ゆききをしたり、子供の名附親になつたりするが、貧乏人からは特定の小作料を勝手に増額してじゃんじゃん取りたてる。朝は八時すぎに眼をさまし、サモワールの沸くのを待つてお茶を飲むのである。

「ねえ、おい、この前に戸口名簿を出してから、うちの村では農奴はどのくらい死んだだらうね？」

「さあ、どのくらいと仰つしやいますんで？　なんでもハア、あれから随分と死にましただよ。」こう言つた途端に吃しゃっくり逆が一

つ出たので、管理人はまるで蓋でもするのように、片手でちよつと口を塞いだ。

「うん、そうだろう、実は俺もそう思つてね。」と、マニーロフは相槌を打つて、「まったく、よほど沢山死んでるね！」こう言つて、今度はチチコフの方へ向き直りながら、つけ加えた。「確かにかなり多勢、死んでおりますよ。」

「例えば、どのくらいの数で？」と、チチコフが訊ねた。

「そうだ、数はどのくらいだい？」と、マニーロフが質問を取り次いだ。

「さあ、数がどのくらいだと仰つしやいますんで？ 幾いくたり人死ん

だか、そいつあちよつくら分りかねますだよ。誰もそんなもの、



勘定かんじょうしたことがありましねえだから。」

「成程ね、」とマニーロフはまたチチコフの方へ向き直つて、

「私も、死んでるにはかなり死んでると思います、果して幾人死んでゐるやら、それは皆目わかりませんねえ。」

「君、それを一つ調べてくれませんか。」と、チチコフが言った。

「そして全部、名前を書きあげた詳しい表を作つてみて貰いたいんだが。」

「そうだ、一人のこらずだよ。」とマニーロフがつけたした。

管理人は、『かしこまりました!』と答えて、出て行つた。

「して、一体どういう理由わけで、そんなものが御入用なんです?」  
と、管理人の出て行つた後でマニーロフが訊ねた。

この質問がいささか客を当惑させたらしく、その面には何かこ  
う、緊張した表情が浮かび、それがために彼はちよつと顔を赧ら  
めたほどで、——どうも言葉では言いにくいことを口にしようと  
する時の緊張であつた。果せるかな、マニーロフが耳にしたのは、  
ついぞこれまで人間の耳に囁かれたこともないような奇怪きわま  
る話であつた。

「どういう理由わけでと仰おつしやるのですか？ その理由わけというのは、  
こうなんです。つまり、農奴を買いだいたいと思ひまして……。」「チ  
コフはそれだけ言つたまま、吃くつてしまつて、後がつづかなか  
つた。

「しかし、なんですか、」と、マニーロフが言つた。「一体どう

いう風にして買おうと仰つしやるんで、つまり土地も一緒にですか、それとも、単に何処かへ移住させるといふ目的で、つまり土地とは別のお話なんですか？」

「いや、手前はその、あたりまえの農奴が欲しい訳ではないんでして。」と、チチコフは言った。「実は死んだのが望みなんで……。」

「なんですつて？ いや御免ください……どうも私は耳が少し遠いもんですからね、何か奇態きたいなお言葉を耳にしたように思います  
が……。」

「いや、手前が手に入れたと思いますのは、死んだ農奴で、しかし戸口名簿の上では、まだ生きてることになっているものこ

とでして。」と、チチコフが言った。

マニローフはそれを聞くと、思わず長い羅宇らおにすぎた大煙管を床におとして、口をぽかんとあけたが、そのまま数分間のあいだは開いた口もふさがらなかった。あれほど親交の悦びを論じあつた二人の友は、じつと向きあつたまま、ちようど昔よく、どここの家でも鏡の両側に相向いにかけてあつた二枚の肖像画のように、互いに穴のあくほど相手の顔を見つめ合っていた。とうとうマニローフは煙管をひろいあげて、下から相手の顔を見あげながら、この男は冗談を言つてるのではなからうか、相手の口許くちもとに微笑の影でも浮かんでおりはしないかと、それを発見しようと思つたが、それらしいところは微塵もなく、それどころか反対に相手

の顔はいつもより真面目に見えるくらいであった。それから今度は、もしやこの客はどうかして不意に気でも違ったのではないかと思つて、こわごわその顔をじつと見まもつたが、相手の眼はしかし飽くまで澄みきつたもので、狂人の眼の中にちらつく、あの異様な、落着きのない閃めきなどは露ほどもなく、どこからどこまでもきちんとして、少しも乱れたところがなかつた。一体どうしたらいいのか、何と言つたものかと、幾ら考えてもマニローフは、ただ残りの煙を口から糸のように細く吐き出すより他はなかつた。

「で私に、そういう実際には生きていないけれど、法律的にはまだ生きておることになっている農奴を、売却とか、譲渡とか、そ

れとも何か、これがいいとお考えになる形式で、一つお譲りねがえないかと思うのですが、如何いかがでしよう？」

マニーロフはしかし、すっかり狼狽して、当惑のあまり、ただ相手の顔をきよときよと見つめるばかりであった。

「何か、ひどく御迷惑のようですね？」と、チチコフが言った。

「手前が？……いいえ、そうじやありませんよ。」と、マニーロフは弁解した。「ただ、どうもよく肚へ入らないのです……いや

御免なさい……手前は無論、いわばあなたの一挙一動に現われているような、そういう立派な教育はうけておりませんものですか、どうもそういう高尚な言いまわし方が頓と出来ませんので……恐らくそれには……つまり、今あなたの仰っしゃったお話には

……何か裏があるのでしよう……屹度あなたは言葉づかいを美しくするために、そんな風に仰つしやつたのでしよう？」

「いいえ、」と、チチコフは直ぐに応酬した。「そうじゃありませんよ。手前は全くありのままを申しあげているのです、つまり、ほんとに死んだ農奴のことを申しあげているのですよ。」

マニローフは全く当惑してしまった。彼は何か言わなければならぬ、何か訊かなければならぬとは思つたが、いったい何を訊いたものやら、さつぱり見当もつかなくつた。とどのつまり彼はまた煙を吐きだしたただけであつたが、今度は口からではなく鼻の孔からであつた。

「で、もしお差支えがなかつたら、さつそく売買登記の手続きを

して頂きたいのですが。」と、チチコフが言った。

「え、死んだ農奴の売買登記ですって？」

「いえ、そうじゃありませんよ！」とチチコフが言った。「証書面には、ちゃんと戸口調査簿に載っているとおり、生きています。とにして置くのです。手前は何事でも民法に背くようなことはいない習慣でしてね。尤もそのために勤務中にもずいぶん辛い思いをいたしましたもつとが、いや御免なさい、手前にとって義務は神聖で、法律——いや法律の前では手も足も出ませんよ。」

この最後の一句はマニローフの氣にいったけれど、肝腎の話の意味は、やはりどうしても理解のみこめなかつた。そこで彼は、返事をする代りに、精いっぱい煙管を吸いにかかつた、それがためにし



まいには煙管が笛のように唸り声を立てた位であつた。まるで彼は、このような前代未聞の話に就<sup>つ</sup>いての何らかの意見を、その煙管から吸い出そうとでもしたものらしいが、徒<sup>いたず</sup>らに雁首が唸るだけであつた。

「あなたはひよつと、何か胡乱<sup>うろん</sup>だとお思ひになつているのじゃありませんか？」

「おや、飛んでもない、決して決して！ 私は別段そういう風なことを、つまり、あなたのことをとやかくと批評がましく申す筋<sup>す</sup>合<sup>じあ</sup>いは更<sup>さらさら</sup>々ないのです。しかし、そう言つては何ですが、この計画といえますか、それとも、取引といった方が当つているかもしれません——つまり、その取引が、民法の規定に抵触し、ひ

いては将来のロシアの方針と両立しないようなことになりはしないかと思うんですがね？」

ここでマニローフは、首で妙な素振りをしてから、顔の隅々から、きつと結んだ唇にまで、恐ろしく深刻な表情を浮かべ、ひどく意味ありげにチチコフの顔を見つめたが、恐らくこんな表情はよほど賢い大臣かなんかが、それも極めて解決の困難な問題にでもぶつかった折に面へ現わす以外には、ちよつと人間の顔には見られないものであった。

しかしチチコフは事もなげに、こういう風な計画、もしくは取引は、決して民法の規定に抵触したり、将来のロシアの方針と矛盾するものではないと断言して、それからちよつと間をおいて、

国庫は正当な租税を徴収することが出来るから、却<sup>かえ</sup>つて利益を得るくらいだと言ひ足した。

「あなたはそうお考えになるのですねえ？……」

「手前は善いことだと思ひますよ。」

「それが善いことだとすれば、話は別です。私は何もかれこれ言うことはありませんよ。」マニーロフはそう言つて、すっかり安心してしまつた。

「そうすれば、あとはもう値段を取りきめるだけですわね……。」

「何が値段です？」マニーロフはまたそう言つて、ちよつと言葉を跡切らした。「あなたは、そんな、孰<sup>いず</sup>れにしてもこの世にいない農奴に対して私が代金などを取るとお思ひになるんですか？

あなたがたとえそんな、いわば突飛とつびなことをお考えになるにしても、私は無償ただでそんなものは差しあげますよ。それに登記だつて、費用はこちらで持ちますよ。」

ここでもしも、こうしたマニローフの言葉を聞いて、客が異常な満足の情に駆られたことを書きもらしたなら、この事件の記述者はどんな非難こうむを蒙つても仕方があるまい。チチコフが如何いかに沈着で思慮深い人間であつたにしても、流石にこの時ばかりは、今にも山羊のようにピョンピョン跳ねあがりそうであつた。これは誰でも知っているとおり、歡喜の絶頂に於いてのみ起こる現象である。彼が安樂椅子の上で無闇からだに軀からだをねじまわしたものだから、クッションクッションの表の毛織の布が引き裂けたほどであつた。マニローフ

の方も、すこし飽氣あつけにとられた形で相手の顔を眺めていた。感謝の念に駆られたお客が、その場でお礼の百万遍をならべたてたので、主人はいよいよ面喰らって顔を真赤にしてしまい、しきりに頭かぶりをふって否定の意を示し、しまいには、そんなことは全く何でもありません、私はすっかりあなたに惹きつけられてしまったから、どうかして、その心持を現わしたいと思つたまでであるが、しかし、どちらにしても既に死んでしまつてゐる農奴などはまったく塵芥も同様ですからね、とまで言つた。

「なんのなんの、決して塵芥どころじゃありませんよ。」と、チコフは相手の手を握りしめながら言つた。

ここで彼は非常に深い吐息をついた。どうやら彼は心情の吐露

に駆りたてられたらしく、思いいれたつぷりに、とうとうこんなことを言いだした。『いや、その一見塵芥のようなもので、この親戚も身寄りもない人間がどんなに助かるか、それがあなたに分つて頂かれましたらなあ！ まったく私は実にいろいろな目にあつて来たのですよ。まるで荒波に揉まれる小舟みたいなものでした……。ああ、どんなに私が压制や迫害を忍んで来たことでしよう、どんな苦杯を嘗<sup>な</sup>めて来たでしよう！ それも何のためでしよう？ みんな、私が正義を守ったからです、良心に恥じたくなくなつたからです、よるべない寡婦や哀れな孤児に手を貸そうとしたからなのです！……』ここで彼はハンカチをだして、あふれ落ちる涙を押えたほどであった。

マニーロフはすっかり感動してしまった。二人の友は暫しのあいだ互いに手と手を取りあつて無言のまま、涙ぐんだ互いの眼にじつと見いつたものである。マニーロフは我等の主人公の手を金輪際はなすまいとして、熱心に握りつづけていたので、こちらは どうしてそれを振りほどいたらいいのか、さっぱり分らなかつた位だ。それでも、ようやくのことに、その手をそつと引つこめると、彼は売買登記は一刻も早く済ました方がいいから、もしマニーロフが自身で市へ出<sup>まち</sup>かけてくれれば、なお結構であると言つた。つづいて、帽子をとつて、暇<sup>いとま</sup>を告げにかかつた。

「ええ？　もうお帰りになるんですつて？」マニーロフは急に我れに返ると、殆んどびっくりしたように訊ねた。

ちようどその時、マニーロワ夫人が書齋へ入つて来た。

「リザーニカ、」と、マニーロフが聊いささか悲しそうな顔つきをしながら、「パーウエル・イワーノヴィツチは、もうお帰りになるんだとき！」

「屹度パーウエル・イワーノヴィツチには、あたしたちではお退屈なんでございましょうよ。」と、マニーロフが答えた。

「奥さん！　ここに、」と、チチコフが言った。「そら、ここにですよ。」そう言いながら、彼は片手を心臓の上にあてて、「そうですね、ここに、私があなた方と御一緒に過ごした楽しい思い出がずっと、いつまでも残ります！　どうか信じて下さい、あなた方と御一緒に、たとえ同じ家ではなくても、せめて最寄りのお隣



り同士としてでも住むことが出来ましたなら、私にとって、それ以上の幸福はありませんよ。」

「まったくねえ、パーウエル・イワーノヴィツチ、」と、相手の考えに有頂天になって、マニーロフが言った。「実際、そんな風に、御一緒に一つ屋根の下で暮らしたり、または楡の木の木蔭かなんかで、何かこう哲学上の議論でもしたり、瞑想に耽ることが出来たら、まったく素晴らしいでしょうにね！……」

「ああ、それこそもう、天国ですよ！」と、チチコフは吐息をついて、言った。「ではお暇いとまします、奥さん！」と、マニーロフの手に口を近づけながら続けた。「それから、私の最も尊敬している友よ、さようなら！　どうか、お願いした件をお忘れにならない

いようにね！」

「ああ、大丈夫ですとも！」と、マニーロフが答えた。「私は二日以上あなたを放ほうつてはおきませんよ。」

三人は食堂へ出た。

「さようなら、可愛い坊っちゃん方！」とチチコフは、鼻も手もなくなつた木製の驃騎兵ひょうきへいを持って遊んでいたアルキツドとフェリストクリュスを見つけて、言った。「さようなら、坊っちゃん方。今度は、何もお土産を持って来なくて御免なさい。だつて小父じさんは、ほんとうを言うとおなた方のいらつしやることは知らなかつたのだからね。でも、この次ぎ来る時には屹度もつて来ますよ。あんたには、サーベルを持ってこようね。サーベル要いらな

い？」

「欲しいや。」と、フェミストクリユスが答えた。

「そして、あんたには太鼓をね。太鼓がいいでしょう？」と、チコフはアルキツドの方へ身を屈かがめて、言葉をついだ。

「ちやいこ。」とアルキツドは、首を垂れて囁やくように答えた。

「よろしい、じゃ、太鼓を持って来ましようね。とても素敵なた鼓をね！　こんな風に、叩くといつも、トウルルツル……ルツ：

…トウラタツタ……タツタツタツつて鳴るやつをね。さようなら、坊っちゃん！　さようなら！」こう言うと、彼はアルキツドの頭に接吻して、マニーロフと細君の方へ顔を向けてちよつと笑ったが、それは普通、子供の両親に向って、まったく子供の望みって

罪のないものですねと言うかわりにする笑顔であつた。

「これあ、少しお待ちになつた方がいいですよ、パーウエル・イワーノヴィッチ！」と、一同がもうポーチへ出た時、マニーロフが言つた。「御覧なさい、あんな雲が出て来ましたよ。」

「いや、あれしきの雲は大したことありませんよ。」とチチコフが答えた。

「ときに、ソバケーヴィッチのところへいらつしやる道は御存じですか？」

「あ、それをお訊ねしようと思つていたところです。」

「じゃあ、さつそく、お宅の馭者に話しておきましょう。」そう言つてマニーロフは、馭者にその道順を話したが、それがやはり

実に丁寧な言葉で、一度などは馭者に向つて『あなた』などと言つたものだ。

馭者は、曲り角を二つ通り越して、三つ目で横へ折れるのだと教えられて、『はい、氣いけますだ、旦那様。』と言つた。そこでチチコフは出かけたが、それを見送つてこの家の主人たちはいつまでもお辞儀をしたり、爪先だちになつて、ハンカチを振つたりしていた。

マニローフは長いことポーチに突つ立つたまま、だんだん遠ざかつてゆく半蓋馬車ブリーチカを見送つていた。それがもうすっかり見えなくなつてからも、彼はやはり煙管をスパスパやりながら立っていた。それでもとうとうしまいに部屋の中へ入ると、椅子に腰をお

ろして、いささかでも客に満足を与えたことを心で喜びながら、いろいろと物思いに耽った。やがて彼の想いは、いつの間によら他の問題に移って、しまいには飛んでもないところへ落ちて行つた。彼は友情生活の幸福を思い、何処か河のほとりで友人と共に住んだらどんなに好いだろうと考え、ついには、その河に橋をかけ、モスクワまでも見えるような高い高い望楼ぼうろうのついた宏壮こうそうな邸宅を構え、そこで毎晩、爽すがすが々すがしい外気を浴びながらお茶を飲んだり、何か愉快的な問題について論じあう、それからまた、チコフと一緒に立派な箱馬車に乗って何かの会合へ出かけてゆき、気持の好い応対ぶりで一同をすっかり俘虜とりこにしてしまう、やがて、彼等のそうした細やかな友情が叡えい聞ぶんに達して、二人は勅任官の

位を授けられるといった塩梅に、それからそれへと空想の糸が伸びて、ついには自分でも何が何やらさっぱり訳が分からなくなってしまうた。が、チチコフの例の奇怪な頼みごとが不意に彼の空想を破った。それは幾ら考えても、どうもよく肚へ入らなかつた。ああではないか、こうではないかと、いくら頭の中で考えてみても、さっぱり合点がてんがゆかず、しようことなしに彼は煙草ばかりプカプカ喫ふかしながら、夕飯までずっとそこに坐りこんでいた。

\*1 祖国の子 一八一二年より満四十年間にわたり、ペテルブルクで発行されていた文学・政治・歴史の綜合雑誌。

\*2 戸口調査名簿 ピョートル大帝によつて一七二二年に創始され、一八六〇年までに十回にわたつて行われた一種

の 届書とどけしょをいう。  
の 国税調査に、その都度つど地主から政府に提出した農奴数



## 第三章

一方チチコフは、もう大分まえに本街道へ出て、駈けてゆく半蓋馬車リーチカの中で、すっかり好い気持ちになっていた。彼の嗜好と性癖の主なる対象が何であるかは既に前章ではつきり分っている。従つて彼が忽ちたちまそれに身も魂も打ち込んでしまつていたからとて、少しも不思議ではない。その顔附から見て、彼の予測や見積りや思案は、どうやら上々の首尾であつたらしい、それというのも一々その思いが絶えず満足そうな北叟笑ほくそえみの跡を残してゆくからである。こんな風に彼は物思いに耽つていたので、マニーロフ家の

召使連の接もてなし待まちにすっかり好い御機嫌になつていた馭者が、右側に繋がれた連銭葦毛れんせんあしげの測馬わきうまに、なかなか穿うがつた小言を浴びせていることにも、いっこう気がつかなかった。栗毛の轅馬なかうまや、何でもさる議員から手に入れたというので『議員』と呼ばれているもう一頭の測馬が眼にさも得意そうな色さえ浮かべて一生懸命に力を入れているのに、連銭栗毛はとても狡いやつで、いかにも曳いているような恰好をしているだけであつた。『ずるける、ずるける！ 手前がずるをすれば、そら、おれもこうして仕返しをしてやるぞ！』セリファンはこう叫びながら半身をおこして、その怠け者にピシリと一ひとむち鞭くらわせた。『自分の務めちうものを忘れるでねえだぞ、このひよろく玉め！ 栗毛を見な——奴あ

見上げた馬で、ちやんと自分の務めを果しているだ。そいでおらの方でも、奴にやあひとます一柵すがとこ余計に麦を呉くれてやらあな、だつて見上げた馬やつだもの。議員の奴もどうして、感心な馬だ……。こら、こら！　なんだつて耳を振りやあがるだ？　この馬鹿者め、おらが言うことをよく聴きくされえ！　手前みてえな田吾作野郎にや悪いこたあ教えねえだ。ちよつ、何処はへ匍はい出しやあがるだ！』ここで彼は又もやピシリと一鞭喰らわせて、こう言い足した。『えい、この野蛮人め！　忌いま々いましいボナパルトめ！』それから今度は、三頭全体に向つて、『えい、この野郎ども！』と呶鳴つて、それぞれ同じように鞭をくれたが、それはもはや罰としてではなく、どれにも自分が満足していることを示すためであつた。

こういう褒美ほうびを与えておいて、彼はまたしても連銭葦毛に向つてしやべつた。『手前は自分のやったことを誤魔化せると思つてるちうのか。いんにや、お主ぬしも褒めてもらいてえと思うだら真実まっとうな生き方をせにや駄目だぞ。おいらが今寄つてきた地主さまの家の衆は、みんな立派な衆ばかりだったでねえか。立派な衆とだら、おら喜んで話もするだしよ、立派な衆とだら、いつでも友達になるだ、心安い仲間同士にもなるだ。おら、立派な衆とだら、すすんで一緒にお茶を飲んだり、物を食つたりするだ。立派な人間はな、みんなが敬まつてくれるだよ。家の旦那さまだつてそうでねえか、みんながああ奉たてまつるちうのもな、ええか、あれは旦那さまがくに国家のお役をちゃんと勤めあげさつした奏任官そうにんかんさまだからだぞ

……。

セリファンはこんな風に理窟をこねながら、しまいには途方もなく脱線したことを呟やいていた。で、もしもチチコフが耳を澄ましていたならば、いろいろ彼自身の内輪のことをこまごまと聴かされたことだろう。が、彼は彼で自分の考えごとに夢中になっていたので、激しい雷鳴が一つガラガラつと来た時、初めて我れに返つて、ようやく<sup>あた</sup>辺りを見まわした程である。見れば空一面にすつかり<sup>むらくも</sup>叢雲がたちこめて、埃っぽい駅路は大粒の雨滴に叩かれていた。ところが、雷鳴がもう一つ、前のよりも激しく間近で鳴りはためくと共に、雨は急に、桶でもひっくりかえしたようにざつとばかり降り出した。初め横なぐりに来た<sup>あまあし</sup>雨脚は、半蓋馬<sup>ブリ</sup>

車チカの車体の片側を打つかと思うと次ぎには反対側にまわり、それから今度は上から真直ぐに降りつけて、真面まともに馬車の上をざんざん叩いて、ついには飛沫しぶきがチチコフの顔にまではねかかった。で、仕方なしに彼は、革の前蔽いをおろしたが、それには沿道の景色を眺めるための小さい丸窓が二つ開あいていた。それを下ろしながら彼はセリファンに向つて、もつと疾はやくやれと呶鳴なやつた。おしやべりの途中で腰を折られたセリファンも、同じように成程これはぐずぐずしている場合でないと気がついて、さつそく馭者台の下から何やら灰色の羅紗の檻樓ぼろをひっぱりだして袖をとおし、しつかり手綱を掴つかむなり、彼のお説教を聞きながら好い気持に疲れてよたよたと脚を運んでいた三頭立だての馬を、呶鳴りつけた。ところ

がセリフアンは、いったい曲り角を二つ通り過ぎたのか三つ通り過ぎたのか、さっぱり憶えがなかった。頭をひねってやつと少しばかり途中のことを思い出して見ると、どうもうっかり通り過ぎてしまった曲り角が、ずいぶん沢山あったような気もする。露助という奴は、いざという時になると、お先きまつくらに何でもさつさとやつつけてしまうものだが、セリフアンも次ぎの四つ角へ来ると、いきなり右へ曲って、『えい、野郎ども、しっかり頼むぜ！』こう叫ぶなり、その道を行けば一体どこへ出るのやら、そんなことはてんで考えもしないで、どんどん馬を駆けさせてしまったのである。

だが、雨はなかなか止みそうにもない。道にたまっている土埃

は見る見る泥濘に變つて、馬どもには馬車を曳くのが刻一刻と難儀になつて来る。チチコフには、こういつまでもソバケーヴィツチの村の見えないのが、そろそろ心配になりだした。彼の心づもりでは、もうとづくに着いている頃でなければならなかつた。辺<sup>あた</sup>りを見まわしてみたが、もう真暗で、一寸先きも見えないくらいである。

「セリファン！」と、彼はとうとう馬車から半身を降りだして声をかけた。

「何ですかね、旦那？」とセリファンが答えた。

「ちよつと見てみな、その<sup>へん</sup>辺に村は見えないかい？」

「村なんて、旦那、からつきし見えましねえだよ！」そう言った



後でセリフアンは、鞭を振りながら、歌とも何とも見当のつかぬ、何処までいってもきりのないような、ひどく長つたらしいものを唄いだした。その中には、ロシアの津々浦々、到るところで、馬を励ましたり、急ぎ立てたりする時に浴びせる、いろんな掛声だの、滅多矢鱈な、あらゆる罵り声だのののしりめつたやたら、そんな具合にして、しまいには馬を『秘書官』などと呼んだりした。

そうこうするうちにチチコフは、馬車が前後左右に揺れて、自分の軀からだがあちこちにひどくぶつかるのに気がついた。どうもこれは馬車が道を外はずれて、すっかり耕やされた畠の中へ乗りこんだらしいと感づいた。どうやらセリフアンも、それと気がついたら

しいが、一向そんなことは口に出さなかつた。

「こら、馬鹿野郎、貴様はいつたい何処をほつつきまわってるんだ？」と、チチコフが言つた。

「だちうて、旦那、どうもしようがありませんねえだよ、なにせこねえな時刻で、鞭の先も見えねえような真暗闇じゃあねえ！」彼がそう言つた途端に、馬車がひどく傾いたので、チチコフは思わず両手で箱に取りすがつた。この時はじめて彼は、セリファンが酔つぱらつてゐることに気がついた。

「えい、支えないか、支えないか、ひっくりかえつてしまふじやないか！」と彼はセリファンに向つて呶鳴りつけた。

「なんの、旦那、ひっくりかえしたりなんぞしませんよ。」とセ

リファンが言った。「ひっくりけえすなんて、よくねえこんで、それあわつしもよく知ってまさあね。金輪際ひっくりけえしたりなぞしましねえだよ。」そう言ってから、彼は少しづつ馬車の方<sup>む</sup>向<sup>き</sup>を変えはじめたが、あちらこちらへ向け直している中<sup>うち</sup>に、とうとう馬車が横倒しにひっくりかえってしまった。チチコフはいきなり泥濘の中へ四つん這いになってつんのめった。セリファンはそれでも直ぐに馬をとめた。尤<sup>もつと</sup>も馬の方もへとへとになっていたのだから、とめなくても自然に立ちどまったことだろう。この思いもかけぬ出来事にセリファンはすっかり仰天してしまった。彼は馭者台から降りるなり両手を腰につがえたまま、ぼんやり馬車の前に突立っていた。その間じゆう主人は、泥濘の中をのたうち

まわつて、そこから這いだそうとして一生懸命になつてもがいていたが、しばらく考えてから、『ちよつ、ほんとうにひつくりかえりやあがつたな!』と眩やいた。

「貴様は、靴直しみたいに酔っぱらつてるんだな!」と、チチコフが言った。

「なんの、旦那、どうしてわつしが酔っぱらつてなどいるもんですかい! 喰らい酔うなんて、よくねえこんだちうことは、ちやんと心得てまさあね。ただ、友達とちよつとべえ世間話をしただけだね。なにせ立派な人間とだら話ぐれえしたつてええこんだし——そうしたところで別に悪いことはねえだからね——それにちよつとべえ一緒に肴をつまんだだけで。肴をつまむちうことは何も

恥かしいこんでねえだ、立派な人間とだら一緒に一口やるのも別に悪いことつてねえでがすからね。」

「この前、貴様が酔っぱらった時、おれが何と言った？ あん？  
もう忘れたのか？」と、チチコフが言った。

「いんにえ、旦那様、どうしてそれを忘れてよいのですか？

わっしはちゃんともう、自分の務めは弁わきまえていますだ。酔っぱら

うのはよくねえこんだちうことは百も承知でさあね。ただ立派な人間と、ちつとべえ世間話をしただけで、それも、つまりその：  
…。」

「ようし、おれが貴様をうんとひっぱたいて、立派な人間と話をする仕方を思い知らせてくれるぞ！」

「どうなりと、それあ旦那のお心まかせでがすよ。」とセリフア  
ンは、すべてを観念して答えた。「ひつぱたくだら、ひつぱたい  
ておくんなせえ、わつしにや何も文句はありましねえだ。それ  
だけの理由わけがあるだら、ひつぱたいて悪い筈あねえでがしよう？  
それあもう、旦那様のお心まかせのこんだからね。とかく百姓  
ちうものは増長し易いものだから、ピシピシひつぱたいてやんな  
くちやあなんねえでがすよ。ちゃんと秩序しまりをつけておかにやなん  
ねえだからね。それだけの理由わけがあるだら、どうぞひつぱたい  
ておくんなせえ、どうしてひつぱたかねえだね？」

こういう屁理窟に何と答えたものやら、主人はまるで言葉を知  
らなかつた。けれど丁度その時運命の神が彼に憐みを垂れる氣に

なつたらしく、遠くから犬の吠なき声が聞こえて来たのだ。喜んだチチコフは、すぐに馬を駆り立てよと言いつけた。ロシアの馭者という奴は、眼がきかなくても感がいい。それで時には眼をつぶったまま全速力で馬車を走らせても、必らず何処かへ辿り着くのである。で、セリファンはまるで盲ら滅法に、村の方角へ一目いちもく散さんに馬を駆けさせたものだから、とうとう馬車の轆ながえが柵にぶつかって、それ以上はもう一步も先へ進めなくなるまで、馬をとめることが出来なかつた位だ。チチコフは、篠しのつ突く雨の濃いとぼりを透して、何か屋根に似たものをちらと認めることが出来た。そこで、セリファンをやつて門を探させたが、もしこれが門番がわりに猛犬ががんばっていて、思わず指で耳に栓をしなければなら

ないほどワンワンと人の来た時に吠えたてるロシアでなかつたなら、彼は屹度いい加減手間どつたに違いない。が、やがて一つの小窓から灯りがさして、ぼうつと烟けむつたような光りが柵を照らして、我等の旅人に門の所在を示した。セリファンが門を敲たたきだすと、間もなく耳門くぐりがあいて、上つ張りでも頭から被つたらしい人の姿がにゅつと現われて、嗚しわがれた女の声で『誰だね、門を敲いてるのは？ 何を騒いでるだね？』と言うのを主従は耳にした。

「旅のものだよ、小母おぼさん、一晚とめて貰いたいんでね。」と、チチコフが声をかけた。

「ちよつ、なんとら遠慮のないお人だね、」と老婆が言った。

「えらい時刻ときにやって来たものだて！ ここは宿屋じゃありません



ねえで、女地主の邸だがね。」

「だって、しようがないじゃないか、小母さん？ 道に迷ってしまつたのだよ。こんな晩にまさか野宿も出来ないからさ。」

「そうさね、暗さは暗し、お天気は悪いし。」と、セリフアンが傍から口を出した。

「黙つとれ、馬鹿野郎！」とチチコフが叱つた。

「いったい、お前さんがたはどういうお方だね？」と、老婆が訊ねた。

「貴族だよ、小母さん。」

この 貴族 という言葉に、老婆も少し考え直したらしい。

『ちよつとお待ちなせえまし、奥様に申しあげて見るだから。』

そう言ったかと思うと、二分ばかりして今度は角燈を手をさげ  
戻つて来た。門が開かれた。そしてもう一つの窓にも灯りがつ  
いた。馬車は庭へ入つて、あまり大きくない家の前で停つたが、ど  
んな家だか暗いのでよく分らなかつた。ただその一端が、窓から  
漏れる光りに照らし出されたのと、その家の前に、同じ光りがま  
ともに射している水溜りのあるのが見えただけだ。雨は喧ましく  
板屋根を敲きながら、さざめく小川のように傍らの天水桶へ流れ  
落ちてゐる。その間、<sup>かん</sup>一方では犬どもがありとあらゆる声を振り  
しぼつて吠え立てていた。一匹のやつは首を天へ向けて、何かそ  
れに対して給金でも貰つてゐるやうに一生懸命に、長く声を引き  
伸ばしながら吠えた。すると次ぎのが早速後をうけて、まるで寺

男のように吠<sup>うた</sup>い出す。その間にまじつて、まだ仔犬らしい奴のせわしないソプラノが、これは郵便馬車の鈴のように甲高く響きわたる。最後にそのすべてを完成<sup>ととの</sup>えるように、どうやら老犬らしい奴のバスが、こいつは犬としてもよほど音量をたつぷり恵まれているらしく、音楽会が最高潮に達したおりの、歌手のコントラスみたいに凄まじい声を立てたものだ。テノールの奴らが出来ただけ高い調子を出そうものと、足を爪だてて懸命に声を張りあげ、また他のどの犬もこの犬も、みんな首を仰向けて咽喉を振りしぼっているのに、こいつ一匹だけは鬚ぼうぼうの顎<sup>くび</sup>を頸<sup>かざり</sup>飾の中へすつこめて、しゃがんだまま、地面<sup>じべた</sup>につきそうなくらい身を伏せて、そこから件<sup>くだ</sup>んの声を立てているのだが、その物凄い声には

窓ガラスがビリビリと震える位だ。こういう音楽的な犬の吠声を聞いただけでも、この村が相当なものであることは予測に難<sup>かた</sup>くなかつたが、びしょ濡れになつて、寒さに凍えている我等の主人公は、ただもう寢床のことより他は何も考えなかつた。馬車がまだしつかり停り切るのも待たないで、入口の階段へ跳び降りた彼は、よろよろとして、もう少しでころぶところだつた。ポーチへまた一人、前のよりは少し若いけれど、大変よく似た女があらわれた。その女が彼を部屋の中へ案内した。チチコフはチラと辺りを一瞥しただけであつた。部屋には鳥か何かの絵が懸<sup>か</sup>けてあり、古ぼけた縞の壁紙が張りめぐらされて、窓と窓の間には、木の葉でぐるりを捲いた形の黝<sup>くす</sup>んだ枠にはめた古風な小さい鏡が二つ三つ懸<sup>か</sup>つ

ていて、どの鏡の後ろにも、手紙だの、古い一組の骨牌札カルタだの、靴下だのといったものが押しこんである。それから文字盤に花を描いた懸時計かけどけい……それ以上は、もう欲にも得にも一々注意して見る元気がない。彼は誰かに蜂蜜でも眼になすりつけられたように、瞼と瞼がくつつきあうような気がした。暫らくすると女主人が入って来た。かなり老年の婦人で、急いで被つたらしい頭巾ずきんをつけて、頸にフランネルの布きれを捲いていた。それはよく凶作のおりだの、何か損害を受けた時に、直ぐ泣きだしたり、いつも不景気らしく首を少し傾げている癖に、筆筒の抽匣ひきだしにあちこち分けて蔵しまつてある幾つもの縞の財布には、それぞれ少しずつ小金を貯めているといったささやかな女地主の婆さんの一人で。まずその

財布の一つには一ルーブリ銀貨ばかりが貯められ、次ぎのには五十カペーカ銀貨ばかり、その次ぎのには二十五カペーカ銀貨ばかり貯めてあるのだが、他からちよつと見ただけでは、箆笥の中には、下着だの、寝巻だの、糸の玉だの、ほどいた婦人外套だの他には何も蔵しまつてないように見える。その婦人外套もお祭りにいらんな煎餅菓子を焼くおり、どうかして不断着ふだんぎを焼き切つてしまいか、または自然にぼろぼろになつてしまつた暁には、いずれ着物に仕立てかえられるのである。けれど不断着が焼けこけもせず、自然にぼろぼろになりもしなければ、儉約家しまつやの婆さんのことだから、外套はほどいたままで何時いつまでも蔵しまつておくことだろう、そして、しまいには、遺言によつて、いろんな他のがらくたと一緒

に、復また従いとこ姉妹の姪あたりの手へ渡るのが落ちであろう。

チチコフは、思いもよらぬ御迷惑をかけて申もうしわけ訳ないと陳謝した。『いいえ、構いませんよ!』と、女主人が言った。『それでもまあ、飛とんだ晩においでのになりましたもので! ひどい荒れと吹き降ぶりじゃございませんか……。こんな道中をなすつた後では、さぞ何か召しあがりたいたいことでしょうが、何分この時刻では支度も出来ませんのでね。』

この時、女主人の言葉を遮って、不意にシャーという奇態な音がしはじめたので、客はぎよつとした。それはまるで部屋じゅうを蛇はが匍はいまわっているような音であった。けれど眼をあげて見て彼はほつとした。というのは、懸時計が今まさに鳴り出そうと

しているのだと気がついたからである。その音が間もなく咽喉を鳴らすような音に代ると、やがて、ありつたけの力をこめて時計は二時を打った。まるで、破れた瓶を棒で敲くような音であった。後はまたチクタクと振子が落ちつき払って左右に振りつづけた。

チチコフは女主人に礼を述べて、自分は何も欲しくはないから、どうか御心配くださるな、だが寢床さえ拝借できればいうことはないと言った。それからただ念のために、自分は一体どこへ迷いこんでしまったのか、又ここからソバケーヴィツチという地主のところへはよほど道程があるだろうかと訊ねた。それに対して老婆は、ついぞそんな名前は聞いたこともないし、そんな地主は全然ないと答えた。



「が、少なくともマニーロフは御存じでしょう？」とチチコフが言った。

「そのマニーロフさんて、どういう方で？」

「地主ですよ、奥さん。」

「さあ、一向きかない名前ですねえ、ここいらにそんな地主はありませんよ。」

「じゃあ、他にどんな地主がありますかね？」

「ボブロフだの、スウイニインだの、カナパチエフだの、ハルパキんだの、トレパキんだの、プレシャコフだのという人達ですよ。」

「それはみんな、よつぼどの大地主なんですか？」

「いいえ、あなた、大して大地主というほどの人はいませんよ。せいぜい農奴の二十人か三十人も持っているのが関の山で、百人と持っている者はありませんよ。」

チチコフは、飛んでもない僻地<sup>へきち</sup>へ迷いこんだものだど気がついた。

「では、その、市まではよほど遠いんでしょうかねえ？」

「さあ、六十露里ぐらいのものですかね。それにしても、なんにも差しあげるものがなくなつてほんとにお気の毒ですよ！　せめて、あんたさん、お茶など召しあがりませんか？」

「有難うございます、奥さん。ただもう、寢床の他には、なんにも要りませんので。」

「ほんとにねえ、こんなお天気にも道中をなすつた後じゃ、よくおやすみになるのが何より肝腎ですからね。それじゃあ、あんたさん、この長椅子の上で横におなりなさいませ。これ、フエチニヤ、羽根蒲団と枕と敷布を持っておいで、ほんとに、何という悪い天気になったものでございましょうね、ひどい雷鳴さまで——妾わたしは一晩じゅう聖像みぞうにお燈とう明みょうをあげていたんですよ。あれまあお前さま、まるで野豚のように、背中から脇腹が泥だらけじゃありませんかね、何処でそんなにお汚しなすつたので？」

「お蔭で着物を汚しただけで済みましたが、危なく肋あばら骨ほねを折つてしまふところでしたよ。」

「おやおや、それは飛んでもないことでしたねえ！ では、何か

で背中をお拭きにならなくつてもようございますか？」

「いや、どうも。その御心配には及びませんよ。ですがお宅の女中さんに、この着物を乾かして泥を落しておいて頂きましようかな。」

「分ったね、フエチニヤ！」と女主人は、さつき灯りを持ってポーチへ出てきた女の方を向いて言ったが、その女は早くもそこへ羽根蒲団を運びこんで、両脇をパタパタ敲きながら、部屋じゅうに濛々もうもうと和毛にこげをたちあがらせていた。「お前、この方の外套とお召物めしものをあちらへ持つて行つてね、先まず初めに、亡くなつた旦那様によくそうしてあげたように、火で乾かしてから、刷毛をか

けて、はたいておくんだよ。」

「<sup>かしこま</sup>畏りました、奥さま！」とフェチニヤは、羽根蒲団の上に敷布をかけ終ると、枕をそこにおきながら、言った。

「さあ、お前さま、寢床の用意が出来ましたよ。」と女主人が言った。「では御免蒙りますよ、ゆつくりお寝<sup>やす</sup>みなさいませ！ それから何か他に御用はありませんか？ ひよつとお前さま、寝しなに誰かに踵を揉ませる習慣<sup>くせ</sup>がありなさるんじやありませんかね？ 亡くなった良人<sup>やど</sup>は、どうしないとどうしても寝つかれなかつたものですよ。」

しかし客は、踵を揉んで貰うことは断わつた。女主人が出て行くや否や、彼は急いで着物を脱ぎすてて、上着から下着にいたるまで、そっくり衣裳をフェチニヤの手に渡した。するとフェチニ

ヤも、ではお寝みなさいませと言つて、びしよ濡れの衣裳をかかえながら出て行つた。一人になつた客は、さも満足げに、殆んど天井につかえそうなほど堆うずたかく盛りあがつた寢床を見やつた。この通りフェチニヤは、羽根蒲団を敲くことにかけての名人であつた。彼が椅子を足台にして、その寢床へ這いあがると、今度は軀からだが床にとどきそうなほど凹んで、その重みで縫目からはみだした和毛が、部屋の四方八方へ飛び散つた。灯りを消して、更紗さらさの懸蒲団を引つ被ると、蝦のように軀を曲げて、すぐさま寢入つてしまつた。翌る朝、彼が眼を醒ましたのは、もうかなり遅かつた。窓越しに太陽が彼の顔へ真面まともに照りつけ、昨夜は壁や天井にとまゆうべつて静かに寝ていた蠅が今や彼に向つて総攻撃を開始していた。

一匹は彼の唇にとまり、また一匹は耳にとまっていた。もう一匹のやつは、彼の眼にとまってやろうと隙を狙っていたが、ついつつかり鼻の孔の入口へとまったものだから、チチコフが夢うつつでそれを鼻の中へ吸いこんで、思わずひどい嚏くせめをした——それが原因となつて彼はようやく眼を醒ましたのであつた。部屋を一ひ渡り見まわした彼は壁に懸つているのが鳥の絵ばかりではないこととわたに気がついた。その中には、\*1クトウゾフ將軍の肖像や、\*2パーウエル・ペトロヴィツチ時代の服によくある袖口を赤く刺繡した制服を著きている一人の老人の油絵が懸っていた。時計が又シャーという音を立ててから十時を打った。丁度その時扉口からチラと女の顔が覗いたが、すぐに隠れてしまった。というの

は、なるべく具合よく寝ようと思つてチチコフは、まるつきり素すつ裸ばだかになつていたからである。その覗いた顔が彼にはどうも見覚えがあるように思われた。いったい誰だつたのだろうと、彼はとつおいつ考えた挙句、やつとこの家の女主人であることを想い出した。彼はシャツを著た。着物はもうちゃんと乾かして、きれいにして、寢床の傍に置いてあつた。着物をきおわると鏡に近づいて、彼はもう一度そこで嚏くしゃみめをしたが、その音があまり大きかつたので、丁度その時、窓の下へ寄つて来た七面鳥がだしぬけに、その奇態な自分の言葉でもつて、何か恐ろしく早口にチチコフに囁ささややいた——尤もつともその窓は地面とすれすれなくらい低かつたのだが——どうやらそれは『やあ、御機嫌さん』と挨拶をしたものら



しい。それに対してチチコフは馬鹿野郎と呶鳴った。窓際へ近よつて、彼は目前の景色を眺めはじめた。窓から見おろしたところは、さながら鶏舎とりごやの観かんがあつた。少なくとも、その窓の下の狭い庭はあらゆる家禽かきんや家畜で一杯になつていた。七面鳥や牝鶏が数えきれないほどいた。その間を一羽の牡鶏が、鶏冠とさかを振り振り、まるで聴耳でも立てるように時々首を横へ向けながら規則ただし、い足どりで歩きまわつていた。そこには家族づれの牝豚も一匹いたが、その牝豚は塵芥ごみの山をほじくり返しながら、序ついででに雛つひつこを一羽食つてしまった。そして奴やつこさん、そんなことには一向頓着なく、あとはガツガツと西瓜の皮を食いつづけていた。この鶏舎といつてもいいくらいの小さな庭は板塀で区切つてあつて、板塀

の向うには、甘藍キャベツや、葱や、馬鈴薯や、甜菜てんさいや、その他いろんな自家用の野菜のつくつてある広々とした菜園がつづいていた。その菜園には処々に林檎その他の果樹が植えてあつて、それにはかきさき鵲や雀を防ぐための網がかぶせてあるが、殊に雀は、雲でも垂れさがつて来るような大群をなして、あちらこちらへ渡り移つていた。雀の群をおどすために、長い竿のさきに両手をひろげた案山子が、何本もたてられていた。その中の一つには、この家の主人の古い頭巾がかぶせてあつた。菜園の向うにはずっと、てんでんばらばらに百姓家が建ちならんでおり、きちんとした家並にはなつていなかつたけれど、チチコフの観察したところでは、それらは村民の暮らし向きの悪くないことを示していた。というのは、

いずれもちゃんちゃんと手入れが行きとどいていたからで、古くなった屋根板は克明に新らしいのと取り換えてあり、門の傾いているような家は何処にも見当らなかつた。そればかりか、屋根のある百姓の物置小屋には、まだ殆んど真新らしい、取つて置き荷馬車が一台、ところによつては二台も備えてあるのが眼についた。『この婆さんの村もまんざら馬鹿にしたもんじやないぞ。』  
こう呟やくと、彼は早速この家の女主人といろいろ話しあつて、もつと近しくなろうと肚をきめた。彼は今しがた女主人が顔を出した扉の隙間からちよつと覗いてみて、彼女がお茶のテーブルに坐つているのを見とどけると、ニコニコと如何にも愛想のいい顔つきで、そこへ入つて行つた。

「おや、お早うございます。よくお寝みになれましたかね？」女主人は椅子から腰を浮かしながら言った。彼女は昨夜ゆうべよりもいい服装なりをして、黒っぽい着物をきていたが、頭巾はもう被っていないかった。けれど、頸にはやはり何か巻きつけていた。

「ええ、よく寝やすませて貰いましたよ。」チチコフはそう言いながら、安楽椅子に腰をおろして、「貴方は如何でしたか、奥さん？」  
「どうも、妾はよく眠られませんのでね。」

「どうしてですか？」

「不眠症なんですよ。しじゅう腰が痛みましてね、それに脚が、この膝くるぶし節の上ところが疼ずきずき々するのですよ。」

「なあに、そりやじきに癒りますよ、奥さん。何も御心配になる

ことはありませんよ。」

「どうか癒つてくれればいいと思えますわい。それで妾は豚の脂をつけたり、テレピン油をぬったりしてみたのですがね。それはそうと、お茶は何を入れて召しあがりますかね？ この鑊には果実酒が入っておりますが。」

「悪くありませんな、奥さん。その果実酒とかを頂きましょう。」

読者は、チチコフが如何にも愛想よくはしていたけれど、マニローフを相手にした時よりはずっと自由に話して、少しも固くなつていないことに、とつくに気づかれたことと思う。ここで一言しておかねばならないのは、我々ロシア人がまだ外国人に及ばない点が多少あるにしても、応待の上手な点では、遙かに彼等を追

い抜いていることである。ロシア人のさまざまな応接の機微と軽妙さは、ちよつと数えあげることが出来ない位だ。フランス人やドイツ人にはとてもその特異性や使いわけをのみこむことも理解することも出来はしない。彼等は同じ声と同じ言葉で、百万長者にでも、けちな煙草商人にでも話しかける——勿論、前者に対しては、それ相応に内心でペコペコしているには違いないのだが。ところがロシア人になると大違いだ。ロシア人の中には、相手が農奴を二百人もっている地主と、三百人もっている地主とでは、話し方をすっかり変え、三百人もっている地主と、五百人もっている地主とでは、又まるで違つた話し方をし、五百人もっている地主と、八百人もっている地主とでは、これまた別な話し方をす

るといった名人がいる。つまり、こうして百万までのぼって行く間にも、それぞれ微細な差異をつけて話すことが出来るのである。例えばここに事務局があるとする——いやここではない、何処か世界の涯の国にだ。その事務局に、局長があるとする。その局長が下僚に向つてどつしり構えているところをちよつと見給え——それこそ怖ろしくなつて、言葉も出ない位だ。威厳といい、上品ぶつたところといい……やつこ奴さんの顔に何ひとつ不足しているものがあるだろうか？ 絵筆をとつて肖像を描いたら、\*3プロメシユースだ。手もなくプロメシユースそつくりだ！ 鷲のように辺りを睥睨へいげいしながら、軽快な足どりで悠然と歩きまわつてござる。ところが、この他ならぬ鷲が一步その部屋を出て、自分の上役の

部屋へ近づくと、たちまち鷓鴣しやこのようになってしまい、書類を小

脇にかかえたまま、きつきゆうじよ鞠躬如として伺候しこうするのだ。社交界へ出

たり、夜会へ出席しても、もし下役の者ばかりなら、プロメシユ

ースは依然としてプロメシユースでいるが、ちよつとでも自分よ

り上役の者が居合わせたが最後、このプロメシユース先生、たちま忽ち、

\*4オヴィディアスでも思いつくことの出来ないような、ひどい

変り方をする——蠅だ、いや蠅よりも更に小さい、砂粒ぐらいに

ちぢこまってしまふのだ！ 『いや、あれはイワン・ペトローヴ

イツチじゃない。』こう、諸君は彼を見ながら言うだろう。『イ

ワン・ペトローヴィツチはもつと背が高いのに、この男は小柄こがらで

瘦せつぽだ。あの人なら太いバスの大きな声で話して、決して笑



つたりなぞしないが、一体この男は何だろう、まるで小鳥のように小さな声で喋りながら、しよつちゆう笑つてばかりいるじやないか』と。ところが傍へ寄つてよくよく見れば、確かにイワン・ペトローヴィツチなのだ！『へへえ！』と諸君は内心で魂消たまげるだろう……。だが、しかし我々は、もうそろそろ本篇の登場人物の方へ戻るとしよう。で、チチコフは前述の如く、全然遠慮をしないことに決めたので、お茶の入った茶碗を手に取ると、早速それに果実酒を注ぎこんで、こんな風話を持ち出したのである。

「阿母おぼさん、あなたは大変いい村をお持ちですねえ。農奴はどの位おありなんですか？」

「農奴は、かれこれ八十人ぐらいのものですがね、」と、女主人

が言った。「因果と、この頃は災難つづきでしてね、去年なんぞの不作ときたら、おつ魂消るくらいでしたよ。」

「それでも、見たところ百姓たちは元氣そうで、家並もしつかりしているじゃありませんか。失礼ですが、ときに御苗字はなんと仰っしゃいますか？ 昨夜は放心ほんやりしてしまつていて……何しろ、あんな真夜中にやって来たものですから……。」

「十等官の寡婦ごけで、 कोरोボチカといっていますんで。」

「どうも有難うございました。で、御名前と御父称は？」

「ナスターシャ・ペトロローヴナと申しますよ。」

「ナスターシャ・ペトロローヴナ？ いいお名前ですね——ナスターシャ・ペトロローヴナ。私の親身の叔母で、母の妹なんですが、

やはりナスターシャ・ペトローヴナというんですよ。」

「それで、あなたのお名前は何と仰っしゃいますかね？」と、女地主が訊いた。「あんたさん、ひよつとお役人じゃございませんかね？」

「いいえ、阿母さん。」と、チチコフは薄笑いを浮かべて、答えた。「決して役人なんかじゃありませんよ。ただ商用で旅をしているだけです。」

「それじゃ、あんたは仲買商人でしょう！ それあ惜しいことをしましたね、妾はただの商人あきんどに蜂蜜をほんとに安く売ってしまったのです。あんたに買って頂いたらよかつたのに。」

「いや、蜂蜜は買いませんよ。」

「じゃあ、何か他の品で？ 麻ですかね？ ところが、生憎と今、麻もほんの少ししかなくて、せいぜい半\*5プードもありますかね。」

「いや、阿母さん、私が買うのは、もっと他の品ですよ。どうです、あなたの村では、農奴は死んでいませんか？」

「死にましたとも、あんたさん、十八人も死にましたよ！」と老婆は、溜息をついて、答えた。「それも、死んだのは、みんな申し分のない、働き盛りの者ばかりですよ。尤もそれから、生まれるには生まれましたがね、そんなものが何になるもんですか？ みんな小魚ざこばかりだね。それだのに役人がやって来ては、人頭税を払えって言いますだよ。農奴は死んでしまっているのに税金だ

けは生きていますとおりに取りたてるのですよ。つい先週も、鍛冶屋が一人、焼けておつ死ちにましたがね、なかなか立派な腕前の鍛冶屋で、錠前屋の仕事まで心得ておる男でしたかね。」

「じゃあ、この村に火事があったのですか、阿母さん？」

「いいえ、お蔭とまだそんな災難は見ずにいますかね。火事なんぞだったら、尚更、堪ったものじゃありませんが、実は、お前さま、その鍛冶屋はひとりで焼けておつ死ちんだのですよ。あんまり度外ずれな酒飲みだったもんで、お腹のなかに火がついたとでもいうのでしようよ、口から青い焰が噴き出しましてね、そのまま、だんだんからだ軀ただが爛れて、しまいには炭のように真っ黒になつてしまいましただよ。ほんとに腕の達者な鍛冶屋でしたが！ お蔭

で今じゃもう、妾は馬車で出かける訳にもゆかないのですよ、馬の蹄鉄かなぐつを打つ者がありませんのでね。」

「何事も神様のお思召ほしめしですよ、阿母さん！」とチチコフは、溜息を一つついてから言った。「神様の御心に逆らうようなことを言つてはなりませんよ……。じゃあ、それを一つ私に譲つて下さいな、ナスターシャ・ペトロヴナ！」

「それって、あんたさん、一体なにをですかね？」

「つまりその、死んだ農奴を残らずですよ。」

「一体どうしますだね、そんなものを譲るって？」

「どうもこうもありませんよ。なんなら、売って頂いてもいいんです。ちゃんと代金だい金は払いますよ。」

「どうもね？　頓とんとお話の意味わけが分りませんよ。まさか、土の中からそんなものを掘り出そうと仰おんつしやるのじゃないでしょうねえ？」

チチコフは、老婆がとんでもない勘違いをしていることに気がついたので、事の次第をよく会得させる必要があると考えた。そこで手短かに、この譲渡もしくは売買は、単に証書面だけのことで、しかも農奴を生きているものとして記載するだけだと説明した。

「そうしてお前さま、そんなものを何になさるだね？」と、老婆は彼の顔をまじまじと見詰めながら訊ねた。

「それは私の勝手ですよ。」

「でも、それはみんな死んでるのですよ。」

「生きていると誰が言いましたね？ 死んでいればこそ、あなたには損なんでしょう——そんなもののために、みすみす税金を払ったりなんかしてさ。で、私がそれを買取って、面倒や費え<sup>ついで</sup>を無くして差しあげようと言ってるんですよ。分りましたかね？

そんな厄介ばらいをして差しあげるばかりか、まだおまけに、こちらから十五ルーブリさしあげようというんです。どうです納得が行ったでしょう？」

「どうも、とんと妾にや分らない、」と、女主人が休み休み言った。「ついぞこれまで、死んだ農奴なんて売ったことがありませんもの。」



「当り前です！ そんなものを誰ぞにお売りになつたら、それこそ奇怪な話ですよ。それとも、実際、そんなものが何か役に立つとでも思つておいでですかね？」

「なんのなんの、そうは思いませんよ？ そんなものが何の役に立つもんですか？ 役に立つことは少しもありませんよ。ただ、どうも腑に落ちないのは、それが死んでしまつていることですよ。」

うん、どうして、なかなかの頑固女だわい！ と、チチコフは肚の中で考えた。「いいですかね、阿母さん！ まあよく考えて御覧なさいよ。あなたはみすみす損をしながら、そんなもののために税金を払つてなざるんでしよう、生きているものとして……

。  
「

「ああ、阿父おとつあん、もうそれは言わないで下さい！」と、女地主はすぐ話につりこまれて、「つい二週間まえに百五十ルーブリの余も払わされて、おまけに役人に心附までしたのですよ。」

「それ御覧なさい、阿母さん！ だから、せめてそんな役人への賄賂だけでも、しないで済む工夫をしたらどうです、今夜、その分は私が払うことになるのですからね。——あなたじゃない、私が払うのですよ。納税の義務は残らず私が引き受けるのです。そのうえ、登記も自腹を切って済まそうというのですよ。分りましたかね？」

老婆は考えこんでしまった。なるほど、この取引は確かに有利

らしいが、ただどうもあんまり突飛で先例のない話なので、何かこの仲買人に騙されているのではないかと、そろそろ心配になりました。それに第一、この男は、どこの馬の骨とも分らず、しかもあんな真夜中にやって来たりしたのだから。

「それじゃあ、阿母さん、一つ手を拍つことにしてはどうだね？」とチチコフが言った。

「だかねえ、お前さま、妾やついぞこれまで死人を売ったことなんてありませんからさ。それあ、生きてるのなら、二年前にもプロトポポフに売ってやりましたがね——一人百ルーブリずつで女中を二人ね、そして大変喜ばれたものですよ、なにせ、とても申し分のない働きもんになって、ナプキンきれの布まで自分で織るって

言いますだよ。」

「いや、そんな生きた者のことじゃありませんよ、そんなものは、どうでもいいんで！ 私の訊いているのは、死んだ奴のことですよ。」

「実のところ、初めてのことだから、なんか損になるのじゃないかと、どうもそれが心配になりましたね。ひよつとしたら、お前さまは妾を騙していなさるので、それがその……もつと値のいいもんじゃないかと思ひましてね。」

「まあ、よくお聴きなさい、阿母さん……ええ、何という人だろう！ どうしてそんなものに値があるんです？ 積つても御覧なさい。屍はい灰はいじゃありませんか。ね、いいですか？ それは屍はい灰はいに

すぎないんですよ。どんな役に立たない、下の下の代物、例えば、そこいらに落ちている襤褸ぼろつきれみたいな物でも、値段がありますよ——襤褸だつて紙工場へ売れますからね。ところが死んだ農奴ばかりは、からつきし何の役にも立ちませんからね。それとも、何か役に立つとでも仰つしやるんですか？」

「それあもう、ほんとにそうですよ。まったく、何の役にもたぢやしませんかね。ただ、どうも一つだけ肚へ入らないのは、死人を一体どうするのかということですよ。」

えい、くそ、なんて物分りの悪い婆あだろう！ とチチコフは、そろそろ堪忍袋の緒おを切らせながら、肚の中で呟やいた。どうして、ちよつとやそつとで説き伏せられたもんじやない！ すつ

かり汗をかかしやあがつて、この糞婆め！ 彼は、ポケットからハンカチを取り出して、ほんとに額ににじみ出た汗を拭きはじめた。だが、チチコフが腹を立てるのは間違っていた。もつと偉い人物や、お上の役人の間にすら、どうかするとこのコロロボチカと一いって体いなのがあるものだ。そういう連中は、噛んでふくめるように言い聞かせても、とんと納得させることが出来ず、どんなに明々白々な論拠を以もつて臨んでも、まるで暖簾のれんと腕押しをすると同じで、さっぱり手ごたえがないのだ。で、チチコフは汗を拭くと、今度は何か別の方面から相手を口説きおとすことが出来ないものか、一つ試してみようと決心した。『ねえ、阿母さん、』と彼は言葉を改めて、「それでは私の言うことを故意わざと理解しよう

となさらないのか、それとも何か口から出まかせに、かれこれ言いなさるんだね……。私はあなたに金子かねを差しあげるのですよ、紙幣で十五ルーブリという金子かねを——分りますかね？ 金子かねですよ。往來で見つかる代物じゃありませんよ。じゃあ一つお訊ねしますが、蜂蜜は幾らでお売りになりましたね？」

「ブードあたり十二ルーブリでね。」

「嘘をおしやい、阿母さん。十二ルーブリになんて売れるものですか。」

「ほんとですよ、十二ルーブリで売りましたよ。」

「まあ、それならそれとして、よござんすかね？ それは蜂蜜です。それだけ貯めるには、恐らく一年の間、あれやこれやと心配

や苦勞をして面倒を見たんでしよう——あちこち持ちまわったり、蜂を餓死させたり、長の冬じゆう土室つちむろへかこつてやつたりしてさ。ところが、死んだ農奴は所詮この世のものじゃありませんからね。別に何の手数がかかった訳でもなし、そいつらがこの世を去つて、あなたの家計に損失を招いたのも神様の思召です。さて蜂蜜では、さんざん苦勞をしたり骨を折つたりして、やつと十二ルーブリお取りになりましたが、今度は何の苦勞もなしに、素手すてでもつて、あなたは十二ルーブリどころか、十五ルーブリ、それも銀貨ではなく、手の切れるような青紙幣あおざつで受け取れるのですよ。—これほど有力な説得に会つては流石の老婆も今度は降参するに違いないと、チチコフは殆んどそれを疑わなかつた。



「成程ね、」と、女地主が答えた。「なにせ妾は、世間知らずの寡婦ごけのことだからね！　いつそ、もう少し待ってみますわい、ひよつとしたら、もつと他の商人あきんどがやって来るかもしれませんか。らもう一度値をあたってみることにして。」

「馬、馬鹿な、阿母さん！　そんなことをいうのは恥ですよ！　まあ、何を仰つしやるのか、よく考えて御覧なさい！　いったい誰がそんなものを買いますかね？　第一、そんなものが何の役に立ちますかね？」

「でも、どんなことで、家事むきに入用いりようなことがあるかもしれませんかからね……」と老婆は答えたが、言葉の途中で、口をぽかんとあけたまま、相手が何と答えるかと、殆んどびくびくしながら

ら、客の顔を見まもった。

「なに、死人を家事むきに使うって！ こりや驚いた！ じゃあ、夜分、雀おどしに菜園はたけにでも立てておこうってんですかね？」

「ああ、桑原くわばらくわばら々々！ 何という怖ろしいことを言いなさるだね！」と、老婆は十字を切った。

「それじゃあ、一体、とつておいて何に使おうってんだね？ それに、骨だこつの墓だのは、もとのまま、こちらに残るんですよ。取引は証書面だけのことですからねえ。さあどうです？ どうするんです？ 何とか返事だけでもして下さいよ。」

老婆はまた考えこんでしまった。

「何を考えてるんですか、ナスターシャ・ペトローヴナ？」

「ほんとに、どうしていいやら分らないんでね。いつそのこと、麻を買って貰いましょうかね。」

「麻が一体どうしたっていうんです？ 飛んでもない、私は全然別のものをお願いしてるのに麻などを押しつけなさるんですか！

麻は麻で、またこの次ぎ来ますからね、その時に頂きましょう。どうしますかね、ナスターシャ・ペトローヴナ？」

「それがねえ、どうも、まるで聞いたこともないような、おかしな商いだもんでね！」

ここでチチコフは、すっかり堪忍袋の緒をきらしてしまい、腹立ちまぎれに椅子を床に叩きつけざま、悪魔を引合いに出して老婆を罵った。

その言葉に、女地主はすっかり慄え上つてしまった。「ああ、どうぞそんな怖ろしいことを仰つしやらないで、鶴つるかめ亀つるかめ々々！」と、彼女は真蒼になつて喚いた。「つい一昨日おとといの晩も悪魔の夢を見ましたが、寝しなにお祈りをした後で、ふと思いついて骨牌カルタで運だめしなどしたので、たしかにその罰で、神様があんな悪魔をお遣つかわしになつただね。それあ、見るのも穢つらわしい姿で、牡牛の角より長い角の生えた奴でしたよ。」

「ええ、お前さんなんぞ、そんな悪魔の十匹も夢に見なかつたのが不思議なくらいさ。私はね、ただキリスト教徒としての博愛心から、あんたのためを思つて言い出したまでのことさ。可哀想な寡婦ごけさんが胸も潰れる思いをしながら、貧苦にあえいでいる有様

を見かねてさ……。えい、もう構うこつちやない、とつとと斃くたばつてしまふがいい、お前さんの持村むらも一緒に滅びてしまふがいいんだ……」

「まあ！ お前さまは、」と老婆は、怖る怖る相手の顔を見つめながら言った。「なんて酷い言葉づかいをなさるだね！」

「いや、お前さんにはもう何にもいう言葉がない！ まあ、せいぜいよく言つて、お前さんはちようど乾ほしくさ草の上に寝ていながら、自分でそれを食うでもなければ他人に食わせもしない番犬みたいなものだからね。まだお前さんから、いろんな農産物を買うつもりだったけれど、仕方がない、私は政府おかみの御用達ごようたしも務めていますからね……。」ここで彼は、別に何の目的あてもなしに、ほんのち

よつと嘘を吐いたのだが、それが思わぬ効果を表わした。御用達という言葉が、強くナスターシャ・ペトロローヴナの心を動かした。少なくとも彼女は、殆んどもう哀願するような声で言いだした。

「どうして、そんなにぷりぷり腹を立てなさるだね？ お前さまがそんな短気な方だと初めから分っていたなら、決してかれこれ言うのじゃなかつたんですよ。」

「何も怒ることなんざありませんよ！ 中身のない玉子にも劣る、つまらないことで、腹を立てる私じゃありませんからね！」

「じゃあ、そういうことにして、お紙幣さつで十五ルーブリください。て手離すことにしますよ！ ただね、あんたさん、その御用達の話ですがね、裸はだかむぎ麦そばの粉だの、蕎麦粉そばこだの、挽割ひきわりむぎ麦だの、ま

たは屠殺した家畜だのをお買い上げになる時は、どうぞ妾に恥をかかせないで下さいよ。」

「いいとも阿母さん、恥をかかせやしませんよ。」彼はそう言いながらも、三筋みすじになつて顔を流れる汗を手で拭きはらつた。それから老婆おばあに向つて、市まちに誰か代人なり、または知合いで、登記の手てつづき続つづやその他必要なことを全部委任することの出来る人はないかと聞き糺ただした。『ありますとも！ 祭司長のキリール神父とは懇意で、その息子さんが裁判所に勤めておりますだよ。』と、コロボチカが言った。そこでチチコフはその人に宛てて委任状を書いてくれと頼んで、余計な手数をはぶくために、自分で文案を考へたりしたほどであつた。

この人がもし、うちの麦粉や家畜をずっと政府の御用おかみに買いあげてくれることになれば、ほんとに有難いよ。と、コロロボチ力はその間に、ひとりで考えた。この人を巧くまるめこんでおかなくちやなるまいて。そうそう、昨夜ゆうべの捏粉ねりこがまだ残っていた筈だから、フェチニヤに言いつけて、あれで薄焼フリンを焼かせよう。それから、あつさり卵だけ入れたパイを焼くのも悪くないて。うちでは、あれをとでも上手に焼くし、それに大して手間も暇もかからないから。そこで女主人は、パイを焼こうという考えをさつそく実行に移すために部屋を出ていったが、どうやらそれにならぬ。うちの台所で出来た他の品をあしらうつもりらしかった。一方チコフは、自分の手箱から必要な書類を取り出すため、ゆうべ一



夜を過ごした客間へ引つ返した。客間は疾うの昔に、すっかり片づけられ、例の豪勢な羽根蒲団も姿を消して、長椅子の前には卓ク布ロスを掛けたテーブルが据えてあつた。その上へ手箱を持ちあげたまま、彼は暫らく息を休めた。というのは、まるで川へでもはまつたように、からだ軀じゆう汗だくになつたような気持で、身につけているものは、シャツから靴下に至るまで、残らずびしょ濡れになつていたからだ。ちえつ、あの糞婆め、手を焼かせやあがつて！ と、彼は少し休んでから呟やいた。そして手箱をあけた。ところで、読者の中には定めし、手箱の構造から内部の仕組しくみまで知りたいと思うほど、実に物好きぶごじんな御仁がおられることと思う。よろしい、その望みを叶えて進すすめて悪あくかろう筈はない。さてそこで

内部の仕組だが、先ずいちばん真中に石罫箱があつて、その向うに剃刀を入れる狭い仕切りが六つ七つある。それから、砂函とインキ壺を入れる正方形の枡穴があつて、その二つの枡穴の中間には、鷺<sup>が</sup>ペンや封蠟などといった細長い物を入れる長方形の溝が刳<sup>く</sup>りぬいてある。それからまた、小物をいれる、蓋のあるのや蓋のない、いろんな仕切りがあつて、訪問用や葬式用の名刺や芝居の切符などが、ちゃんと心憶えにしまつてある。このいろんな仕切りのついた上<sup>うわおき</sup>置をそっくり取りのけると、その下には半切の用紙がぎつしり詰まつており、手箱の横腹には金子<sup>かね</sup>を入れておく、小さな秘密の抽<sup>ひきだし</sup>匣がついている。それはいつも、引き出すと同時に大急ぎで押しこまれてしまうため、一体どのくらい金子<sup>かね</sup>が蔵<sup>しま</sup>

つてあるのやら、確かなことは分らなかつた。チチコフは、すぐさま仕事に取りかかり、先ず驚ペンを削つて、書きはじめた。丁度そこへ女主人が入つて来た。

「あんたさん、いい手箱をお持ちですねえ。」と彼女は、傍へ腰かけながら言った。「おおかたモスクワでお買いになつたのでしよう?」

「ええ、モスクワでね。」と、チチコフは書きものを続けながら答えた。

「それあ、ちゃんと知っていましたよ。何でもあちらの物は出来がよろしいからね。一昨年おとしも妾の妹があちらから子供の防寒靴を持って来ましたがね、品が丈夫なもので、いまだに履いています

だよ。おやまあ、お前さま、どれだけ証券用紙を持っておいでなさるだね！」と彼女は手箱の中を覗きこみながら、言葉をつづけた。実際そこには証券用紙がたくさん入っていた。「それ、一枚でもいいから、頂かれませんかね！　うちには、そういうのがありませんのでね、お上へ請願書を出すような時、ほんとに困るのですよ。」

チチコフは彼女に、この用紙はそういう種類のものではなく、登記の手續に用いるものだから請願書には使えないと説明した。けれど彼女を宥めるために、一ループリもする用紙を一枚やった。彼は委任状を書きあげると、老婆に署名をさせて、農奴の名簿の<sup>てもと</sup>抄本を貰いたいと言った。ところが、この女地主の手許には、そ

んな名簿の書かきつけ附などは何ひとつなく、彼女は殆んど全部諳そらで憶えていた。そこでさつそく彼は、老婆に一々その名前をあげさせることにした。その中の百姓の名前や、殊にその綽名あだなに、ちよつと面喰らうようなのがあつたので、彼はそれを聞きたんびに、ひと先ず筆をひかえてから、やつと書きにかかるのであつた。中でも、槽おけかまわすのピョートル・サヴェーリエフ というのを聞いて殊に驚いた。彼は思わず、『こいつは長つたらしいなあ!』と呟つぶやいた。もう一つのは、名前に 牝牛の煉瓦 という附録つけたりを頂戴しており、また簡単に 車のイワン と呼ばれているものもあつた。ようやく書きあげると、彼は少し鼻をふくらませて空い気を吸きつたが、ふと何かバタで焼いたものらしい、美味うまそうな匂

いがプーンとした。

「どうぞ一つお撮つまみなすつて。」と女主人が言った。チチコフが振りかえつて見ると、いつの間にか、蕈きのこだの、肉饅頭だの、早焼パンだの、パイだの、薄焼ブリンだの、いろんな物を入れた厚焼レピョーシカ、例えば葱を入れたり、芥子を入れたり、凝乳を入れたり、石斑魚うぐいを入れたり、その他あらゆる混ぜものをした厚焼レピョーシカが、テーブルの上に堆うずたかく盛りあげてあった。

「これは玉子入りのあつさりしたピロークでござんすよ！」と女主人が言った。

で、チチコフはそのあつさりした玉子入りのピロークに手をつけて、いきなり半分の余よも食つてから、それを褒めそやした。実

際ピロークそのものも美味うまかったが、殊ととに老婆を相手に、すったもんだの一芝居うった挙句なので、一ひとしお入美味しく思われたのである。

「薄焼プリンは如何で？」と女主人がすすめた。

それに答える代りに、チチコフは薄焼プリンを三枚いっしよに丸めて、それに溶かしたバタをべつとり塗まぶして口の中へ押しこむなり、ナプキンで唇と手を拭った。それを三度ほど繰り返してから女主人に向つて、自分の馬車を用意させてくれと頼んだ。ナスターシヤ・ペトローヴナは、早速フエチニヤをやつて命令を伝えさせたが、それと同時に、もつと薄焼プリンの熱いのを持つてくるように言いつけた。

「阿母さん、お宅の薄焼プリンは、大変おいしいですね。」とチチコフは、新らしく持ち出された焼きたてのにつけながら、言った。「ええ、うちじや、これを焼くのが自慢でしてね。」と女主人が言った。「ただ残念なことに麦が不作で、粉の出来がかんばしくのうて……。それはそうと、お前さま、どうしてそんなにお急ぎになるんで？」と彼女は、チチコフが縁カルツーズ無帽を手に取ったのを見て、言った。「まだ馬車の支度も出来てやしませんよ。」

「なあに、阿母さん、支度はすぐ出来ますよ。私の馭者は、馬をつけるのが早いからね。」

「せいじやあ、どうか、御用達の節にはお忘れにならないで下さいよ。」



「忘れませんとも、忘れませんとも。」とチチコフは、玄関へ出ながら言った。

「それから豚脂ラードは買って頂けませんかね？」と女主人は、その後を追いながら言った。

「どうして買わないことがあるもんですか？ 買いますとも、ただ、今じゃなく後でね。」

「\*6 十二日節の時分には豚脂ラードも出来ますからね。」

「ええ、買いますとも、買いますとも。何でも買いますよ、その豚脂ラードもね。」

「おおかた、鳥の羽毛はねなんかも要ることがあるのでしよう。\*7  
ファイリポフキ  
大齋期の時分になると、うちにも鳥の羽毛はねがたまりますよ。」

「ようござんすとも、ようござんすとも。」とチチコフが言った。  
「それ御覧なさい、お前さま、まだ馬車の支度は出来てやしませんに。」こう女主人は二人がポーチへ出た時に言った。

「いや、もう直ぐ出来ますよ。ところで、本街道へ出るにはどう行ったらいいか、ひとつ教えて下さらんか。」

「さあ、どう教えて進しんぜたものかね？」と、女主人が言った。

「口で話すのは、ちよつと難かしいんですよ、矢鱈に曲り角があるもんですからね。いっそ、女あまつ子を道案内につけてあげましよう。お前さまの馬車には、馭者台にその子に乗つける場所ぐらいおありでしょうがね？」

「それあ、無論ありますよ。」

「じゃあ、女あまつ子を一人つけてあげましょう。その子は、道をよく知っていますからね。ただ、いいかね、お前さま、その子を連れて行ってしまわないで下さいよ。前にも一人、商あきんど人につれて行かれてしまいましたからね。」

チチコフが、決してそんなことはしないと保証すると、コローボチカはやつと安心して、屋敷うちにあるいろんなものを見まわしはじめた。ちようど倉の中から、蜂蜜を木の鉢に入れて持ち出した女中頭をじろりと眺めたり、門口へ顔を出した百姓に一瞥をくれたりして、だんだん、家事上のことに心を移していった。だが、どうしてこういつまでもコローボチカのことなどに関わっていることがある？　コローボチカだろうが、マニローフだろう

が、乃至は農事上のことであろうが、農事以外のことであろうが——そんなことはあつさり片づけておけばいいのだ！ この世で不思議と思われるのはこんなものではない。どんな面白そうなものでも、少しゆっくりその前に佇たたずんでいると、忽たちまち悲惨なものに変つてしまい、果ては何とも言いようのない思いが胸に浮かんで来るのだ。恐らく諸君はこんなことまで考え出すかも知れない。

待てよ、果してこのコロ―ボチカという婆さんは、人文開化の涯はしない段階の、それほど低いところに立っているのだらうか？  
又この婆さんと、あの厳めしい壁に取りかこまれて、ちゆうてつ 鑄鉄

の階段や、ピカピカ光る真鍮や、マホガニイや、絨毯で飾られたごうしゃ 豪華な邸宅の中で、読みかけの本に向つて欠伸をしながら、誰

か気のきいた訪問客でもやって来ないかと待ち侘びているような女性との間に、果してそれほどの大きな懸隔けんかくがあるだろうか？

えてそういう女性は、自分の智慧をひけらかしたり、うけ売りの思想を吹聴したりする場所ところばかり狙っているのだが——その思想も流行の法則どおり、ほんの一週間ぐらい市を風靡するに過ぎない思想で、それも、邸の中や、御本人が農事にかけて無智なため恐ろしく乱脈を極めている領地が一体どうなっているかというような問題とは、凡そ縁およの遠い、やれフランスでは今どんな政治的変動が起きかかっているの、最近のカトリック教はどんな傾向をとっているのといったようなことばかりなのだ。だが、そんなことは、どうでもいいじゃないか！ 何だってこんな話を持ち出

さねばならないのだろうか？　しかし何の気がかりもない、陽気でのんびりした気持の真只中へ、どうしてこんな、それとはまるで別な、変てこな気分が不意に浮かんで来るのだろうか？　まだ、すっかりこちらの顔から笑いの影が消え去らぬうちに、疾くも、同じ人々の間におりながら、まるで自分が別人のようになってしまひ、顔にはもう別な影がさしているのだ……。

「そら、馬車が来ましたよ、そら、馬車が！」とチチコフは、ようやく自分の半蓋馬車ブリーチカがこちらへやって来るのを見ながら、叫んだ。「馬鹿野郎、何をそんなにぐずぐずしていたんだ？　貴様はまだ昨日の酔いがすっかり醒めきらないんだな？」

セリファンは、それには何の返事もしなかった。

「じゃあ、阿母さん、さようなら！　ところで、その女の子つてのは何処にいるんです？」

「これ、ペラゲヤヤ！」と女地主は、ポーチの近くに立っていた十一ぐらいの女の子に向つて声をかけた。その女の子は手染てぞめの着物をきて、裸足のままだったが、新らしい泥をべつとりつけた足は、遠くから見ると長靴ばきのように見えた。「この旦那に道を教えてあげるんだよ。」

セリファンはその女の子に手を貸して、馭者台へ引っぱりあげてやったが、彼女は旦那の乗る踏段へ片足をかけて、先ずそこを泥だらけざにしておいて、ようやく上へ這いあがると、セリファンの傍に座ざをしめた。次いでチチコフが踏段に足をかけると、重み

で馬車はちよつと右側へ傾いたが、やがて席につくと、『さあ、これでよしと！　じゃあ、阿母さん、さようなら！』と言つた。馬は駈けだした。

セリファンは途中ずっと気難かしい顔をしていたが、それと同じ時に自分の役目には非常に注意を払っていた。これは、何か失敗しくじつたり、酔っぱらつたりした後で、彼がいつもやる癖であつた。

どの馬も驚くほど綺麗に磨きたててあつた。頸くびわ圈も一頭のなどはこれまで、何時いつもボロボロになつて、革の下から麻屑が覗いていたりといったひどいものがかけてあつたのだが、いまはそれが立派に繕つてある。途中もずっと彼は黙りこくつたまま時々鞭をならすだけで、馬に向つても例のお説教をしなかつた。いうまでもな



く連銭葦毛れんせんあしげなどは、何か教訓的な言葉を聴かせて貰いたくて堪らないのだが、いつもはあれほどのお喋りの馭者が、今は手綱をだらりと握ったまま、ただほんの形式的に鞭で背中を撫でてくれるだけである。しかもこの際、馭者の不機嫌な口から聞かれるのは、ただ単調で糞面白くもない、『こら、間拔め！ ぼやぼやするない！』という呶鳴り声だけであつた。栗毛や『議員』の方も、いつこう『おい、大将』とも『この野郎』とも言つて貰えないので、心中甚だ穏やかでなかつた。連銭葦毛は自分の肥つた大きな尻に、氣持の悪い鞭づかいを感じた。ちよつ、恐ろしく御機嫌が悪いや！ こう彼は、ちよつと耳をピクつかせながら肚の中で思った。でも、殴りどころはちゃんと知つてやがらあ！ まと

もに背中では殴らないで急所ばかり狙って、耳を引っぱりたいたり、  
肚へピシヤンと鞭をまわしたりしやがってさ。

「あれを右へ行くのかい？」と、眼の覚めるような爽すがすが々すがしい緑  
の野良のらを、きのうの雨で黒くなって横ぎっている道を鞭で指しな  
がら、セリフアンは自分の傍に坐っている女の子に向つてぶつき  
ら棒に訊ねた。

「ううん、おらがちゃんと教えてやるだよ。」と、女の子が答え  
た。

「さあ、どちらだい？」と、いよいよ二又まで来た時、セリフア  
ンが訊いた。

「此方こつちだよ。」と女の子は、手をあげて指さしながら答えた。

「なんだい！」とセリファンが言った。「やつぱり右じやねえか。こいつ、右と左が分らねえんだな！」

天気は非常によかったけれど、地面がひどく溼ぬかつていたため、泥が車の輪にへばりついて忽たちまちまるで毛氈フェルトでもかけたようになり、それがため馬車はぐつと重くなった。おまけに土地が粘土質で、むやみに粘つこかった。それやこれやで一行は、正午ひるまえに村道を出抜けることが出来なかった。女の子でもいなければ、それすら覚おぼつか束つかなかつたことだろう。それというのも、いろんな道が四方八方へ、まるで袋からざりかにがにに 蛙を逃がしたように、矢鱈やたら無む性に伸びひろがっている始末で、これではセリファンがどんなに無駄道を喰つたところで、決して彼の罪とは言えなかつたから

である。間もなく女の子が、遠くの方に黝くすんでいる一軒の建物を指さして、『ほら、あそこが本街道だよ！』と言った。

「あの建物いえはなんだい？」とセリファンが訊ねた。

「料理屋だよ。」そう女の子が答えた。

「それじゃあ、もう俺たちだけで行かれるよ、」と、セリファンが言った。「お前は家うちいけえりな。」

彼は馬車を停めると、女の子を助けておろしてやりながら、

『ちえつ、なんて穢ねえ足をしてやがるんだい！』と、吐き出すように呟つぶやいた。

チチコフが二カペーカ銅貨を一つやると、堪能するほど馭者台に乗せて来て貰った女の子は、ぶらぶらと家路をさして帰って行

った。

- \*1 クトウーゾフ將軍 公爵ミハイル・イラリオノヴィツチ (1745-1813) アレクサンドル一世時代の元帥で、かの有名な一八一二年の役にロシア軍総司令官としてナポレオンの率いるフランス軍をボロジノに迎え撃った名将。
- \*2 パーウエル・ペトローヴィツチ パーウエル一世 (1754-1801) のいと。ピョートル三世とエカテリーナ二世の間に生れた皇子で、一七九六年帝位に即いたが、性疑い深く、政治上にも非常に過酷な点が多かった。
- \*3 プロメシユース ギリシヤ神話の神。粘土から人間を創造し、それに生命と幸福を賦与ふよせんがため天より火を盗

んだかどでコーカサスの山の岩壁に鉄鎖で縛められ、荒鷲に内蔵を啄つまれながら苦悩に堪えた英雄。

\*4 オヴィデアス ナゾン (B.C.43-A.D.17) 西暦紀元前

後に活躍したローマの詩人。初期の作にはエロチシズムのものが多かったが、後には神話的作品を多くものした。  
 \*5 プード ロシアの重量単位。一プードは四貫三百八十匁に相当する。

\*6 十二日節 クリスマスの直後二週間を指し、異教スラヴ時代の冬送りの祭りと符合する。

\*7 大齋期 クリスマス前の精進期で、十一月十五日より十二月二十五日までをいう。



## 第四章

料理店の前へさしかかると、チチコフは二つの理由から、馬車を停めるように言いつけた。第一は馬を休ませるため、第二には自分も何か少し食べて元気をつけるためであつた。実際こういつた連中の食い気と胃の腑には、作者も羨望を禁じ得ない。ペテルブルグやモスクワに住んで、明日は何を食べよう、明後日あさっての昼飯は何にしようと、始終そんなことばかり考えていながら、さてその食事に取りかかる前には、まず用心に丸薬のを服んで、それから牡蠣だの、蟹だの、その他いろんな珍味をむしやむしやらか



して、とどのつまりはカルルスバットかコーカサスへ養生に出かけるといった豪勢な紳士がたなどは、てんで物の数ではない。決してこういう紳士がたを羨ましいと思つたことはないのである。ところが、この二流どころの紳士がたに至つては、最初の宿場でハムを注文すると、次ぎの宿場では仔豚をとり、三番目の宿場でも蝶ちようざめ鮫の大切れか、それとも、葱を添えた焼腸詰ぐらいは平らげ、まだ、それでもいっつこう平気なもので、時分もかまわず食卓について、小蝶鮫の魚汁ウハに鱈か白子をそえてガツガツやらかし、口直しに魚饅頭か、鯰の肉の入つたパイを食うのだから、その健啖ひとぶりは他人ひとごとながら、まつたく以つて空そら怖おそろしくなる——  
こういつた連中は、いやもう羨ましい天てん恵けいを享受している次第

で！ 大概の上流の紳士は、こういう中流どころの紳士が持つて  
いるような胃の腑もちぬしの持主もちぬしになることが出来さえすれば、躊躇な  
く農奴や領地の半ばを犠牲きように供するだろう。それが抵当に入つて  
いようがいまいが、また外国式なりロシア式なりの改良が施され  
ていようがいまいが、そんなことは問題ではない。ところが残念  
ながら、どんなに金子かねを積もうが、またどんなに改良を施した領  
地を犠牲にしようが、この中どころの紳士が持つているような胃  
の腑くすというものは決して決して手に入りつこないものである。

黝くすんだ木造の料理店は、古風な教会の燭台みたいな恰好ろくろに輻びき挽びきにした木の柱で支えられた浅い客好きのする庇の下へチチ  
コフを招き入れた。料理店は、まあ、ロシア式の百姓小屋を少し

大形にしたようなものであった。窓のぐるりや屋根底びさしについている新らしい木で彫り物をした蛇腹が、黝くすんだ壁にくつきりと浮かんでおり、鎧扉には、花をいけた壺の絵が描いてある。

狭い木の階段を這うようにして、広いポーチへ上ると、出で会あ頭しらにギーッと扉が開いて、絞しほり染ぞめ更さら紗さの着物をきた、肥った

婆さんが顔を出すなり、『こちらへ、どうぞ！』と言った。部屋へ入ると、よくこういう街道筋すじに建っている小さな木造の料理屋では、誰でもぶつかるといふようないゝ古ふる馴染なじみが眼についた。他でもない、もう錆の出たサモワール、滑らかに鉋かんなをかけた松板の壁、急須や茶碗を入れて隅っこに置いてある三角戸棚、聖像の前に、赤や青のリボンでぶらさげてある、鍍金めつきをした瀬戸物の

卵、つい近ごろ仔を生んだばかりの猫、二つの眼を四つに映し、顔の代りに煎餅みたいなものを見せてくれる鏡、それから最後に、聖像の後ろへ束にして差しこんである香におい草と撫なでしこ子だが、こいつはすっかり干乾ひからびているので、匂いを嗅かごうとしても、嚏くしゃみが出るだけという代物である。

「仔豚はあるかね？」こう言いながらチチコフは、突つ立っている老婆の方へ顔を向けた。

「はい、ございます。」

「山葵わさびと酸乳皮スメターナをつけたのもあるかね？」

「山葵わさびと酸乳皮スメターナをつけたのもございますよ。」

「じゃ、それを出しておくれ！」

老婆はあたふたとして出て行くと、やがて皿と、まるで乾いた木の皮のようにごわごわと糊のつけてあるナプキンと、それから黄いろくなつた角の柄つのえをすげた、ペン小刀みたいに織きやしや細なナイフと、二又のフォークと、塩壺とを持って来たが、その塩壺はどうしても食卓の上に真直ぐに立たなかつた。

例によつて我々の主人公は早速老婆をつかまえて根掘り葉掘り、この料理店は自分でやっているのか、それとも主人があるのか、またこの料理店からはどのくらい利潤があがるか、息子はあるのか、総領はまだ独身か、それとも嫁を貰つたのか、どんな嫁が来たか、持参じさんきん金はたっぷり持って来たか、持って来なかつたか、嫁の父親は満足しているのか、それとも結納が少なくて怒つてや

しないのか、などと訊き糺ただした。一口に言えば、何ひとつ訊き漏らさなかつたのである。勿論、この界限にどんな地主があるかということを訊ねたのはいうまでもない。その結果、この辺には、ブロヒン、ポチターエフ、ムイリノイ、チエルパコフ大佐、ソバケーヴィツチなどという地主のあることを聞き出した。『へえ！

ソバケーヴィツチを知ってるのかね？』そう彼は訊ねたが、すぐに老婆から、ソバケーヴィツチだけじゃない、マニーロフも知っていると聞かされた。そして老婆はマニーロフの方がソバケーヴィツチよりぐつと上品な人だと言った。マニーロフはやって来るなり牝と鶏を煮てくれと言いつけ、犢の肉はないかと訊く、羊の肝臓があれば早速それも注文するが、どれにもちよつと手をつけ

るだけだ。ところがソバケーヴィツチときたら、何か一品より注文しない癖に、それをきれいに平らげて、まだその上におまけをよこせと言うのだそうだ。

彼がこんな風にお喋りをしながら、仔豚をむしゃむしゃぱくついていると、もうそれが一口でおしまいになるといふ時分に、ふと、こちらへやって来る馬車の音が耳についた。窓から覗いてみると、なかなか立派な三頭立の馬をつけた軽快な半蓋馬車ブリーチカが一台この料理店の前に停ったところであつた。馬車からは二人の男が降りた。一人は薄色髪うすいろかみの背の高い男で、もう一人は、それより少し背が低くて髪が黒かつた。薄色髪の方は、濃紺濃紺のハンガリー服ハンガリーを著きており、髪かみの黒い方は、あたりまえの縞しまの韃だ鞆たん外套だつたんを羽織

っていた。遠くから、もう一台、四頭の毛の長い馬に曳かれた空  
の軽馬車がガタゴトやって来たが、馬の頸圈くびわはぼろぼろで、馬具  
は荒縄だった。薄色髪の男はさっさと階段を駆けあがって来たが、  
黒毛の男はまだ後に残って、何か半蓋馬車ブリーチカの中を掻き探しながら、  
下男と話しあったり、同時に後から来た馬車に向って手を振った  
りしている。チチコフにはその声にどうやら聞き覚えがあるよう  
に思った。彼が男の方をじろじろ眺めている間に、薄色髪の男は  
早くも手さぐりで扉をあけて入って来た。それは背の高い、顔の  
げっそりした、謂ゆるいわすいっからしという型の男で、茶いろの口  
髭を立てていた。焼け焦げたような顔色から推してこの男が、焰え  
硝んしょうのけむりはともかく、煙草のけむりには相当お馴染になつ



ていることが窺うかがわれた。彼はチチコフに向つて丁寧にお辞儀をした。で、チチコフも同じように会釈をかえした。こうして切掛きっかけが出来て、二人は殆んど同時に、いい塩梅に昨日の雨ですつかり街道の埃もおさまり、今日は馬車を駆かるにも涼しくて気持がよろしいなどと喋りだしたので、間もなく、大いに話しこんでお互いに近づきになるところであつたが、そこへ髪の毛の黒い連れの男が入つて来て、縁カルツーズ無帽を脱いでテーブルの上へ投げだすなり、黒い濃い髪の毛をがむしやらに搔きたてた。それは骨組ほねぐみのがつしりした中背の好漢で、頬は丸々として血色がよく、齒が雪のように白くて、漆のように真黒な頬髯を生やしていた。この男はいかにも生氣澆刺せいきはつらつとして、健康そのものが面めんじょう上に躍動している観

があつた。

「よう、よう、こりやどうだい！」と、彼はチチコフの姿を見ると、いきなり両手をひろげて喚きたてた。「不思議なところで逢うじゃないか？」

チチコフは、それが検事の家で午餐ごさんを共にした、あのノズドリヨフだと気がついた。あの時も、ほんの二三分で馬鹿に馴々しくなつて、別段こちらから水を向けたわけでもないのに、すぐ

君、僕　でやりだした男である。

「何処へ来たんだね？」と言いながら、その返事も待たずに、ノズドリヨフはこうつづけた。「僕はね、君、定期市いちへ行つて来たのさ。いやはや、すつからかに負けて来たよ！　まったくの

話が、生まれてこの方、こんなにきれいに剥むかれたのは、初めてのことだねえ。しようがないから、百姓馬をつけて、戻って来たつてえていたらしく為て体らさ！ そら、ちよつと窓から見てくれよ！」そう言つて彼は、いきなりチチコフの頭をぐつと手で押えつけたものだから、チチコフはもう少しで窓枠に額をぶつつけるところだった。「ちえつ、なんちゆう駄馬だろう！ あん畜生どもつたら、ここまで来るのがえんやらやつとなんだよ。だから、仕方がないから、そら、この男の半蓋馬車ブリーチカへ乗りかえて、やつて来たのさ。」  
「そういうながら、ノズドウリヨフは連れの男を指さした。「あ、君たちはまだ知合いじゃなかったのだね？ 僕の妹婿で、ミジユ―エフつてんだよ！ 僕たちは今日も朝から君の噂ばかりして

たのさ。『なあおい、今にきつとチチコフに逢うぜ』ってね。だが兄弟、おれがどんなに洗いざらいすつちまつたか、君が知ってくれたらなあ！ まったくの話が、だくうま馬を四頭とも投げだしたばかりじゃない——何もかもすつちまつたんだぜ。ね、時計も鎖も持っていないだろ……。」「チチコフがちらと眺めると、なるほどのこの男は時計も鎖もつけていない。そればかりか、相手の片方の頬鬚が、片方のより小さく疎らになつていようようにさえ思われた。「だが懐中ほっほに、せめてもう二十ルーブリあつたらなあ、」と、ノズドウリヨフは語を継いだ。「それより余計なくたつて、二十ルーブリで沢山だ。そうすれば、何もかも取り返して見せたんだがなあ。つまりさ、取り返した上に、正直なところ、今頃はきつ

と、三万ルーブリぐらいはこの紙かみいれ入へねじこんでいたんだがなあ。  
あ。」

「だって、お前、あん時もそんなこと言つてたぜ。」と、薄色髪  
の男がそれに答えて、「でおれが五十ルーブリ貸してやったら、  
直ぐにまた奪とられちまつたじゃないか。」

「奪とられる筈がなかつたんだよ！ 断じて、奪られる筈はなかつ  
たんだ！ おれがあんな失策へまさえやらなかつたら、まつたく、奪と  
られる筈はなかつたんだがなあ。あんなパロレーの後で忌々しい  
七で鴨なぞ狙わなかつたら、おれは場銭を残らず搔つさらつちま  
つたんだぜ。」

「ところが、搔つさらつちまわなかつたじゃないか。」と、薄色

髪の男が言った。

「それあ、あんな拙い時に、鴨など狙ったから、搔つさらえなかつたのさ。だがお前、あの少佐を、相当な打手うちてだとも思つてるのかい？」

「相当な打手が打手でないかは知らないが、とにかくお前はあいつに負かされたのだからなあ。」

「なあにを、つまんねえ！」と、ノズドウリヨフが言った。「あんなの、大丈夫おれは負かして見せるよ。なあに、あん畜生に一度ドウブレットをやらせて見るがいいや、そうすれあ、彼奴がどんな打手かちやんと見抜いてやらあな！ だがね、チチコフ、初めの二三日はとても面白く遊んだぜ！ まったく素敵滅法も無い

定期市いちだったからなあ。商人あきんどたちからして、こんなに沢山人の  
出たことはねえって呆れていたよ。おれの村から持って行つたも  
のが、何もかも飛びきりの上値で売れちまつてさ。いや、どん  
なに景気よく騒いだと思う！ほんとに、いま思い出しても……  
くそっ！ まったく、君のいかなかったのが残念だよ！ まあ、思  
つても見たまえ、町から三露里ばかりのところりゆうきへいに龍騎兵の連隊  
が駐屯ちゆうとんしていたのさ。だもんだから、君、ありつたけの将校  
という将校が、そいつらだけでも四十人からいたんだが、それが  
みんな町へ乗りこんで来たんだ……。おれたちが、君、どんなに  
景気よく飲みだしたと思う……。騎兵二等大尉のポツエル―エフ  
つて……素晴らしい奴でね！ 君、立派な髭を生やしてやがって

さ！ ボルドーのことを濁酒どぶろくって言やがるんだ。『こら、濁どぶろく酒くを持ってこい！』とこうだ。それからクヴシンニコフって中尉だがね……。こいつが君、とても面白い奴なんだ！ まず、どちらから見ても遊蕩児ゆうとうじだといえるねえ。おれたちは始終こいつと一緒にだつたんだ。ところで、ポノマレフの奴がどんな酒を飲ませたと思う！ だが奴は曲くせもの者で、あん畜生の店では何ひとつ買えたもんじやないってことを心得てなきや駄目だよ。酒ん中へいろんな混ぜものをしやがるんだ、白びやくだん檀だんだの、焼いたコルクだのをいれたり、接骨木にわとこの実で色つけまでしやがるんだからさ。だが、その代り彼奴が、特別室と呼んでいる奥の部屋から何か罎いを持ち出して来たら、それこそ君、極楽浄土へ行つたような気持ちに



なれるよ。おれたちの飲んだシャンパンといたら、まったく：  
：あれに較べたら、知事んとこのなんざあ何だい？　まるでただ  
のクワスじゃないか。まあ思っても見たまえ、クリコーというだ  
けじゃなく、クリコー・マトウラドウーラってやつさ、つまり二  
倍の強さのクリコーって訳わけさ。それから、ボンボンっていうフラ  
ンスの葡萄酒も一本のんだっけ。匂いかい？——こいつは薔薇み  
たいな匂いもしたし、いろんな、望みどおりの匂いもするんだよ。  
いやとにかく、えらい騒さわぎさ！……何でも、おれたちの後へどこ  
かの公爵とかがやって来てさ、シャンパンを持って来いって、店  
へ使いをよこしたそうだがね、お生あいにく憎と、町じゅうどこを探し  
ても一本もないって始末さ。みんな将校連が飲じまったんだよ。

まったくの話が、食事めしの間におれ一人でもシャンパンを十七本から平らげたんだからね！」

「なにを、お前、十七本なんて飲みやしないよ。」と、傍から薄色髪の男が注意した。

「いや、おれは誓って、それだけ飲んだと断言するよ。」と、ノズドウリヨフが言い返した。

「何とでも勝手に断言するがいいけれど、おれはお前が十本も飲みやあしないうだけさ。」

「じゃあ、おれが飲むか飲まないか、賭をしようか？」

「何のために賭などするんだい？」

「さあ、お前が町で買って来た鉄砲を賭けろよ。」

「嫌だよ。」

「まあ、試しに賭けてみるよ！」

「試しにだつて、嫌だよ。」

「そうだろうて、また帽子を失くしたように、鉄砲も失くしてしまふところだからな。まったく、チチコフ、君のいかなかったことが、返すがえすも残念だよ！ 君は屹度きつと、あのクヴシンニコフ中尉とは別れられなかつたよ。奴さんと君がさぞ肝胆相照らしただろうになあ！ あいつは例の検事だの、市まちにいる、一カペーカの錢にもびくびくしてるような、県のしみつたれ役人とは、てんで柄からが違うよ。あいつは君、ガリビツクでござれ、銀行バンクでござれ、そのほか何でもお好み次第なんだぜ。まったく、チチコフ、何だ

つて君は来なかつたんだい？ 来ればよかつたのに、ほんとにしようのない野郎だぜ、君は！ さあ、おれを接吻してくれ、おれは死ぬほど君が好きなのさ！ どうだいミジューエフ、これこそ運命の引き合わせつてもものさ！ この野郎とおれとは縁もゆかりもない仲だろ？ 第一どこからやって来た男とも分りやしないし、おれはおれでこんなところに住んでいるしさ……。だが何にしても、兄弟、あすこにやあ、実にどえらく馬車がいたもんさ、まったく engros 《エングロス》（夥しい数）だつたぜ。おれは玉ころがしをやつて、ポマードを二罫と、瀬戸物の茶碗と、ギターをとつたよ。ところがそれをもう一度賭けたら、畜生め、今度はみんな取られて、その上に六ルーブリもふんだくられちまつた。だが

ね、クヴシンニコフって奴がどんな女たらしだか、君が知ったものなら！ おれは奴と一緒に、舞踏会という舞踏会へ一つ残らず行つたんだよ。ところが、一人おそろしくでかでかと著<sup>き</sup>飾つた女がいて、レースや紗の裾飾りや、いろんなものを滅多矢鱈につけてやあがるのさ……。おれは、『糞くらえ！』と思つたね。ところがクヴシンニコフの奴は、ああいう恥知らずだから、その女の傍へ擦<sup>す</sup>りよりやあがつて、フランス語なんかでジャラジャラおべつかを使やがるんだ……。ほんとに、彼奴ときたら、どんなつまらない女<sup>あま</sup>でも、見のがしつこないんだからなあ。彼奴はそれを、<sup>のいちご</sup>野苺を摘む のだつて言つてやがるのだぜ。それから、素晴らしい魚や、蝶鮫の乾魚<sup>ひもの</sup>をさらに売つていたつ。おれは蝶鮫の乾

物を一つ買って来たがね、まだ金のあるうちに気がついて、いいことをしたよ。時に、君はこれから何処へ行くんだい？」

「或る人のところへね。」とチチコフが答えた。

「ふん、何だい或る人なんて？ すつぽかしちまえよ！ 一緒におれんちへ行こうや！」

「いや、そうはいきませんよ。用事があるんでね。」

「ふん、用事があるとおいでなすつたね！ いい加減なことをいうない！ この\*1オポデリドック・イワーノヴィツチめ！」

「まったく、用事があるんですよ、それも重大な用事です。」

「賭をしてもいいが、それや嘘だ！ じゃあ、言ってみろよ、いったい誰んどこへ行くのか？」

「言いますとも、ソバケーヴィツチのところへ行くんで。」

それを聞くとノズドウリヨフはからからと笑いだしたが、それは元氣澆刺たる健康人に特有な笑い方で、そういう手合いは砂糖のように真白な歯を残らず剥むきだして、頬をやけに波打たせながら、恐ろしく大声をあげて笑うものだから、中ふたつ戸を距へだてた三番目の部屋に寝ていた男が夢を破られ、がばと跳ね起きざま、眼を見張つて、『ちえつ、どうかしたのかな!』と口走るほどである。

「何がそんなに可笑しいんです?」とチチコフは、そんな笑い方をされたので聊いささか氣色を損じて、言った。

だがノズドウリヨフは、『おい、助けてくれ! まったく、お

ら、腹の皮が破れそうだよ！』と言いながら、大口をあけて笑いつづけた。

「何も可笑しいことなんかありませんよ。僕はあの人と約束をしたんだから。」とチチコフが言った。

「だって君、あんな奴のところへ行つたつて、ちつとも面白いことなんて、ありやあしないぜ。あれあ吝しわん坊にすぎないんだ！

おれは君の性質をよく知ってるがね、彼奴の家へ行つて、銀行の

一番もやつたり、ボンボンの一本にでもありつけようと思つたら、

それこそ飛んでもない間違いだよ。ねえ君、だからソバケーヴィ

ツチなんかすつぽかしちまつてさ！ おれんちへ行こうよ！ 素す

的な蝶鮫てきの乾物を御馳走するぜ。ポノマレフの畜生めが、いやに



ペコペコお辞儀をしやがって『あんただけにですよ。市<sup>いち</sup>じゆう探  
したつて、とてもこんなのは見つかりつこありませんぜ』つてぬ  
かしやあがるのさ。だが、あいつは途<sup>とてつ</sup>轍もないペテン師だからな  
あ。おれは彼奴の眼の前でそう言つてやつたよ。『貴様と、あの  
徴税代弁人とは、天下一の大悪党だ！』つてね。そうすると、あ  
の悪<sup>わるもの</sup>漢め、顎鬚をなでてニヤニヤしてやがるんだ。おれはクヴ  
シンニコフと一緒に、毎日あいつの店で朝飯を食つたもんさ。あ  
つ、そうそう、君に話すことを忘れていたがね、こいつは屹<sup>きつと</sup>度、  
君も咽喉から手が出るにきまつてるんだが、一万ルーブリだすと  
言つたつて手放さないから、前もつて断わつておくよ。えい、ポ  
ルフィーリイ！」と、彼は窓際へ近よつて自分の従僕を大声で呼

びたてた。その従僕は片手にナイフを持ち、片手には麵麩パンの皮と、  
どうやら半蓋馬車ブリッチカの中から何かを取り出す序ついでで、まんまと切り  
取ったらしい蝶鮫の乾物を一切れ持っていた。「えい、ポルフィ  
ーリイ！」と、ノズドウリヨフは呶鳴った。「仔犬をつれて来い  
！ 君、素晴らしい仔犬だぜ！」そう言いながら、彼はチチコフ  
の方へ向き直って、「こつそり失敬して来たのさ、持主の野郎め  
が、命にかけても手放そうとしやがらねえものだからね。おれは  
そいつに薄栗毛の牝馬めすをやるからと言ったんだよ。そら、知って  
るだろ、あのフウオストウイリヨフのところ取り換えた馬さ：  
…。」だがチチコフは、そんな薄栗毛の牝馬にも、フウオストウ  
イリヨフとかにも、生まれてこの方かたついでお目にかかったことが

なかつた。

「旦那さま！ 何にも召しあがらないのでございますか？」とこの時、老婆がノズドウリヨフの傍へ近よりながら、訊ねた。

「何にも要らない。いや君、まったく景気よく遊んだよ！ だが、ウオツカを一杯もらおうか。どんなのがあるんだい？」

「茴香酒アニーソフヤがございますよ。」と老婆が答えた。

「じゃ、その茴香酒アニーソフヤをくれい。」とノズドウリヨフが言った。

「うん、序ついででおれにも一杯くれ！」と、薄色髪カナリヤの男が言った。

「芝居へ行つてみたらね、一人の女優が、畜生め、まるで金糸雀カナリヤみたいに唄つてやがるのさ！ クウシンニコフの奴はおれの傍に坐つていやがつたがね、『どうだい、君、あの野苺も摘んでやろ

うか！』なんてぬかしやがるんだ。見世物小屋だけでも五十ぐら  
いはあつたと思うなあ。フエナルデーっていう奴は、風車みた  
いに四時間もとんぼがえり 翻筋斗をやつてやがるんだ。」ここで彼は、老婆  
の手から酒杯さかずきを受け取つたが、婆さんはそれに対してうやうや 恭しくお  
辞儀をした。「ああ、ここへ連れて来い！」と、ポルフィーリイ  
が仔犬を抱いて入つて来たのを見て、彼は叫んだ。ポルフィーリ  
イは主人と同じように綿入の韃鞃服きを著ていたが、それは余計に  
垢じみていた。

「さあ、こちらへ貸せ、この床の上へ置くんだ！」

ポルフィーリイが仔犬を床の上へおろすと、そいつは四肢ししをふ  
んばつて地面したを嗅ぎまわした。

「いい仔犬だろ！」とノズドウリヨフは、そいつの背中をつまんで差しあげながら言った。仔犬はひどく哀れっぽい鳴き声をたてた。

「だが貴様は、おれの言いつけたとおりにしなかつたな。」とノズドウリヨフは、注意ぶかく仔犬の腹を調べながら、ポルフィーリイに向つて言った。「こいつにブラツシをかけてやらなかつたろう？」

「いえ、かけてやりましたとも。」

「じゃあ、どうして蚤のみがいるんだい？」

「さあね。おおかた馬車からでもうつったんでがしよう。」

「嘘をつけ、ブラツシなんかかけてやろうともしなかつたんだろ

う。馬鹿野郎、まだおまけに自分のをうつしたんだな。さあ見てくれ給え、チチコフ、どうだい、いい耳だろう、なあ、ちよつと手で触つて見給え。」

「どうして？ このままでもよく分りますよ、なかなかいい血統たねですなえ！」と、チチコフが答えた。

「いや、そう言わないで、ちよつと持つて見給え、この耳に触つてみるんだよ！」

チチコフは是非なく、相手の気がすむように、ちよつと耳に触つて見てから、『なるほど、これは好い犬になりますよ。』と言つた。

「それに、鼻がとても冷たいんだぜ。さあ、手で持つて見給えな

」。

そこでチチコフは相手の機嫌を損じたくないばかりに、ちよつと鼻に触つて見て、『なかなか好い嗅覚かかんですよ。』と言つた。

「純粹のブルドックだよ。」と、ノズドウリヨフは語を継いで、  
「おれは実のところ、ずいぶん前から、こういうブルドックを鶺鴒の目鷹の目で探していたんだよ。さあポルフィーリイ、あつちへ連れて行け！」

ポルフィーリイは仔犬の腹の下へ手をまわして抱きあげると、馬車の中へ持ち去つた。

「ねえ、チチコフ、君はどうしてもこれから、僕の家へやって来なくちやいけないぜ。なあに、たつた五露里しきやないんだから、

一息で駈けつけられるよ。それからソバケーヴィツチのところへ行つたつていいじゃないか。」

さあ、どうしたものかな？ とチチコフは肚の中で考えた。

一つ、ノズドウリヨフのところへ行つてやるかな。別に他の連中より悪い訳もないで、同じような並の人間で、おまけに骨牌カルタですつからかんになるような男だ。どうも見たところ、どんなことでもやりかねない人間らしい。だから、まんがよければ、先生、無償ただでも譲つてよすかもしれないぞ。そこで彼は、「じゃあお邪魔しましょう。」と言つて、「しかし、あんまり引き留めないで下さいよ。時日ときがありませんからね。」

「よう、大将、そう来なくつちやならないや！ 素敵々々！ ち



よつと待ちなよ！ 褒美に一つ接吻をしてやるから。」そこでノズドウリヨフとチチコフは互いに接吻した。「こりや面白くなつて来たぞ。さあ三人でぶつ飛ばそうや！」

「いや、僕はここで御免蒙るよ。」と薄色髪の男が言った。「家へ帰らなくちやならないから。」

「馬鹿な、そんなこと言つたつて、放しやしないぞ。」

「だつて、きつと女房が怒るからさ。君はもう、この人の馬車に乗つけて行つて貰えばいいじゃないか。」

「駄目、駄目、駄目！ そんな馬鹿なこと考えるない。」

この薄色髪の男は、その性質に一見片意地らしいところのある人間の一人であつた。こういう連中は、相手がまだ口を開かぬう

ちから、もう議論を始めようとしており、自分の考え方と明らかに矛盾しているような事柄ことがらには決して賛成することが出来ず、馬鹿を利口と言ったり、とりわけ他人の笛におどらされるなどということには、断じて承服できないらしい。ところが、いつもしまいには自分の弱味で、初め反対したことにも賛成し、馬鹿を利口と言い、果ては他人の笛につれて、この上もなく上手におどりだす——要するに、龍頭蛇尾におわるのである。

「馬鹿をいうな！」とノズドウリヨフは、何か薄色髪の男がぐずぐず言いだしたのに一喝を喰らわせて、さつさと縁無帽を彼にかぶせてしまったので、薄色髪の男はしようことなしに、二人の後について立ちあがった。

「旦那さま、あの、ウオツカのお代をまだ頂きませんが……。」  
と老婆が言った。

「ああ、よし、よし、婆さん。おい、義兄弟きょうだい！ 濟まないが払  
つておいてくれ。おれの懐ろには一文もないんだから。」

「いくらだね？」と妹婿が訊ねた。

「ええ、なんの、旦那さま、みんなで二十カペーカでございます  
よ。」と老婆が答えた。

「嘘をつけ。その半分もやつときや、沢山だよ。」

「それじゃあ少のうございますよ、旦那さま。」と老婆は言った  
が、それでも有難そうに錢を受け取ると、大急ぎで扉を開けに駆  
けよった。彼女はウオツカの値段の四倍も吹っかけたのだから、

少しも損はしなかつたのだ。

一行は馬車に乗りこんだ。チチコフの半蓋馬車は、ノズドウリ  
ヨフと妹婿が乗った半蓋馬車ブリーチカと並んで駈けて行つたから、途々みちみち  
ずっと彼等三人は自由に談話を交わすことが出来た。その後ろか  
らは、瘦せた百姓馬に曳かれたノズドウリヨフの小振りな軽馬車  
が、ともすれば遅れがちに、ついて行つた。それにはポルフィー  
リイが、仔犬と一緒に乗っていた。

一行が途々とり交わした会話は、読者にとっては余り面白くも  
なさそうだから、いつそ、ここでノズドウリヨフの一身上につい  
て若干お話しておこうと思う。というのは、この男は、おそらく  
この叙事詩に於いて、決して端役はやくしかつとめない人物ではなさそ

うだからである。

恐らくノズドウリヨフの人物については、読者はもう幾分お馴染のことであろう。こうした人物には誰でもよく打つかるものである。こういう連中は、手のつけられない奴と呼ばれて、まだ子供のころや、学校へ行っている時分から、餓鬼大将として名は通っているが、それだけにまた、ずいぶんこつぴどい目にも逢わされているのだ。その顔には常に真率しんそつで腹蔵のない、豪胆なところが現われている。誰とでもすぐ懇意になつて、相手がまだけろつとする暇もない中うちに、もう『君、僕』で話しだす。永久の友誼ゆうぎが続きそうदैいて、そのくせ、親交を結んだ相手と、その晩近づきになつた記念の酒席で大抵いつも喧嘩をやらかしてしまふのが

落ちだ。たいがい彼等は饒舌家おしやべりで、道楽者で、勇み肌で、堂々たる恰幅をしている。ノズドウリヨフは三十五歳にもなつていながら、まるで十九か二十の青年と変りがなく、至つて遊蕩あそびずきであつた。結婚してからも彼は少しも変らなかつた。その細君が間もなく二人の子供を残して他界してしまつたので尚更であるが、子供に至つては全く彼には無用の長物であつた。だが、その子供のことは、渋皮しぶかわの剥むけた保姆が面倒を見ていた。彼は家に一日以上じつとしていることがどうしても出来なかつた。鋭敏な鼻で、数十露里も離れたところに定期市が立つて、いろんな集まりや舞踏会のあることを嗅ぎつけると瞬く暇に彼はもう其処そこへ駆けつけて、骨牌台カルタの前で早くも議論をおつ始めたり、大騒動を演じたり

しているのだった。それというのも、こういった連中にはありが  
ちのことで、彼は骨牌カルタが三度の食事より好きだからである。既に  
第一章に於いて我々が一瞥したように、彼は骨牌カルタをする段になる  
と、いろんな札の抜き換えや、あらゆるいんちきを心得ていて、  
どうもまともな勝負をやらなかつたので、大抵の場合、しまいに  
は勝負が別な立廻りに變つてしまい、長靴でぶん殴られたり、房ふ  
々とした実に見事な頬髯さくさを撈り取られたりするのだ。それで時  
々彼は、頬髯を片方だけにされて、それもひどく疎らにして家へ  
帰ることがある。しかし健康で丸々と張りきつた彼の頬は、よほ  
ど巧く出来ていて、旺おうせい盛せいな繁殖力を包蔵ほうぞうしていると見え、髯  
は間もなく新らしく伸びて、剩あまつさえ前より立派になる位だ。その

うえ何より奇態なことに、これはひとりロシアだけにしか見られない現象であろうが、暫くして、自分を袋叩きにした仲間と落ち合うと、まるで何事もなかったような顔で対応して、謂わば、こちらも先<sup>せんぼう</sup>方も何らの蟠<sup>わだか</sup>まりを持っていないのである。

ノズドウリヨフは或る意味に於いて事件屋であつた。彼が顔を出したかぎり、どんな会合でも無事におさまつた例しがない。何かしら必らず事件を持ちあげて、或は憲兵に腕<sup>やく</sup>を扼して大広間からしよびき出されるか、さもなければ、自分の友達に否<sup>つま</sup>応なしに撮み出されるのがお定まりなのである。よし、そんなことのない場合でも、尚<sup>なおかつ</sup>且、彼以外の者には及びもつかぬような醜態を演じて、食堂でただもう人の物笑いになるような酔っぱらい方をし



たり、またあられもないことを口からすべらかして、しまいには自分でも恥かしくなってしまうのである。そして全然なんの必要もないのに、飛んでもない嘘をつき、藪から棒に、自分のところには青い馬がいるの、薔薇色の馬がいるのといった風な出鱈目を並べだすものだから、聞いている方でも、しまいには『おや、大将、また駄だ法螺ぼらを吹きはじめたな』と呟やいて、さっそく退散してしまふ。よく、まるでなんの理由もないのに身辺の者を傷つけるといふ、けちな料りょうけん簡かんの人間があるものだ。例えば立派な官等を持ち、外見もなかなか上品で、胸には星勲章をつけているような人物でありながら、初め諸君の手を握つて、いかにも深遠な沈黙考に誘うような題目について語っているかと思つと、たちま忽ち

面と向つて諸君を罵倒ばとうするのだ。それも、胸に星勲章をつけて、今の今まで沈思黙考に誘うような深遠な題目について語つていた人とはまるで似ても似つかぬ、せいぜい十四等官風情のやり口なので、ただただ呆れて、肩をすくめながら突つ立っているより他はない始末だ。ノズドウリヨフもそういう奇妙な料簡の持主であつた。誰か特に彼と親しくなる者があると、真ま先つきに彼はその男に恥をかかせる。つまりそれ以上の馬鹿げたことは考え出すことも出来ないような嘘八百を撒きちらして、婚礼に水をさしたり、商取引をぶちこわしたりするのだ。しかも決して自分では諸君に悪いことをしているとは考えないのだ。それどころか、再び諸君と落ち合うようなことがあると、またしても彼はさも親しげに振

舞つて、ぬけぬけと、『君はちつとも僕のところへやつて来ないで、ひどいじゃないか。』などと言うのだ。またノズドウリヨフはいろんな点で実に多方面な、つまり口も八丁手も八丁という人間である。彼はもう忽ち<sup>たちま</sup>諸君に向つて、どここなしに、世界の涯へでも一緒に行こうとすすめたり、どんな計画でも好きな計画に乗ると言つたり、また何でも手あたり次第に、諸君の望みの物と交換しようと申し込んだりする。鉄砲でござれ、犬や馬でござれ、何でもみな交換の対象となるが、しかしこれは別に欲得ずくでしようというわけではなく、ただ一途に<sup>いちず</sup>罷<sup>や</sup>み難<sup>がた</sup>い彼の性分のせかせかした落着きのなさがさせる業である。もし定期市でいい鴨でもひっかけて、しこたま儲けるようなことがあると、彼は前か

らそこいら中の店で眼をつけておいた品物を矢鱈無性に買いこんだものだ——馬の頸圈くびわ、香錠、保姆にやるハンカチ、種馬ほしぶ、乾ほしぶ葡萄酒どう、銀製の洗面器、オランダ織の麻布、上等の小麦粉、煙草、ピストル、鰯にしん、絵、研磨機、壺、長靴、陶製食器といったものを、ありがね有金はたいて買い集めるのだ。ところが、それを無事に家へ持つて帰ることは稀れで、大概はその日の中に、すっかりそれを運カルタの好い骨牌仲間に捲きあげられてしまえばかりか、時には、まだその上、おまけに自分の煙管パイプを、煙草入や吸すいくち口とごと奪られることもあり、罷り間違まかえば、四頭立の馬に一切の附属品——つまり軽馬車から馭者までつけて献上してしまふこともある。そんな時、当の御本人は、つんつるてんのフロックか韃鞅服にくるまって、

誰か自分を馬車に乗つけて行つてくれる友達はないかと、うろろ探しに出かけるのである。さて、ノズドウリヨフとはこんな男であつた！ 若<sup>も</sup>しかすると、それはもう過去の一性格で、もはや現代にはノズドウリヨフ的な人間は存在しないと言う人があるかも知れない。噫！ そんな説をなす人たちこそ間違っている。ノズドウリヨフは、まだまだこれから先きも永くこの娑婆から姿を消しはしないのだ。彼は到るところ我々のあいだにいたのであるが、恐らくは、ただ別な衣裳をつけているのに過ぎない。しかも皮相浅薄な人々の眼には、衣裳さえ變つておれば全然別な人間に見えるのである。

さて、この間に三台の馬車はもうノズドウリヨフ家のポーチの

前へ横づけになった。家の中には一行を迎える準備は何ひとつ出来ていなかった。食堂の真中には木の踏台が立ててあつて、それに二人の百姓が乗つかつて、何かまるで果てしもない歌を口ずさみながら、壁を白く塗っており、床には一面に白ペンキが飛び散つていた。ノズドウリヨフはさつそく百姓に踏台を片づけさせて次ぎの間へ駈けこむなり、何か指図をしていた。二人のお客は、彼が料理番に食事の支度を言いつけている声を聞いた。もうそろそろ空腹を感じていたチチコフは、この模様では、とても五時より前には食卓につけそうにないと悟つた。ノズドウリヨフは戻つて来るなり、自分の村の様子を残らず紹介するからと言つて、お客を引っぱり出したが、二時間と少しかかつて、もうそれ以上は

何ひとつ見せる物がないというくらいに、すっかり何もかも見せてしまった。まず第一に彼等は厩うまやを見に行つた。そこには二頭の牝馬まがいて、一方は斑ぶちのある灰色あおで、一方のは鹿毛であつた。それから栗毛の種馬が一頭いた。これは見たところ余り立派な馬ではなかつたが、ノズドウリヨフはそれに一万ルーブリ出したと言いはつた。

「一万ルーブリなんて出ちやいないさ。」と、妹婿が聞き咎めた。「こんなもの千ルーブリもしやしないや。」  
「誓つて、一万ルーブリ出したよ。」と、ノズドウリヨフが言つた。

「それあ、幾らとでも勝手に誓うがいいさ。」と、妹婿が応酬し

た。

「よし、じゃあ賭をしようか？」とノズドウリヨフが言った。

妹婿も、さすがに賭まではしなかった。

それからノズドウリヨフは、やはり以前には素晴らしい馬が入れてあったという、空の厩からを見せた。今そこには山羊が一匹いたが、この山羊というやつは、昔からの迷信で、ぜひ馬と一緒に飼つておかねばならないものとされており、それにどうもこいつは馬と仲が好いらしく、まるで自分の家にもいるように、平気で馬の腹の下をくぐつて歩いているものだ。ノズドウリヨフは客を案内して、鎖につないである狼の仔を見せに行つた。『そら、これが狼の仔さ！』と彼は言った。『僕は、わざわざ生の肉でこい



つを育ててるんだよ。野生のとおんなじ奴に仕立てあげようと思つてね。』それから今度は池を見に行つたが、ノズドウリヨフの言葉によると、前にその池には、とても大きな魚がいて、そいつを曳きあげるのに、大の男が二人がかりでやつとだつたとのこと。しかしその話にも妹婿は疑いをさし挟むことを忘れなかつた。

『チチコフ、君にひとつ素敵もない犬の番つがいを見せようか。』と、ノズドウリヨフが言つた。『筋肉にくの固く引き緊しまつてることといつたら、まったく吃驚びっくりするくらいで、鼻面が——針のように尖つてるのだよ!』そう言つて二人を、非常に瀟洒しょうしゃな小さい小舎こやへと案内したが、それは四方に垣根をめぐらした、広い庭の真中に建つていた。庭へ入ると、そこにはあらゆる種類の犬がいた――

—ロシア種のボルゾイもおれば、純原種のボルゾイもおり、また毛色からいっても多種多様で、鳶いろのや、黒に茶の斑ふのあるのや、白黒の斑のや、鳶いろに斑ふの入ったのや、赤に斑ふの入ったのや、耳の黒いのや、耳の白いのもいた……。それには又あらゆる呼号、あらゆる命令が名前としてつけてあった——『射うて』だの、<sup>ののし</sup>『罵れ』だの、『飛びまわれ』だの、『火事』だの、『薙なぎたおせ』だの、『書きなぐれ』だの、『焼け』だの、『焦こがせ』だの、『北風』だの、『愛うい奴』だの、『褒美』だの、『見張り』だのと……。この犬どもにとつてノズドウリヨフは、さながら一家の慈父そのままであった。<sup>たちま</sup>忽ちどれもこれもこれが、<sup>いわゆる</sup>所謂『犬の舵』と呼ばれる尻尾を高々とあげて、<sup>まっしぐら</sup>驀地に駈けよつて、お客を迎え

ると、一同に向つて挨拶をしはじめたものである。その中の十匹ばかりがノズドウリヨフの肩へ前肢をかけた。『罵れ』はチチコフにまで同じような親愛の情を示して、後肢で立ちあがりざま、彼の唇をペロリと舐めたので、チチコフは慌あわててペツと唾を吐いた。吃びっくり驚するほど筋肉にくの引き緊つた犬というのも見たが、なかなか良い犬であつた。それから一行はクリミヤ産の牝犬を見に行つた。ノズドウリヨフの話では、それはもう盲らになつていて、間もなく斃くたばるに違ちがひないけれど、二三年前までは実に素晴らしめい牝犬めすだつたとのこと。その牝犬は、検分したところ成るほど眼が見えなくなつていた。その次ぎには水車場を見に行つたが、水車の軸についてぐるぐる廻転する、例の、ロシアの百姓たちの奇

妙な表現に従えば、矢鱈に跳ねまわっている。あの上白を支える棒が無かった。『まだ、すぐそこに鍛冶場もあるんだよ』と、ノズドウリヨフが言った。なるほど少し行くと鍛冶場があったので、一同はその鍛冶場も見物した。

「そら、この原っぱにはね、」と、ノズドウリヨフは野原を指さしながら、言った。「野兔が、まるで地面も見えないほど、わんさといやあがるんだぜ。いつか僕は一匹、後肢を掴んで手どりにしたことがあつたつけ。」

「ふん、お前、野兔を手どりになんて出来るもんかい。」と、妹婿が聞き咎めた。

「ところが捕つかまえたのさ。ちゃんと捕まえたんだからね！」とノ

ズドウリヨフが答えた。「さあ今度は一つ、」と彼は、チチコフに向つて言葉をつづけた。「僕の地所のはずれになつていろへ案内しよう。」

ノズドウリヨフは、到るところに丘陵が散在している野原をおつて客人を案内して行つた。客は荒田こうでんと近ごろ犁すきを入れた畝との間を、拾うようにして進まなければならなかつた。チチコフはそろそろ疲れを覚えはじめた。ともすれば足の下からじくじくと水の浸み出すような箇所ところが多かつた。それほど土地が低かつた訳である。初めのうち、彼等は大事をとつて、そういうところは用心深く跨いで通るようにしたが、後にはそんなことをしても何にもならないことが分つたので、もう泥ぬかるみ濘ぬかるみの大小などはお構い

なしに、さつさと真直ぐに歩いて行つた。かなり進んだと思うと、なるほど境界らしいものが眼についたが、それは木の杣くと細い溝で出来ていた。

「そら、これが境界だよ！」とノズドウリヨフが言つた。「これから手前にあるものは、みんな僕のものさ。それに彼方あちらがわの、あの青く見えている森と、森の向うにあるものも、みんな僕のものだよ。」

「へえ、一体あの森はいつお前のものになつたんだい？」と、妹婿が訊いた。「近ごろあれを買つたとも言うのかい？ あれは、お前のものじゃなかつたからさ。」

「うん、あれは近ごろ買ったんだよ。」とノズドウリヨフが答え

た。

「そんなに早く、一体いつ買いこんだのだい？」

「いつって、まだおととい昨日買ったばかりさ。篋べらぼう棒に高い金を出し

たものよ。」

「だってお前、おととい昨日は定期市いにいたじやないか。」

「ちえつ、この\*2ソフロンめ！ 定期市いへ行くのと地所ちを買う

のとは一緒にやあ出来ないとしてもいうのかい？ それあ、おれは

定期市いへ行ってたさ、だがおれの留守ちちゆうに、うちの管理人が

買っておいたのさ。」

「なるほど、管理人がね。」そうは言ったが、妹婿はやはり腑に

落ちないらしく、首を振った。

客はまた同じ悪い道をとおつて戻つて来た。ノズドウリヨフは

二人を自分の書齋へと案内したが、そこには普通、書齋にある、

書類とか書物とかいったようなものは、何ひとつ見あたらず、長<sup>サ</sup>

ーベル

劍と二挺の鉄砲が懸つているだけで、一挺は三百ルーブリ、一

挺は八百ルーブリ出したものだと言う。妹婿はちよつと見て、た

だ首を振つただけであつた。それから、トルコ製だという短劍を

見せられたが、その一<sup>ひとつ</sup>振<sup>ふり</sup>には、どう間違つたのか 刀工サヴェ

リイ・シビリヤコフ というロシア名の銘が刻んであつた。それ

に次いでお目見得をしたのは\*3 紙腔<sup>シヤルマンカ</sup>琴であつた。ノズドウリ

ヨフは早速、二人の前で把<sup>ハンドル</sup>手を廻して見せた。紙腔琴はなかな

か好い音で鳴りだしたが、内部<sup>なか</sup>で何か故障を起こしたらしく、マ



ズルカが中途で、 \*4 マルボローは軍いくさに門出せり という歌に  
 変り、その マルボローは軍いくさに門出せり が不意にまた或る古く  
 から知られているワルツに転じたものである。ノズドウリヨフは、  
 もうとつくに廻すのをやめていたが、紙腔シヤルマンカ琴の内部に甚だ勇ま  
 しい笛管ふえが一本あつて、それがいつかな鳴り止もうとしないで、  
 いつまでも一つだけで鳴りつづけていた。さてその次ぎには、木  
 や陶器や海泡石かいほうせきの煙管パイプがお目どおりをした——すっかり燻いぶし  
 のも、包まれたのも、まだ燻しのかからないのも、鞣なめしがわ革がわに包まれた  
 のも、包まれないのもあり、つい最近に骨牌カルタでとつた、琥珀の吸  
 口のついたトルコ煙管もあれば、どこかの宿しゆくえき 駅えきで彼に首つた  
 け惚れこんだ、さる伯爵夫人が刺繡をしてくれたのだという煙草

入もあつて、その伯爵夫人の可愛らしい手は、彼の言葉によると世にもいみじき『贅シユベルフリユ物』だったとのこと——おおかた彼の語彙ゴイでは、この言葉が最高度の完璧を意味しているのであろう。前菜に蝶鮫ひものの乾物を撮んでから、三人は五時ちかくになつて食卓についた。ノズドウリヨフの家では、どうやら食事というものが、生活の主なる要素とはなつていないらしく、料理にも大して意が用いられていなかった。焦げついたものがあるかと思えば、まだ生煮えのものがあるという為ていたらしく体であつた。恐らくは料理番が、主として靈感にまかせて、何でも手当り次第に放りこんだものに見える——胡椒が傍にあれば、胡椒を振りかける、キャベツが眼につけば、キャベツを突っこむ、牛乳でも、ハムでも、豌豆でも、

お構いなしに叩きこむといった調子で——要するに、滅多矢鱈に捏ねこませたもので、それでも温かい中うちなら何とか味があるだろうという代物なのである。その代りノズドウリヨフは酒にかけては眼がなかった。まだスープも出ないうちから客の大きなコップへなみなみとポルトワインを注ぎ、また、別のコップへは擬まがいの\*5ソーテルンを注いだ。というのは、そんな県や郡の田舎市まちに、本物のソーテルンなどある筈がないからである。それからノズドウリヨフは、マデラ酒を一本もって来させて、『これ以上の酒は、元帥だつて飲んだことあなからうぜ』と言つた。成程そのマデラ酒は咽喉に焼けつくようだつた。何しろ商人たちは、こういう途轍もないマデラ酒がお気に召す地主連の味覚を百も承知で、遠慮

会釈なくラムで味をつけたり、時にはロシア人の胃の腑なら、この位のことは大丈夫と見越して、\*6 王水まで注ぎこんでおくからである。それからノズドウリヨフは、もう一本、特殊な酒罫を取り出させたが、それは彼の言うところでは、\*7ブルガンデイであつて同時にシャンパンでもあるとのことだ。彼は右に左に、チチコフと妹婿とへ、どちらのコツプへもしきりに酒を注いだ。

ところがチチコフはふと、彼が自分のコツプへはあまり注がないことに気がついた。それがチチコフに警戒の念を起こさせた。それで彼はノズドウリヨフがどうかして話に夢中になつたり妹婿のコツプへ酒を注いだりしている隙に、急いで自分のコツプの酒を皿へこぼしてしまった。間もなくテーブルへ清涼酒リヤビノフカが出た、そ

れはノズドゥリヨフの話では、まるでクリームそのままの味だとのことであつたが、あにはか豈あ 凶からんやツンツンと焼酎の臭いが鼻を刺した。次ぎに、何か芳香酒のようなものを飲んだが、それにはとても覚えにくい名前がついていて、主人でさえ二度目には別の名前で呼んだくらいだ。食事はもう疾とつくに終り、酒も一と通り吟味が済んだけれど、客はやはりまだ食卓を離れなかつた。チチコフも、妹婿のいる前では、例の重要な問題をノズドゥリヨフに切り出す気にはどうしてもなれなかつた。妹婿とはいじょうい条、局外者には違いなく、然もこの問題は、こつそり二人だけでしんみりとして語りあふ必要があつたからだ。ところが、その妹婿も大して危険な人物ではなさそうだった——というのは、もうすっかり酔っぱ

らつてしまつたと見えて椅子に掛けたまま、頻りにこくりこくり居いねむ睡りをしていたからである。そのうちに自分でもどうやら足あしこ腰しの確かでないことに気がついたらしく、とうとう家へ帰ると言いだした。が、その声がまた、ロシア式にいうと、まるで釘拔くびわで頸くびわ圈を馬につけるような、恐ろしくまどろっこく、懶ものうげな調子であつた。

「いや、駄目々々！ 放しやあしないぞ！」とノズドウリヨフが言つた。

「そんな、お前、無理をいうなよ、おらあ、ほんとに帰るよ。」と妹婿が言つた。「お前はまた、えらくおれに無理をいうじやないか。」

「何いってやがるんだい！　今から直ぐに一と勝負やろうつての  
に。」

「うんにや、兄弟、やるならお前、勝手にやるがいいよ。だがお  
らあ駄目だ。家内がまた、えらく憤れるからなあ、まったく。お  
れは彼女に定期市の話をしなくちやならないのさ。いや、兄弟、  
こうしちやあいられないよ、彼女を悦ばせにやならないからな。  
どうか、そう引き留めないでくれ！」

「ふん、彼女だの、家内だのと、そんなものあ糞くらえだ！　な  
るほど、ほんとに大事なことを二人でやろうつてのかい！」

「そうじゃないよ！　兄弟！　彼女あ、ほんとに好い女房だもの。  
まったくのところが、模範的な、実に立派で貞淑な女だよ！　い

ろいろとよく尽してくれるからなあ……お前ほんとにするかい？  
おらあ、涙がこぼれるくらいなんだよ。いや、もう引き留めな  
いでくれ、おらあ正直な人間らしく、帰るんだ。これはまったく  
嘘偽りのない話なんだよ。」

「まあ、帰しておあげなさい。この人を引き留めておいたって、  
しようがないじゃありませんか？」とチチコフが、小声でノズド  
ウリヨフに言った。

「成程、それもそうだな！」とノズドウリヨフが答えた。「おれ  
は、こういう愚<sup>ぐ</sup>図<sup>ず</sup>が死ぬほど嫌いなんだ！」そして、今度は声を  
張りあげて、こう言い足した。「じゃあ、勝手にしろよ、家へ帰  
って女房とさんざいちやつくがいいや、助平野郎め！」



「いや、兄弟、おれを助平だなんて言っちゃいけないよ。」と妹婿が答えた。「おらあ、まったく家内には、いろいろ世話になつてるんだからな。ほんとに、氣立てのやさしい、親切な女で実意をつくしてくれることといたら……有難涙がこぼれるくらいだよ。屹度きつとまた、定期市いでは何を見ていらつしやいましたなんて訊くだろうから、何もかも話してやらなくちやならない……まったく可愛い女だよ。」

「じゃあ、さつさと帰つてつて、かかあ嬬に出鱈目を聞かせるさ！　それから、お前の帽子だよ。」

「いんにや、お前、決してそんな風に彼女あれのことを悪く言うもんじゃないよ。それあ、お前、いわばおれを侮辱することになるん

だぜ、彼女あれはまったく可愛い女だもんな。」

「ふん、だからとつとつとその嬢ねえんどこへ行けつてんだよ。」

「うん、じゃあ帰るよ。で、おつきあいの出来ないことは、まあ勘弁して貰うぜ。心しんそこ底そこそれあ面白面白かろうけどさ、生憎生憎そうはい

かんのだよ。」こんな風に妹婿妹婿は先に帰るい弁解いわけを、いつまでも

いつまでも繰り返していたが、自分が疾とうの昔昔に半蓋馬車ブリーチカに乗つ

て門の外へ出たことにも、もうずっと前から彼の眼の前にはがらんとした野原がひろがっているだけだということにも気がつかなくなつた。従つて細君も、定期市の話をあまり詳しくこの男から聞くことは出来なかつたに違ちがひない。

「碌碌でもない野郎やろうさ！」と、ノズドウリヨフは窓際まどぎはに突つ立つた

まま、遠ざかり行く馬車を見送りながら眩やいた。「あの、だら  
しのない恰好はどうだい！　だが、あの側馬わきうまは悪くないなあ。  
大分まえから、あれをまきあげてやろうと思ってるんだがね。と  
ころがどうして、あいつはひとすじなわ一筋縄で行く野郎じゃないんだ。助  
平だよ、まったくの助平野郎だよ！」

それから二人は部屋へ戻った。ポルフィーリイが蠟燭を持って  
来た。その時チチコフは、何処から取り出したのか知らないが主  
人が手に一組の骨牌カルタを握っているのに気がついた。

「さあ、一つどうだい、」そういいながらノズドウリヨフは、骨  
牌の両端をぎゅつと指で挟んで少し曲げるようにしたため、札が  
分れてパラパラと前へ飛び出した。「ほんの暇つぶしに、僕が三

百ルーブリぐらいで筒どうもと元を開こうや！」

しかしチチコフは相手の言うことがまるで聞こえなかったような振りをしながら、急に思い出したように、『あ！　そうそう、実は一つお願いがあるんだが。』と言った。

「どんなさ？」

「第一、きつと承知するって、約束して欲しいんだがね。」

「だが、頼みって、一体、なんだい？」

「まあ、いいから約束をして下さいよ！」

「じゃ、そういうことにしておこう。」

「屹度きつとですネ？」

「屹度きつとだとも。」

「そのお願いというのはこうなんで。君のお宅にも、多分、死んだ農奴でまだ戸籍簿から抹消けずつてないのが相当あるでしょう？」

「うん、それもあるが、それが一体どうしたというんだい？」

「それを一つ譲つて頂きたいんで、僕の名義に。」

「へえ、一体そんなものを君はどうするんだい？」

「まあ、ちよつと必要があつてね。」

「だが、一体なんのためにさ？」

「さあ、ちよつと必要なんで……そんなことはどうだつていいでしょう——要するに、必要なだけですよ。」

「うん、さては何か意図はらがあるんだな。白状し給え、何だか？」

「意図はらがあるんですつて？ 冗談じゃない、そんな詰らないもの

で、なにが目論めるものですか。」

「じゃあ、なんだって君はそんなものが欲しいんだい？」

「おやおや、君もよつぽど物好きな人ですなあ！　くだらないことを一々手で触って見たり、鼻で嗅いでみなくては承知が出来ないなんて！」

「それじゃあ、どうして君は、それが言えないんだい？」

「そんなことを聞いたって、何の得にもならないじゃありませんか？　まあ、ほんの空想みたいなことなんですよ。」

「ようし、じゃあ、それを君が言わないうちは、おれもうんと言わないぞ。」

「そうら、ね、それじゃあ君の方が卑劣ですぞ。ちゃんと誓って

おきながら約束を違<sup>たが</sup>えるなんて。」

「ああ、何とでも言うがいいさ。だが僕は、君がその理<sup>わけ</sup>由を話すまでは、うんと言わないからね。」

こいつは何と言ったものかな？ とチチコフは考えたが、ちよつと思案をした後、実は世間的に貫禄を示すため、死んだ農奴が欲しいのだ、自分は領地もあまり持つていないから、当座のあいだ、せめて死んだ農奴でも持つていたので、と言った。

「嘘だ、嘘だ！」と、相手に皆まで言わさず、ノズドウリヨフが呶鳴った。「嘘だ、大将！」

チチコフは、どうもこれは拙い思いつきだった、口実としても甚だ頼りないものだと言つても認めた。「ではまあ、打ち明けて

話しますがね。」と、彼は言葉を改めて、「ただこれは他人に話して頂いては困りますよ。実は結婚をしようと思ってるんです。

ところが、相手の女の両親というのが、おそろしい野心家ですね。まったく、どうも難物なんで！　僕も今更こんな連中に関りあつて後悔してるんですがね、どうしても娘の婿には、三百人以上の農奴を持った人間でなけりやいけないと言うんです。ところが、僕の持つてるのだけでは、殆んど百五十人ぐらい不足なんで……。」と言つた。

「ふん、嘘を言え！　嘘を！」と、ノズドウリヨフがまた喚き出した。

「いや、今度こそは、」とチチコフが言つた。「まったく、これ



んばかりも嘘はないんですよ。」そう言って彼は、親指で小指の頭を極めて小さく区切つて見せた。

「おれは首でも賭けるが、そりや嘘だよ！」

「だって、そりや無理ですよ！　じゃあ、僕は一体なんですか？」

どうして、そう僕が一々嘘をつかなきゃならないと言うんです？」

「それあ、君という男を見抜いているからさ、君がどえらい山師だつてことをね——まあ心安だてに言わせて貰えばだよ！　おれがもし君の上官だったら、第一番に槍玉にあげてやるところだよ。」

チチコフも、そんなにまで言われると、流石にむつとした。彼は少しでも粗野な言葉づかいや礼儀にそむく口のきき方をされる

のが嫌いだった。彼はどんな場合でも、相手が非常に高貴な人物でない限り、自分に馴々しい態度で接しられるのさえ好かなかった。そんな訳で、今もすっかり腹を立ててしまったのである。

「断然、槍玉にあげてやるんだがなあ。」と、ノズドウリヨフは繰り返した。「おれがこう言うのも、別に君を侮辱するつもりではなく、心安だてに、ぎつくばらんに言ってるんだがね。」

「だが、物には限度というものがありますよ。」と、チチコフは自尊心をもって言った。「そんな言葉づかいで見栄が張りたいのなら、兵営へでも行くがいいでしょう。」そう言うてから、こうつけ足した。「もし無償ただではお嫌なら、ひとつ売って下さいな。」  
「なに売れ！　だが、ちゃんとおれは知ってるぞ、君は酷い野郎

だから、どうせ沢山たんとは出しやすまいが？」

「へっ！ 成程お前さんも相当なもんだ！ よく考えて御覧なさい！ そんなものがお前さんここでは、一体なんです、ダイヤモンドほど高価たかいものだともいいますかね？」

「うん、そのとおりだよ。おれはちゃんと君を知ってるからなあ！」

「馬鹿な、ねえ君、どうしてそんなユダヤ人根性を出すんだらう！ そんなもの、無償ただでくれたっていいんだのに。」

「うん、ではね、おれが決してそんな吝しみん坊じゃない証拠に、代金いなんて鏢びた一文もとらないよ。その代り、あの種馬を買い給え、そうすれば、景品につけてやらあ。」

「冗談じゃない、種馬なんか買ったって僕はしようがないじゃないか？」とチチコフは、まったくその申し出に面喰らって、言った。

「どうして、しようがないものか？ おれはあの馬に一万ルーブリだしたんだぜ、それを君には四千ルーブリで売ってやろうってんだよ。」

「だって、僕が種馬なんか何にするのです？ 牧場を持っている訳じゃない。」

「まあ、話を聞き給え、君はよくのみこめていないんだよ。いいかね、僕は君から今、三千ルーブリだけ貰えばいいんだよ、残りの千ルーブリは、後で結構なのさ。」

「ところが、種馬なんか僕には要らないんだから、どうもこうもありませんよ！」

「じゃあ、薄栗毛の牝馬めすを買い給え。」

「牝馬だつて要りませんよ。」

「その牝馬とさ、さつき君が見たあの灰いろの馬とで、たった二千ルーブリに負けとくよ。」

「だが、僕は馬なんか要りませんよ。」

「要らなきや売つたらいいじゃないか。今度の定期市ちで三倍は儲かるぜ。」

「じゃあ、自分で売つたらいいでしょう、確かに三倍にもなる見込みがあるのなら。」

「儲かることは分つてるがね、君にも儲けさせてやりたいからさ  
」

チチコフは、その御好意は有難いが、灰いろの馬も薄栗毛の牝馬も要らないと、きつぱり断わつた。

「それじゃあ、犬を買い給え。君にひとつ、素晴らしい番つがいを売つてやろう——まったく、ぞくぞくして震いつきたくなるようなやつだぜ！ 髭の生えた\*8ブルダスタヤで、毛が針のように上へ突つ立つていてさ、肋骨あばらの張りぐあいと言つたら、ちよつと考へも及ばないくらいで、蹠あしのうらだつてまんまるこくつて、歩いても地面べたにつかないような逸物なんだぜ！」

「どうしてまた犬なんか僕に要るんです？ 僕は猟師じゃあり

ませんよ。」

「でも、君が犬を飼ったらいと思うからさ。じゃあね、犬はどうしても要らないというのなら、僕の紙腔琴シャルマンカを買わないかい。ありやあ素敵な紙腔琴だぜ！正直な話、僕はあれに千五百ルーブリだしたがね、君だったら九百ルーブリで手放すよ。」

「また僕に紙腔琴シャルマンカが何になるんです？僕は、あんなものを肩にかけて門附かどづけをして歩くドイツ人とは違いますからねえ。」

「ところが、君、あれはドイツ人なんかが持つて歩く紙腔琴シャルマンカとは、品しなが違うんだぜ。あれあ、立派なオルガンだからね。まあ、よく見てくれよ、すっかりマホガニ製なんだぜ。さあ、もう一度見せてやろう！」ここでノズドウリヨフはチチコフの手を掴ん

で隣りの部屋へ曳っぱりこもうとした。で、チチコフは足を踏んばつて、自分はもうその紙腔琴のことならよく知っているからと言いはつては見たけれど、結局もう一度、マルボローの出征を歌った曲を聴かなければならなかった。「どうしても金子かねを出すのがいやならねえ、こうしようじゃないか、僕はこの紙腔琴シヤルマンカと、それから死んだ農奴をありつたけ君にやるから、君はあの半蓋馬車ブリに三百ルーブリだけ追銭おいをうってくれ給え。」

「まあ、よして下さいよ！ それじゃあ、僕はいったい何に乗って行くんです？」

「僕が別の半蓋馬車ブリを君にやるよ。さあ物置へ一緒に来たまえ、そいつを君に見せるからさ！ 塗替さえすりゃあ、素晴らしい馬



車になるぜ。」

ちえつ、この野郎、どこまで諄くどいことを言やがるんだろう！

こう、心で思ったチチコフは、どんなことがあつても、馬車だろ  
うが、紙腔琴だろうが、また頭では考えも及ばないような肋骨の  
張つた、どんな蹠あしのうらの丸い犬だろうが、いつさい御免を蒙ろうと肚  
をきめた。

「だって君、馬車も、紙腔シヤルマンカ琴も、死んだ農奴も、みんな一緒に  
手に入るんだぜ。」

「いやです！」と、チチコフはもう一度いった。

「どうして、いやなんだね？」

「ただ、いやだから、いやなんで——もう沢山です。」

「ふん、君も変な男だねえ、まったく！ どうも君みたいな人間とは、好い友達同士の交際つきあいは出来かねるよ……そういう男さ、まったく！ 君が二重人格だつてことが、初めて分つたよ！」

「えつ、馬鹿な、僕が何だというんです？ 自分で判断してみたらいいでしよう——では、どうしてそんな、自分に全然必要のないものを僕は買わなきゃならないんです？」

「もういいや、そんな話は止せよ。今こそ君つて男がよく分つたよ。君はまったく、ひどい悪党さ！ じゃあどうだい、一番、銀行バンクを行ンクをやるうじやないか？ 僕は死んだ農奴をすっかり賭けるよ、紙腔シヤルマンカ琴も一緒に。」

「いや、銀行バンクなどで事をきめるのは、運否うんぷてんぷ天賦てんぷというものですか

らね。」チチコフはこういいながら、同時に、ノズドウリヨフの手にある骨牌をじろりと横目で眺めた。二つに分けた札がどうもいかさま臭く思われたし、裏の模様からしてひどく怪しい。

「どうして運否天賦なんだい？」と、ノズドウリヨフが言った。

「ちつとも運否天賦なんてことはないぜ！ 君の方に運があれば、どえらい大儲けになるのじゃないか。そら、どうだ！ 何ちゆう好い札だい！」こういいながら、彼は相手の競争熱を煽るために、札を一枚々々めくりはじめた。「何ちゆういい札だい！ 何ちゆういい札だい！ そうらね、いいのばかり行くじゃないか！ そら、こいつはおれが何もかもすつちまった忌々しい九だ！ どうもこいつは、おれを裏切るような気がしたて、それで、じつと眼

をつむつて心んなかで思ったよ。畜生！裏切るなら裏切りやあがれ！碌でなしめ！つてな。」

ノズドウリヨフがこんなことを言っているところへポルフィーリイが酒罈を持って来た。だがチチコフは、骨牌も酒もきつぱり断わつた。

「どうして君は骨牌をやらないんだい？」とノズドウリヨフが言つた。

「どうしてつて、気が向かないからですよ。実のところ、僕は骨牌なんかで好きじゃありませんからね。」

「どうして好きじゃないんだい？」

チチコフは肩をすくめて、「好きじゃないから、好かないんで

すよ。」と言ひ足した。

「くだらねえ男だなあ！」

「どうも仕方ありませんね。そういう生れつきだから。」

「なあに、君は助平野郎さ！ おれは初め、君をもう少しましな

人間かと思つたのに、まるで君は人づきあい一つ弁わきまえていないん

だ。君のような人間とは、友達として話すことなんて金輪際でき

つこない……なんら虚心坦懐なところも、誠実なところもありや

しない！ まるでソバケーヴィツチそつくりの、碌でなしだよ！」

「どうしてそんなに僕を悪く言うんです？ 骨牌をやらないから

つて、僕が悪いんですかね？ 君がそんな詰らないことでがみが

み言うような人なら、死んだ農奴だけ売って貰えば沢山ですよ。」

「くそ喰らえだ！ おれは、無償ただでもやろうかと思つてたのだが、もう断じて、やらないぞ！ 帝国を三つよこしたつて、呉れてやるもんか。この大山師の、穢しみない吝しみつたれ野郎め！ おれはもうこれからさき君みたいな男とは、いっさい、つきあわないよ。おい、ポルフィーリイ、馬丁のところへ行つてそう言え、この男の馬には燕麦なんぞやつちやいけないつて、乾草だけ食わせておけば沢山だと。」

チチコフは、まさかこんな話になろうとは、夢にも思つていなかった。

「君みたいな男は、もう顔を見るのも嫌だよ！」と、ノズドウリヨフが言つた。

だが、こんな争いをした癖に主人は客と一緒に晚餐をしたため  
た——<sup>もつと</sup>尤も、今度はもう食卓へ例のいろんな凝った名前をつけた  
酒は一本も出なかった。ただ、\*9 サイラスかなんかの罍が一本  
きり立っていたが、それはどのみち 酸っぱいもの と言われている  
代物に違いなかった。夕食が済むとノズドゥリヨフは、チ  
コフのために寢床の支度が出来ている横手の部屋へ彼をつれて  
行って、『そら、これが君の寢床だよ！ おれは君に、ゆつくり  
お寝みなどとは言いたかないのさ。』と言った。

ノズドゥリヨフが出て行くと、チコフはこの上もない不快な  
気持で後に残った。彼は内心で我と我身を忌々しく思い、またこ  
んな男のところへやって来て無駄に時間を潰したことが腹立たし

くて自分で自分を罵った。だが何より例の一件をノズドウリヨフに漏らしたことが口惜くやくしかった。まるで赤ん坊か馬鹿者のように無む分ぶん別べつなことをやったものである。實際この一件は、決してノズドウリヨフ輩はいに打ち明けるべき性質のものではなかったのだ：  
：。ノズドウリヨフって奴は人間の屑だ、出鱈目な嘘をついたり、大袈裟なことを言つて、飛んでもないことを吹聴して廻りかねないから、どんな悪い噂を立てられるやら、分つたものじゃない：  
：。いけない、いけない。『おれは、ほんとに馬鹿だった！』と彼は一人で呟つぶやいた。その夜、おちおちと彼は眠れなかつた。何か小さな、その癖おそろしく素敏すびしつこい昆虫むしめが、とても我慢が出来ないほどチクチクと彼の軀からだを螫さすものだから、手を一杯にひ



ろげて彼は螫された箇所をポリポリ掻きむしりながら、思わず、『えい、畜生ども、ノズドウリヨフの野郎と一緒に鬼にでも食われてしまやがれ!』と口走つたものだ。朝はやく彼は眼を覺ました。彼の第一番の仕事は、寝巻をはおり、長靴を突っかけざま、庭をとおつて厩へ行き、セリファンにすぐ馬車の支度をしろと言いつけることだった。また庭をとおつて戻つて来ると、ぼつたりノズドウリヨフに出会つた。この男もやはり寝巻のまま、煙管パイプをくわえていた。

ノズドウリヨフは馴々しく挨拶をして、昨夜はよく眠れたかと訊ねた。

「まあ、どうにかね。」とチチコフは、ひどく無愛想に答えた。

「ところが僕の方は、君、」と、ノズドウリヨフが言うには、

「夜<sup>よ</sup>つびて、話をするのも胸糞の悪い、いやな夢を見たんだよ。

それに昨日からの祟りで、口ん中に、まるで騎兵の一個中隊も泊つてやがるような気持さ。ね、とろとろつとすると、夢でおれをひつ叩<sup>ばた</sup>きやあがるんだよ、まったく！ 然もそいつが誰だと思う？ とても君なんかに見当がつくもんか。例の騎兵二等大尉のポツエル―エフとクヴシンニコフの野郎とだよ。」

そうさ、とチチコフは、肚の中で考えた。手前なんざ、夢でなしに本当にぶん殴られたらよかつたのに。

「まったくだよ！ それあ、とても痛かつたねえ！ 眼を覚ましてみると、畜生、ほんとに何かむずむずしやがるのさ——きつと

蚤の畜生だよ。じゃあ、君は行つて着物を着替えて来たまえ。僕もすぐ後から行くからね。実は、ちよつと管理人の悪党を怒鳴りつけてくれなくちやならないのだ。」

チチコフは部屋へ歸つて、顔を洗い、着物を着替えた。そうした後で彼が食堂へ出て行くと、テーブルにはもうお茶の道具が出ており、ラムが一本そえてあつた。昨日の昼飯と晩飯の名残りが部屋に残っていた。どうやら箒の先きがまんべんに行届かなかつたらしい。床には麵麩パンの片かけらが散らばっているし、卓布には煙草の灰までくつついている。別に手間どらなかつたと見え、主人も間もなく入つて来たが、寝巻の下に何ひとつ著つけていないので、はだけた胸から黒々とした胸毛が覗のぞいていた。この男が長い煙管パイプ

を手にとって、茶碗からお茶を啜っている恰好は、理髮店とこやの看板みたいに髪をびったり撫でつけたり、きれいにウエーヴをかけた紳士や、きちんと髪を短かく刈った紳士などの恐ろしく嫌いな画家にとつては、正に好個の画題であつた。

「さあ、一つどうだね？」とノズドウリヨフは、暫らく黙つていた後で言つた。「農奴を賭けて一勝負やろうじゃないか？」

「僕はもう骨牌は御免だと言つておいたでしょう。売つて頂けるのなら、買いますかね。」

「売るなんて、いやだよ。第一、水臭いじゃないか。おれはそんな訳の分らないことに手は出さないよ。だが、銀行は——別だからね。ほんの一番、手合わせをしようじゃないか！」

「何度も言うとおおり、それは御免を蒙りますよ。」

「じゃあ、交換しちやどうだね？」

「いやです。」

「うん、それじゃあ、将棋を指そうや。君が勝てば、みんな君のものさ。何しろ、おれんここにやあ、戸籍簿から削らなきやならんやつが、うんとあるからね。えい、ポルフィーリイ、将棋盤を持って来い！」

「駄目ですよ。僕はやりやしませんから。」

「だって、これは銀行バンクと違って、運も誤魔化しもあつたものじゃない。腕前だけの話さ。第一、おれは碌すつぽ指し方も知らないんだから、幾手か先手を指させて貰わにや駄目だよ。」

やって見るかな、と、チチコフは肚の中で考えた。奴と一番さして見よう。おれも将棋なら相当に指したものだし、奴さんも、将棋でいかさまはちよつと難かしかろうからな。

「じゃあ、仕方がない、ひとつお相手しましょう。」

「それじゃあ、おれは死んだ農奴を賭けるから、君は百ルーブリ賭けるんだぜ！」

「どうして？ 五十ルーブリ賭けたら沢山ですよ。」

「駄目だい、そんな五十ルーブリなんて賭があるもんか？ よし、じゃあその百ルーブリに対して、中ぐらいの仔犬か、それとも時計につける金の印いんぎょう形ぎょうでも添えることにしようじゃないか。」

「じゃ、そういうことに。」とチチコフが言った。

「で、先手は幾手やらせるね？」ノズドウリヨフが言った。

「そりや、どうしてですか？ もちろん平手ひらてですよ。」

「せめて二手ぐらいは先きにやらせ給え。」

「駄目ですよ。僕だって下手なんですから。」

「ふん、どんなに君が下手だか、ちゃんと知ってるさ！」そう言  
いながら、ノズドウリヨフは駒を一つ進ませた。

「ずいぶん永らく駒を手にしませんからね！」そう言つて、チチ  
コフも駒を動かした。

「下手だなんて仰つしやつても、ちゃんと知ってますよだ！」そ  
う言つて、ノズドウリヨフはまた駒を進めた。

「ずいぶん永らく駒を手にしませんからね！」同じことを言つて、

チチコフも駒を動かした。

「下手だなんて仰つしやつても、ちゃんと知ってますよだ！」  
「そう言いながらノズドウリヨフは駒を動かしたが、それと同時に、袖口でもう一つ別の駒を進めた。」

「ずいぶん永らく駒を手にしませんから！……おや、おや！  
これは一体どうしたんですか？ 後へ返して下さい！」とチチコフが言った。

「何をさ？」

「駒をですよ。」とチチコフは言ったが、それと同時に、すぐ自分の鼻の先きに、もう一つ別の駒がすでに女王を狙っているらしいのに気がついた。一体そいつが何処から飛び出して来たかは神



様でも御存じないだろう。「駄目です。」と、チチコフはテーブルから立ちあがって、言った。「君とは、とても勝負なんか出来ませんよ。こんなやり方ってあるもんじゃない——一度に駒を三つも動かすなんて！」

「どうして、三つなんて言うんだい？ こいつは、間違いだよ。知らない間に動いていたのだ。これを引っこめれば、いいんだろ  
う。」

「じゃあ、もう一つの方は、何処から来たんです？」

「もう一つの方って、どれのことだい？」

「そら、それですよ、この、女王を狙ってるやつはどうしたんです？」

「おや、おや！ 君は憶えがないんだね！」

「いや、僕は初めから、ちゃんと手を数えて、何もかも憶えていますよ。君はたった今それをここへ持って来たんです。そいつは、ほら、ここにあるべきです！」

「ここにある筈だつて？」と、ノズドウリヨフは真赤になつて言つた。「ふん、して見ると君はいんちきだな！」

「いや、そう言う君こそいんちきでしょう。ただそれが旨く行かなかつただけで。」

「なに、おれを一体、何だというんだ？」とノズドウリヨフが言つた。「おれが、いかさまをやるとでも言うのか？」

「僕は君なんだとも言やしませんがね、ただ今後はもう一切お相

手をしませんからね。」

「いいや、今更やめることは出来ないぞ、」とノズドウリヨフは、  
赫<sup>か</sup>つと急<sup>せ</sup>きこんで言った。「勝負は始まったのだから！」

「君の方で正直な人間にふさわしい指し方をしない以上、僕は止める権利がありますよ。」

「嘘をつけ！ 君にそんなことは言わせないぞ！」

「いいや、君の方こそ嘘をついているのです！」

「おれはいかさまなんかやらなかったのだから、君も今更やめるとして法はない。どうしても勝負をつけなきゃならないぞ！」

「そんなことを言ったって、無理にやらせることは出来ないでしょう。」こうチチコフは冷然と言い放って、将棋盤に進みよるな

り、駒を引つ掻きまわしてしまった。

ノズドウリヨフは烈火のようになって、チチコフに詰めよつた。その劍幕に、こちらは思わず二三歩、後へさがつた。

「是が非でも指させずにおくものか。駒を掻きまぜたつて、なんにもなりやしないぞ！ 順序はちゃんと憶えている。もう一度、もどどおりに並べかえるだけだ。」

「いや、もうお仕舞しまいですよ。僕はもう君とは指しませんからね。」

「じゃあ、君はどうしても指さないというんだな？」

「君と将棋なんか指されないことは、分りきつてるじゃありませんせんか。」

「いんにや、さあ、はつきり言い給え、どうしても指さないんだね？」こうノズドウリヨフはなおも詰めよりながら言った。

「指しません。」そうは言ったもののチチコフは、事態がいよいよ急迫して来たので、万一の場合にそなえて両手を顔の近くへ持つて行つた。この用心は確かに時宜じぎを得たものであつた、というのは、その時ノズドウリヨフが力まかせに手を一つ振りまわしたからで……危く、我等の主人公のふつくらした気持の好い片頬に、消しがたい汚辱の痕あとが残るところであつた。けれど幸いにも彼は殴打を免がれて、ノズドウリヨフの激げきした両手を掴んで、しっかりと押えつけた。

「ポルフィーライ！ パウルーシカ！」と、ノズドウリヨフは手

を振りほどこうとして躍起になりながら、狂気のように喚きたてた。

この声を聞くとチチコフは、こんな大人げない場面を召使どもに見られては工合ぐあいが悪いし、それに、ノズドウリヨフを捉まえていたところで所詮無駄だと思ったので、掴んでいた手を放した。

ちようどそこへ、ポルフィーリイがパウルーシカと一緒に入つて来た。殊にパウルーシカというのは頑丈な若者で、こんな奴と事を構えては、全然勝味かちみがなかった。

「それじゃあ、君はどうしてもこの勝負をつけないというんだな？」と、ノズドウリヨフが言った。「そうならそうと、はつきり返事をし給え！」

「勝負をつけようにも、つけられませんよ。」そう言つてチチコフは、ちらと窓の外を見やった。すっかり用意の出来ている自分の半蓋馬車ブリーチカが眼についた。セリファンは合図のあり次第、馬車をポーチへ寄せようと待ち構えているらしい。しかも、如何いかんともこの部屋から外へ逃げ出しようがない。扉口には二人の頑丈どんぶな鈍物が立ちはだかっているのだ。

「じゃあ、どうしても勝負をつけないというんだな？」とノズドウリヨフは、火のように顔をほてらせながら繰り返した。

「君がもし、正直な人間らしくやればですが……しかし、もうお相手は御免です。」

「ああ、それじゃあ指せないってんだな、悪党！　自分の方に勝

味が無いものだから、それで指さないんだな！ さあ、こいつを殴どやしつけろ！」こう彼は、ポルフィーリイとパウルーシカに向けて、無我夢中で喚きたてた。そして自分でも長い桜の煙管パイプを握ぎつて屹きつと身を構えた。チチコフはサツと布のよう顔色を変えた。彼は何か言おうとしたが、唇がブルブル顫えるだけで声は出なかつた。

「こいつを殴どやしつけろ！」ノズドウリヨフはこう叫びながら、桜の煙管パイプを振りかざして、まるで難攻不落の城塞へでも攻め寄せるように、全身を火のようにはてらせて、汗ぐっしよりになりながら前へ詰めよつた。「殴どやしつけろ！」と彼は、ちようど、向う見ずな蛮勇のために大会戦の時には、その手を扼して動かさないよ



うにと特別な命令の出ることと有名になっている無鉄砲な中尉が大突撃の時、自分の小隊に向つて『突貫ツ！』と叫ぶ、あれと同じような声をあげて喚いたものである。ところがその中尉はもうすっかり戦鬪熱にうかされて、彼の頭は旋風つむじかぜのように混乱してしまい、眼の前に\*ノスヴオロフ將軍の姿でもチラつくように勇躍ゆうやくして、巧名手柄こうみやうてがらに向つて突進するのだ。彼は自分の猪突猛進が総攻撃の作戦を台無しにしてしまうことも、雲に聳ゆる要害堅固な城塞の銃眼じゆうがんから数限りなき銃口がこちらを狙っていることも、自分の率いる無力な一小隊などは木葉微塵こつぽみじんに吹き飛ばされてしまうだろうことも、彼の喚き叫ぶ咽喉をハタと閉ざしてしまおうとして、宿命的な敵弾がもうヒューンと唸り声を立て

ながらこちらへ飛んで来つつあることも、てんで考えようとはしないで、遮しやにむに二無二突進しながら、『進めえツ、進め！』と喚おめくのである。ところが、ノズドウリヨフの方が、城塞に向つて突貫する、向う見ずな、逆上した中尉であつたにしても、彼が攻め寄せて行つた城塞そのものは、いっこう難攻不落でもなさそうだった。それどころかこの城塞ときては、すっかり怖おしけ氣づいてしまつて、魂も身に添そわぬ為ていたらく体たいであつた。彼がそれで自分の身を防まもごうと思つた椅子は、逸いちはやく二人の奴隷によつて彼の手から挽もぎ取られてしまったので、今や彼は観念の眼をつぶつて、生きた心地もなく、この家の主人のチエルケス製の煙管パイプを真まっこう向から受けよと待ち構えていた。まったく彼の身がどうなることやら、神様

にだつて分らなかつたが、計らずも運命の神が我等の主人公の脇腹や、肩や、きちんと整つた軀からだのあらゆる部分を救つてくれたのである。思いがけなく、まるで天からでも降つて来たように、不意にリンリンと鳴る鈴の音が聞こえ出すと、やがてこの家の玄関へ乗りつけるらしい馬車の車輪くるまの音のはつきり聞こえて、それから、ついに停つたらしい三頭立トロイカの癩カサの立つた馬の荒い鼻嵐と重苦しい息切れが部屋の中まで響いて来たのである。一同は思わず窓の外を見た。誰か、半ば軍服がかったフロツクを著きて口髭を生やした男が馬車から降りた。その男は玄関で案内を乞うと、ちよつどチチコフがまだ先刻の恐怖から我れに返る暇もなく、人間がかつて際さいかい会した最も哀れな状態にあるところへ、つかつかと入つ

て来た。

「ちよつとお尋ねしますが、ノズドウリヨフさんと仰つしやるのは何方どなたですか？」その見知らぬ男は、長い煙管を驚掴みにして突つ立っているノズドウリヨフと、ようやく不利な情勢から立ちなおりかけたチチコフを、やや訝いぶかしげに見やりながら、訊ねた。

「そう言う君は誰ですか？ それから先きに承うけたわりたい。」とノズドウリヨフは、その男の方へ近寄りながら、訊き返した。

「郡の警察署長です。」

「それで、どんな用があるんですね？」

「私は、或る事件の決定するまであなたが起訴されておいでになる旨むね、報告に接したことをお伝えに参つたのです。」

「何を馬鹿な、或る事件って、いったい何だね？」と、ノズドウリヨフが言った。

「あなたは酩酊のあまり、地主マクシーモフに棍棒をもって個人的な侮辱を加えたという事件に関係しておられるのです。」

「嘘をつけ！ おれは地主のマクシーモフなんて見たこともないのだ。」

「お黙りなさい！ 私は役人ですぞ。そういう言葉は御自分の召使に向つて仰つしやるべきで、この方ほうに対してはお愼みなさい。」

ここでチチコフは、ノズドウリヨフがそれにどう返答をするか、そんなことは聞こうともしないで、急いで帽子を掴むと、そのまま警察署長の後ろをすり抜けて玄関へ飛び出し、半蓋馬車ブリーチカへ乗り

こみざまセリファンに向つて、全速力で馬を走らせよと言いつけたのである。

\*1 オポデリドツク パーウエルをもじつて故意とこんな滑稽な名前で揶揄からかつたのである。

\*2 ソフロソ 古代ギリシアの道化劇作者の名前。

\*3 シヤルマンカ  
紙腔琴 長方形の箱の中に音を発する装置があり、楽譜を刻んだ紙を函の中央部に並んだ簧こうれつ列の間にとおして把手を廻すと自動的に音楽を奏する楽器。

\*4 マルボロー ジョン・チャーチル (1650-1722) イギリスの名将で政治家。ヨーク侯(後のヤコフ二世)に重んぜられ、女帝アンナにも仕えて、スペイン戦争その他で

は英国軍の名声を全世界に轟かした。

\*5 ソーテルン 産地ソーテルン市の名を冠したフランス産の白葡萄酒。

\*6 王水 強硝酸と強塩酸との混合液で、通常の酸に溶解せぬ金、白金を溶解し得る強烈な作用を有する。

\*7 ブルガンデイ フランス産の赤白の葡萄酒、渋味が強い。

\*8 ブルダスタヤ フランス種の猟犬。グリツフォンともいう。

\*9 サイプラス 英領サイプラス島産の酒の名。

\*10 スヴォロフ将軍 伯爵アレクサンドル・ワシーリエヴィツチ（1730-1800）元帥。七年戦争に勇名を馳せた将軍。

ポーランドやトルコの軍を破り、プガチョフの乱を平定し、後、フランスのイタリア侵略を阻止した功によりイタリア政府より公爵を授かる。



## 第五章

我々の主人公は、しかし、いかげん怖気づいてしまっていた。馬車が全速力で駆けて、ノズドウリヨフの村はもう野原や傾斜地や丘に遮られて、とつくに影を没してしまつたにも拘らず、今にも追手がかかりはせぬかと、なおも彼はびくびくしながら、絶えず後ろを振り返り振り返りした。呼吸いきをするのも苦しく、胸に手を当ててみると、籠に入れた鶉うずらのように心臓が躍っていた。『畜生、酷い目にあわしやあがつて！ ちえっ！ なんちう野郎だらう！』そこで、ノズドウリヨフに対して、ありとあらゆる残酷な、

思いきつた呪詛じゆそが浴びせられ、ずいぶん聞き苦しい毒舌も吐きちらされた。だが、どうしようがあるう？ ロシア人で、然もかんに怒っている際だ！ それに、これは決して冗談ごとではないのだ。『何と言ったって、』と、彼は独り呟やいた。『あすこへ、ちようど折よく、警察署長が来てくれなかつたものなら、おれはあのまま二度とお天道さまも拝めなくなつてしまつていたかも知れないぞ！ まるで水の上のあぶくのように跡形もなく消えうせてしまつて、おれは子孫も残さねば、未来の子供のために、財産も、歴乎とした名前も残してやる事が出来なかつたに違いない！』我等の主人公は、ひどく自分の子孫のことを気にかけていた。

飛んでもねえ業突張りごうつくばりな旦那さ！ と、セリフアンも肚の中  
 で考えた。 ついぞこれまで、あんな旦那は見たこともねえや。  
 ほんとに、唾でもひっかけてやりたいくらいだ！ それあな、人  
 間に物を食べさせねえことは、まあいいとしてもさ、馬にはたつぷ  
 り食わせなきやあなんねえだよ、馬は燕麦が好きだからよ。それ  
 があいつらの飯はんまい米まいなのさ。言ってみれば、こちとらの給金に当  
 るものが奴らには燕麦なんだからなあ。それがあいつらの飯米つ  
 て訳さ。

馬どもも矢張り、ノズドウリヨフのことをよく思っていないなかつ  
 たらしい。栗色や『議員』だけではなく、連銭れんせん葦毛あしげまで甚く機  
 嫌が悪かった。彼は何時もきまつて二の次の燕麦しか宛あてがわれず、

然もセリファンは『えい、この獄道め！』と言わないことには、決してそれを秣槽へ入れてくれなかつたけれど、それでもやはり燕麦は燕麦で、決してただの乾草などではなかつた。だから彼は結構それで満足してモグモグやりながら、時々、それも特にセリファンが厩舎にいないような時に限つて、自分の長い鼻面を隣りの相棒の秣槽へ突つこんで、一体どんな御馳走を宛われているのかと、ちよつとお塩梅を見たりしたものだ。ところがあの家では、まるつきり乾草ばかりじゃないか——馬鹿にしてやがる！ っついで、どの馬もみんな不服であつた。

しかし、こうした一同の不平不満は、まったく思いもかけぬ不意な出来事のために間もなく途中で吹っ飛んでしまった。馭者を

はじめ一同は、先方から来た六頭立の軽馬車にぶつたり打つかつて、殆んどすぐ頭の上で、軽馬車に乗っていた婦人連の悲鳴と、『やい、この馬鹿野郎！ おれが声をからして、よけろつ、阿呆、右へよけろつて、あんなに吠鳴つたでねえか！ 手前、酔っぱらつてやがるのか？』と威猛高いたけだかに罵る先方の馭者の喚き声を聞いて、初めてハツと我れに返つた。セリファンは自分のうっかりしていたことに気がついたが、ロシア人の癖でこちらが悪かつたと他人の前へ頭をさげることが出来ず、すぐに彼も虚勢を張つて、『なにをつ、手前こそ何だつてこんな無茶な駈け方をさらしやあがるんだ？ 眼のくり玉を居酒屋へ抵当かたにでもおいて来やがったのかい？』こう言つてから彼は、先方の馬から引き離そうとして

馬車を後へ戻しにかかったが、どっこいそうは行かないで——いよいよもつ縛れるばかりだった。連銭葦毛の奴は自分の両側へひよっこり姿を現わした新らしい友達を、さも物珍らしげに嗅ぎまわしている。一方、軽馬車に乗っていた婦人連は、恐怖の色を顔に表わしながら、始終の様子を眺めていた。一人は老婆であつたが、もう一人の方は十六七の娘で、金色の髪を小柄こがらな頭に大変手際よく、綺麗に撫でつけていた。その可愛らしいうりざねがお瓜実顔は新らしい玉子のような円味まるみをもち、またちようど生みたての玉子を女中頭が浅黒い手で陽ひに透かして検査する時にキラキラ光る太陽の光線にほんのりとそれが透けて見えるような白さであつた。華きやしや奢しゃな耳もまた同じように暖かい光りを受けてぽつと赤らんで同じよう

に透きとおって見える。おまけに**吃驚**びっくりして軽く開けたままぼんやりしている口つきといい、涙ぐんだ眼もとといい——何もかもがまたなく可愛らしく見えたので、我等の主人公は、馬や馭者たちの間に起こった**悶**もんちやく著などはすっかり他所よそにして、しばらくはうっとり娘に見惚れていた。『後へさがらねえかい、この二ジエゴロドの鴉め!』と先方の馭者が呶鳴った。セリファンは手綱をぐつと後ろへ曳つぱった。先方の馭者も同じようにした。すると馬はお互いに少し後ずさりをしたが、今度は**挽革**ひきがわを踏んづけて、又こんぐらがってしまった。その最中に連銭葦毛の奴は、よほど新らしい友達が気に入ったと見えて、思いがけない運命ではまり**こんだ轍**わだちから、いっかな抜けようとはしないで、その新し

い友達の頸へ自分の鼻面をのつけて、相手の耳へ何やら囁いてい  
るようだったが、恐らく馬鹿げきつたことを喋つたのに違いない、  
先方の馬が絶えず耳を振り動かしていたから。

が、幸か不幸かすぐ近くに村があつたので、早速この騒ぎに百  
姓どもがわんさと集まつて来た。百姓たちにとってはこういつた  
見世物が、ちようどドイツ人にとつての新聞や倶楽部と同様に、  
誠に有難い天の恵みであつた。で、馬車のぐるりには見る見る黒  
山のような人ひと集たりがして、村に残っているのは、老婆や赤ん坊  
だけという有様であつた。挽革がほどかれた。連銭葦毛は鼻面を  
二つ三つぶん殴られて、たじたじと後もどりをした。つまり相思  
の馬なまきが生木を裂くように無理矢理ひき離された訳である。ところ



が折角の友達との間を裂かれて、むかつ腹を立てたのか、それと  
 もただの我儘わがままからか、先方の馬どもは、どんなに馭者が鞭打つ  
 ても、まるで根でも生えたように頑としてその場を動かなかつた。  
 百姓たちは、まるで信じ難いがたほど躍起になった。彼等は先きを争  
 つて、めいめい要らぬおせっかいはした。『おい、アンドリユー  
 シカ、お前、右側の傍馬わきうまを曳っぱれよ。それからミチャイ小父おじ、  
 お前は轅馬なかうまに乗っかりねえ。さあ、乗っかりねえよ、ミチャイ  
 小父！』すると茶いろの顎鬚を生やした、痩せこけて背のひよろ  
 長いミチャイ小父が轅馬の背中へ這いあがったが、その恰好はま  
 るで村の鐘楼しやうろうか、否それよりも、井戸の撥釣瓶はねつるべそっくりだ  
 った。そこで馭者が馬どもをピシピシひっぱいたが、なかなか

どうして、旨くはゆかなかつた。一向ミチャイ小父も役には立たないのだ。『待つた、待つた!』と百姓たちが叫んだ。『ミチャイ小父、お前は傍馬の方へ乗つかりねえ、そうして轅馬にや、ミニヤイ小父を乗つからせるんだよ!』ミニヤイ小父は漆のように真黒な顎鬚を生やした、肩幅の広い百姓で、寒さに凍えた市場じゆうの連中に飲ませるに足るほどの蜜湯スビデニでも沸かせるような、あの途轍もなく大きなサモワールそつくりのどてつ腹をしていたが、彼が喜んで轅馬の背に跨がると、その重みで馬の方が危く地面べたへへたばりそうになつた位だ。『今度は旨くいくぞ。』と百姓たちが叫んだ。『さあ、そいつを思いつきりひつぱたくんだよ、思いつきり! うんと鞭で責めるんだよ、そら、そつちの雲雀毛ひばりげ

のやつをき、——一体どうしやがったんだい、まるで蚊が姥んぼみてえに足を突つぱりやあがつて?』しかし、それでも一向首尾よく行かないし、いくらひつぱたいても何の役にも立たないことが分つたのでミチャイ小父とミニヤイ小父とが轅馬に乗り、傍馬にはアンドリユーシカを乗つけた。だが、とうとう馭者は我慢がならなくなつて、ミチャイ小父もミニヤイ小父も二人とも馬の背から追つぱらつてしまつた。これはまつたく時宜に適した処置で、馬どもはまるで一丁場いっちようばも息もつかずに駈けつけたように、びっしより汗をかいていたのである。彼はちよつと馬を休ませた。するとやがてのことに馬どもはひとりでに歩きだした。この騒ぎのあいだじゆうチチコフは見知らぬ若い娘をじつと見つめていた。彼

は何度も娘に言葉をかけて見ようと思つたのだが、どういふものか旨く行かなかつた。そうこうしているうちに婦人連は立ち去つてしまつて、あのなよらかなおもやさし面差と、なよらかな姿態と共に、可愛らしい娘の顔もいつしか幻のように消えてしまつた。そして又もや後には、街道と、半蓋馬車と、ブリーチカ読者もお馴染の三頭の馬と、セリファンと、チチコフと、ぼうばく茫邈たる界限のでんや田野ががらんとして取り残されたのである。何処であろうが、到るところ、この世の中では、あの冷酷無情な、がさつで惨めな、汚ならしく黴の生えたような下層社会の中でも、或はまた単調で冷淡な、いやに屈に取りすましたような上流社会の間でも、人は必ず一度や二度はまだそれまでに出逢つたこともないような現象に出逢つて、生

涯、夢に見ることもないような感情に胸をときめかせることがあるものだ。さまざまな悲哀が折り重なって我々の生涯をどのように織り成していても、輝かしい喜びの光りがいつかは楽しく照り映えるものだ——それは丁度、絵に描いたような金ピカの馬具をつけた馬に曳かれた馬車が、窓ガラスをキラキラ光らせながら、突然、思いがけもなく、ついぞそれまで荷馬車より他は見かけたこともないような、惨めに荒れ果てた寒村を通り過ぎてゆくようなものだ。百姓たちは口をぽかんと開けて欠伸をしながら、帽子を被るのも忘れて、もう疾とつくにその素晴らしい馬車は通り過ぎて影も形も見えなくなってしまうのに、何時までもぼんやりと突っ立っているのである。丁度それと同じように、あの金髪

の娘も不意に、まったく思いがけもなく、この物語へ姿を現わしたが、また忽ち姿を掻き消してしまったのである。この際、もしもチチコフの代りに二十台の青年がいたとしたなら——それが驃騎兵であれ、学生であれ、乃至は浮世の旅路に踏み出したばかりの若者であれ——とにかく、そうした青年であつたならば、おお神様！ 彼の胸はどんなに昂奮し、感動し、有頂天になつたことであろう！ 必ずや彼は、ぼんやりと遠く眼を見張つたまま、道も忘れ、時間に遅れたらこの先きどんなひどい譴責けんせきに逢うかも忘れ、己れを忘れ、職務を忘れ、世界も、世界にありとあらゆるものをも打ち忘れて、いつまでも氣を失なつたように一つところに立ちつくしたことであろう。

だが、我々の主人公は既に中年ではあり、それに用心深く冷静な性質たちの人間であつた。彼にしても矢張り物思いに沈みはしたけれど、それはより着実な考え方で、決して無分別なことではなく、一面彼の考えには非常にしつかりした根柢こんていさえあつた。『なかなか好い娘つ子だつた！』と彼は煙草入をあけて嗅煙草を一服かいでから、眩やいた。『だが、あの娘の何処が一番いいんだらう？ どうやらあの娘は、ついこの頃どこかの寄宿学校か国立女学院を卒業したばかりらしく、まだどこにも、いわゆる女臭いところ、つまり、女性としての最も不快いやなところがないから好いのだ。あの娘は今のところまだ子供みたいなもので、何もかもが単純で、何でも思つたとおりに喋り、可笑しいままに笑うのだ。あの娘は

まだどんなものにも仕上げることが出来る、玉にもなれば、瓦にもなる——が、恐らく瓦になつてしまふだろう！ まあ、今あの娘を、お袋さんか叔母さんの手へ委まかせて見るがいい。そうすれば、ものの一年もたてば、すっかりあの娘は女のいやなところで一杯になつて、生みの父親でさえ見違える位に變つてしまふだろうから。いつの間にか威張つたり気取つたりすることを覚えこみ、聴き覚えの教訓にしたがつて身を振舞い、誰とどんな話を、どの位したらよいかとか、誰をどんな風に見たらいいかというようなことばかりに工風くふうを凝らして頭を悩ましたり、自分が少しでも余計なことをしやべりはしないかと、しよつちゆう、そんなことが心配になるのだ。そして挙句の果にはすっかり自分でこんぐらが



つてしまい、とどのつまりは一生涯嘘をついてまわるばかりの、  
何ともはや得体の知れぬ代物になってしまふのだ！』ここで彼は  
暫らくのあいだ口を噤つぶんでから、やがてこう言い足した。『だが、  
あれは誰の娘だろう？ 親父はどんな人間かしら？ 金かねもち持で気  
前のいい地主だろうか、それとも 奉ほうしよく職 ちゆうにたんまりと財  
産を拵えたような、親切気のある人間ではなからうか？——それ  
を突きとめられたらいいんだがなあ。だって、仮にあの娘に二十  
万ルーブリも持参金がついてみる、それこそとても素晴らしいお  
膳ぜん立だてじゃないか。どうして、それだけあれば、いわゆる相当な  
人間の幸福がでっちあげられるというもんだ。』この二十万ルー  
ブリという金高が、彼の頭の中で非常に魅惑的な夢を描きだした

ため、先刻、あの馬車のまわりでごたごたしている間に、どうして馭者か馬丁からあの一行がどこの誰だか訊き糺しておかなかつたのだらうと、彼は我れと我が身に腹を立てはじめた位であつた。だが、間もなくソバケーヴィツチの村が見えだしたので、そうした考えは消え失せて、またしても例の一件に心を奪われて行つた。

その村は彼には相当大的なものに思われた。白樺と松との二つの林が、ちようど二つの翼をひろげたように——村の右と左とに、片方は黒々として、片方は明るい色をして伸びていた。その真中のところに、中二階のついた木造の家が見えており、屋根は赤く、壁は鼠いろ、というよりは寧ろ粗むし壁あらかべのまま——ちようど今時、屯田兵とんでんへいの宿舎や、ドイツ人の移民の住居に建てられているよう

な家だ。これを建てるにあたって建築師は、さぞひっきりなしに主人の好みと争ったであろうことが、まざまざと思いやられる。その建築師は形式ばった男で、頻りに鈎シムメトリイ合イいを主張したが、主人の方はただもう便利なことばかりを重んじたものと見え、対称として一方の側にも当然あるべき窓がことごと尽くトふさがれてしまって、その代りに、暗い納戸なんどにでもつけたらしい小さな小窓が一つ切り開けてあるだけというような結果になってしまった。正面の破風はふもやはり、建築師がどんなに苦心しても、家の中央へ持つて来ることが出来なかつた。それというのも、主人が片側の円柱を一本取り除くようにと命じたからで、そのために、四本という設計になつていた円柱が、三本きりになつてしまったのである。庭は、

丈夫な、途方もなく太い木の柵で囲まれていた。この地主は何によらず、ひたすら頑丈にすることばかり心掛けているらしく、厩舎にも、物置にも、台所にも、幾世紀でも保ち<sup>も</sup>そうな、実にどつしりとした、太い丸太が使つてある。村の百姓どもの小屋にしても、まったく素晴らしい骨組で、壁に煉瓦を使つたり彫刻の飾りをつけたり、その他くだらない工風が何一つしてない代りに、すべてが頑固<sup>いってんぱり</sup>一点張りに仕上げてある。井戸<sup>いどげた</sup>桁にまで水車か船にでもなければ使わないような、がっしりした檜<sup>かしざい</sup>材が用いてあつた。要するに何を見ても実に丈夫そうで、決してビクともしないような、頑固で不細工な仕組になつていた。ポーチへ馬車を乗りつけながら、チチコフは、殆んど同時にちらと二つの顔が窓から

覗いたのに気がついた——頭巾帽をかぶった、胡瓜のように細長い女の顔と、モルダヴィヤ南瓜かぼちゃのようにずんぐりした男の顔とだ。モルダヴィヤ南瓜というやつは、瓢箪ひょうたんとも呼ばれて、ロシアではこれでバラライカを拵らえる。二弦にげんの手軽なバラライカで、その音も床しいゆか爪弾つまびきを聴きを集まる、胸や首筋くびすじの白い娘たちに胸めくばせをしたり、口笛を吹いたりする、あの二十歳前後のおしゃれで、剽軽ひょうきんな若者たちの装飾かざりでもあり、慰めでもある。さて二つの顔は、チラと覗いたと思つたら、すぐ引つこんでしまった。ポーチへ、青いたてえり豎襟たてえりのついた灰色の上衣きを著た従僕が出て来て、チチコフを玄関へ招じ入れたが、既にそこには主人が出迎えていた。彼は客の姿を見ると、いきなり『どうぞ！』と言って、

チチコフを奥へ連れて行つた。

チチコフが横眼よこめでチラと眺めると、今度はソバケーヴィツチの恰好が中ぐらいの熊そつくりに見えた。著きている燕尾服が熊の毛色そのまま、袖も長ければズボンも長く、おまけに鰐わにあし足でドタバタと外輪に歩いて始終、他人ひとの足を踏んづけるのだから、いよいよ熊そつくりということになる。顔も火のような赧あから顔で、五カペーカ銅貨のような色をしている。尤もつともこういう顔は世間にざらにあつて、これを仕上げるのに造物主は大して苦心も払わず、やすり鑢きりだの錐だのといったような小道具は一つも使わないで、ただおおぎつぱに刻んだだけだ。斧をチヨンと入れると鼻が出来、もう一つチヨンとやると唇が出来る。そこで大きな丸まるのみ鑿で眼をこじ

あけ、細かい仕上げなどは一切省いて、『生命あれ!』と言うな  
り、この世の中へおっぽりだした訳である。ソバケーヴィツチの  
顔は全くそういった具合に、恐ろしく頑丈で荒削りに出来ていた。  
それも胴の上に支えているというよりは寧ろむしぶらさげているとい  
った方がいいくらいだ。然も猪頸いくびで全然どちらへも曲らない。ど  
ちらへも曲らないから、自然、話し相手の顔は滅多に見ないで、  
いつも暖炉の端か扉口へ眼をやっているのだ。チチコフは食堂を  
通りすぎながら、もう一度チラと横眼で相手を見やった。熊だ!  
まったく熊だ! 成程こうまで不思議に似ているのも無理はな  
い——名前からして\*ミハイル・セミヨーノヴィツチというの  
だから。チチコフはこの男が他人の足をよく踏んづける癖のある

ことを知っていたので、出来るだけ自分の足許に気をつけて、なるべく相手を先きに立たせるようにした。主人は自分でも、どうやらそういう自分の悪い癖を知っていたらしく、さっそく『あなたの足でも踏んづけましたかね?』と訊ねた。しかし、チチコフはその心遣こころづかいを感謝して、まだ別段そんな気配はないと答えた。

客間へ入るなりソバケーヴィツチは安楽椅子を指さして、また『どうぞ!』と言った。チチコフは腰をおろすと、四方の壁と、壁に懸けてある絵とを眺めた。その絵はどれもこれも、昔の勇士や、ギリシアの将帥しょうすいたちの全身像の銅版画ばかりであった。真赤なズボンに軍服をまとい、鼻に眼鏡を掛けている\*2マヴロ



コルダートだの、\*3ミアウリスだの、\*4カナリスだの。こ  
うした英雄たちはどれもこれも、ぞつとするほど太い腿ももをして、  
前代未聞の素晴らしく大きな口髭を生やしている。こういう堂々  
たるギリシア人のあいだに混つて、一体どういう訳で、また何の  
ために此処にあるのか知らないが、ひよろひよろに痩せた\*5バ  
グラチオン將軍の像に、小さな旗と大砲のずから図柄を下につけたのが、  
至つて細い額縁がくぶちに入れてある。その次ぎには又、ギリシアの女じ  
傑よけつボベリーナの像が懸つているが、その片方の足だけでも、今  
どきの客間にうようよしている伊達者の胴体よりはずっと太いく  
らいに思われる。主人は自分が頑丈に出来ているものだから、部  
屋の中まで同じように頑丈な人間の像で飾ろうと思ひ立つたもの

らしい。ボベリーナのそばの、すぐ窓際には、鳥籠が一つ懸つていて、黒っぽい地に白い斑点のある鶉つぐみが一羽その中からのぞいていたが、それがまた、ソバケーヴィツチによく似ていた。客と主人が口を噤んで二分とは経たないところへ、不意に扉があいて主婦が客間へ入って来た。非常に背の高い婦人で、家で染め直したらしいリボンのついた頭巾帽をかぶっていた。彼女は棕櫚しゅろの木のようになつと首をたてたまま、しずしずと入って来た。

「家内のフェオドゥーリヤ・イワーノヴナです。」と、ソバケーヴィツチが言った。

チチコフはフェオドゥーリヤ・イワーノヴナに近づいて、彼女が殆んど相手の唇へ押しつけるようにした手に接吻したが、その

刹那、彼はふと、その手が胡瓜漬きゅうりづけくさいことに気がついた。

「なあ、お前に紹介ひきあわせておくが、」と、ソバケーヴィッチは言葉をつづけた。「この方がパーウエル・イワーノヴィッチ・チチコフさんだ！ 知事や郵便局長のところでお近ちかづき附つきになった人だよ。」

フェオドウーリヤ・イワーノヴナは、女王に扮した女優の仕草そつくりそつくりに、ちよつと首を動かしただけで、やはり『どうぞ！』と言って椅子をすすめた。それから自分も長椅子に腰をおろすと、モスリンの肩掛かたかけをぎゅつと緊しめ直しただけで、それきり眼まばたき一つしなければ眉毛ひとすじ動かさなかつた。

チチコフは再び眼をあげて、またしても太い腿と恐ろしく長い

口髭を持ったカナリスや、ボベリーナや、籠の中の鶇つぐみを眺めた。

殆んど五分ぐらいのあいだ、三人ともじつと沈黙を守っていた。ただ鶇が、鳥籠の底にまいてある穀粒を拾う嘴音がコツコツと聞こえるだけであつた。チチコフはもう一度部屋と部屋の中にある物を眺めやった——何もかもが恐ろしく頑固で不細工に出来て、それが奇妙とこの家の主人にしっくり似ていた。客間の隅に胡桃材のずんぐりした書物卓デスクが据えてあるが、不態ぶざまな四本脚で立っている恰好がまったく熊そっくりだ。テーブルも、安楽椅子も、小椅子も——みんなひどく重つ苦しく落着きのない容子ようすをしている。要するにありとあらゆる物が、椅子の一つ一つまでが、まるで『おれもソバケーヴィツチなんだぞ!』とか、『おれもソバケ

「ヴィツチの親類なんだ！」とでも言っているようだ。

「私たちは裁判所長のイワン・グリゴリエヴィツチのところでああなたのお噂をしたんですよ。」とチチコフは誰ひとり話を始めようとする様子がないので、とうとう自分の方から口をきった。

「先週の木曜でしたがね。あの晩はとても愉快でしたよ。」

「左様さようさ、あん時は所長の家うちへ行きませなんだわい。」とソバケーヴィツチが答えた。

「あれはなかなか立派な人ですねえ！」

「誰がね？」とソバケーヴィツチは、暖炉の端を見つめながら言  
つた。

「裁判所長ですよ。」

「ふうん、あんたにはそんな風に見えるかも知れないが、あいつはフリー・メーソンに過ぎないんでね、まずこの世に二人とはない馬鹿野郎でしようて。」

チチコフはこのような辛辣しんらつな批評に聊いささかたじたじとなつたが、すぐにまた立ち直つて、こう言葉をついだ。「勿論、めいめい人間には弱点がありますからね。その代り、あの知事は実に勝れた人物すぐじゃありませんか！」

「知事が勝れた人物だつてね？」

「ええ、そうじゃありませんか？」

「あいつは世界一の強盗でさあ！」

「えっ、知事が強盗ですつて！」チチコフはそう言ったきり、ど

うして県知事が強盗の仲間へ入れられてしまったのか、さっぱり訳が分らなかつた。「正直なところ、どうもそんな風には思われないんですがねえ。」と彼はつづけた。「私に言わせて頂けば、あの方の振舞いには全然そんな様子が見えませんよ。いや、それどころか、まるで反対に、ずいぶん優しいところがあるじゃありませんか。」そう言つて彼は、知事が手ずから刺繍をした財布などを証拠にあげて、愛想のいい彼の顔つきをしきりに褒めそやした。

「あの面つらからして強盗面つらでさあ！」とソバケーヴィツチが言った。「あいつに出刃でばでも持たせて街道筋へおつ放してみなされ、すぐに人殺しをやるから。一カペーカでも奪とるために平気で人を殺し

ますからね！ あいつと副知事の野郎とは、\*6ゴグとマゴグみたいない相棒ですわい。」

いや、<sup>やつこ</sup>奴さん、あの連中とは仲が悪いんだな。 とチチコフは

肚の中で考えた。 それじゃあ一つ、警察部長を持ち出してやろう。あの男とは仲がよさそうだから。 —— 「それはともかくとして、私は、」と彼が言った。「実のところ、警察部長が一番好きなんですよ。いかにもあの人は気性がさっぱりしていて、ざつくばらんですからね。正直なところが顔で分りますよ。」

「悪党でさあ！」とソバケーヴィツチは、ひどく冷やかに言つてのけた。「あいつは人を売りもすれば<sup>だま</sup>瞞しもする、それでいて、あんた方と一緒に飯まで食いおるのじゃ。わしには、あいつらの



ことがちやんと分つとる。あいつらはどいつもこいつもみんな悪党ばかりですよ。あの市じゆうまちが悪党で一杯なんでな、悪党が悪党におんぶをして、悪党を追っかけ廻してうせるのですわい。どいつもこいつもキリストを売る奴ばかりでな。あの中で、どうにか人間らしいのは検事ひとりだが、あれだって本当を言やあ、豚ですよ。」

こんな風な、簡単ながら、なかなか穿った人物評を聞かされると、流石のチチコフももう他の役人を幾ら持ち出しても駄目だということが分り、それにソバケーヴィツチは他人ひとのことを好く言うのが嫌いなんだと気がついた。

「ねえ、あなた、お食事に参りましょうよ。」と、ソバケーヴィ

ツチに向つて細君が言った。

「じゃ、どうぞ！」とソバケーヴィツチが言った。そこで前ザクース

菜カの出ているテーブルへ近よつて客と主人とが慣例どおりウオ

ツカを一杯ずつ飲んでから、都鄙とひの別なくロシアの津々浦々でや

るようにいろんな塩物や或る種の刺戟性の珍味で口直しをすると、

一同はぞろぞろと食堂へ向つたが、先頭に立つた主婦は、まるで

するすると泳いでゆく鷺鳥がちようのようだった。小さな食卓に四人前

の食器が並べてあつた。間もなく四人目の席へ姿を現わしたのは

——既婚の婦人とも老嬢ともつかず、そうかといつて親戚の女と

も家政婦とも、乃至はただの居候とも、確かなことはちよつと言

えないが、——ともかく頭巾帽は被らないで、斑まだら模様の肩掛を

した、年の頃三十前後の婦人であつた。よく世間には、それ自体として存在するのではなく、汚点しみか斑点のように他人に附随して生活している人間があるものだ。そう言う連中は、いつも同じ席を占め、いつも同じ恰好をしているから、殆んど家具のように見み做なされて、こういう手合いは生まれてこの方、一口も物を言つた例しもないように思われるが、女中部屋か物置へでも行つて見ようものなら——それこそ豈図らんやだ！

「うん、きょうの玉菜汁シチイはなかなか上出来だ。」ソバケーヴイツチは玉菜汁シチイを一匙すすつて、そう言いながら大皿から、玉菜汁シチイは附きものの、羊の胃袋へ蕎麦の粥や脳味噌や足の肉を詰めた

ニヤーニヤ という料理の大きな一切れを取つた。「こんなニ

ヤーニヤは、「と彼はチチコフの方を向いて、言葉をつづけた。

「とてもあの市まちじや食えませんぜ。あすこじやあ、まったく何を食わせられるか分つたもんじやありませんからね！」

「しかし知事のところでは、なかなか凝つたものを出しますよ。」とチチコフが言つた。

「ところが、あれを何で拵らえるか御存じですかね？　それが分つたら、とても咽喉は通りやしませんぜ。」

「さあ、その拵らえ方は存じませんから、そういうことは何とも私には申されませんが、しかし豚のカツレツとポイルド・フィッシュは素敵でしたよ。」

「そんな風に思えただけですよ。あいつらが市場で何を仕入れる

か、わしはちやんと知っておる。あの碌でなしの料理人めがフランス人に教わりやあがつてね、猫を買ってきて、そいつの皮を剥いで兎の代りに食卓へ出しやあがるのさ。」

「あれまあ、なんて気味の悪いこと仰っしゃるのです！」と、ソバケーヴィツチの細君が言った。

「そりやお前、仕方がないよ！ あいつらの家では、そうやってゐるんだもの。おれが悪いのじゃないさ、あいつらの家ではみんなそんなことをしてやがるんだからなあ。何によらず、あまり物が出るちゆうと、家のアクーリ力だったら、さつさと、尾籠な話だが、溜桶ためおけへ捨ててしまうような物でも、あいつらはスープの中へ入れるんだ、スープへだよ！ スープへそんなものを入れや

がるんだ！」

「あなたは、お食事の時に限って、きつと屹度そんな話をなさるのねえ。  
。」と、ソバケーヴィツチの細君がまた反対した。

「なんの、お前、」とソバケーヴィツチが言った。「おれがもし、自分でそんなことをしたならだけれど、ちやんとお前にそう言うておくが、おれは決してあんな穢ならしいものは食わないからね。いくら砂糖でまぶしてあつても、蛙なんぞおれは口へ入れないよ。牡蠣なんてものにも、手を出さないぞ、牡蠣が一体どんな恰好をしたものか、ちやんとわしは知つとるからな。さあ、この羊肉をあがつて下さい。」と、彼はチチコフの方を向いて言葉をつづけた。「これは羊の肋肉ばらにくにお粥を添えたものですよ。あの先生が

たの台所で、市場に四日も店晒しになってたような羊の肉で拵らえるフリカツセーなぞたあ物が違いますからね。あんなものを考え出したのは、みんなドイツやフランスの医者どもでな。あんなものを考え出しおった奴は、絞<sup>り</sup>首にしても飽き足りないと思えますわい。減食療法なんてことを発明してからに、腹を空<sup>す</sup>かして病気をなおすんだとき！ あれあね、ドイツ人という奴は自分が繊<sup>ひよわ</sup>弱いもんだから、ロシア人の胃の腑もそれで片づくものと思いきんでいくさるのでさ！ なあに、あれあみんな嘘ですよ、いい加減の思いつきで、あんなことはみんな……」こう言いかけて、ソバケーヴィツチは腹立たしそうに頭<sup>かぶり</sup>さえふつた。「なんぞといえ、文明だ文明だとぬかしやあがるが、文明なんて……ペエツ

だ！ もつと他の言葉で言いたいところだが、食事ちゆうだから控えておきます。だが、わしのとこじやあ、そうはしない。わしのとこじやあ、豚なら豚をまるごと食卓へ出す、羊なら羊で、まるごと出すし、鷺鳥なら鷺鳥で、まるごと出します！ わしはたとえ二皿きりでも構わないから、思う存分、鱧たらふく腹くくいたい方でしてな。」なるほどソバケーヴィツチは事実でそれを証明した。彼は羊の肋肉を半分、自分の皿へぶちまけると、それをすっかり食ってしまった、最後の骨の一本までがりがりやって、きれいに平らげてしまった。

なるほど、とチチコフは思った。こいつは言うだけのこと  
はあるわい。



「わしのとこじやあ、そうはしませんよ。」と、ソバケーヴィツチはナプキンで手を拭きながら言った。「わしのとこじやあ、あのプリューシキンのとこみたいな真似はしませんよ。あの男は農奴を八百人も持ってやがる癖に、わしがとこの牧場番より劣った暮らしをして、実にひどいものを食ってますぜ。」

「そのプリューシキンって、どういう人ですか？」とチチコフが訊ねた。

「悪党でさ。」と、ソバケーヴィツチは答えた。「とても、想像も出来ないくらいけちんぼの吝嗇漢けちんぼでな。監獄の中の懲役人だつて、あれよりやまし優ましな暮らしをしていませあね。あいつの家じやあ、みんなを飢え死にさせてしまったのですからね。」

「本当ですか？」とチチコフは乗り気になって、「実際その人のところでは、非常に沢山の<sup>ひとしに</sup>人が死があつたと仰つしやるんですね？」

「まるで蠅のようにバタバタと死ぬんでさあ。」

「蠅のようですって？　で、なんですか、その人の村まではお宅からよほどありますか？」

「五<sup>ヴェルスト</sup>露<sup>ヴェルスト</sup>里はありますなあ。」

「五<sup>ヴェルスト</sup>露<sup>ヴェルスト</sup>里！」とチチコフは思わず口走つたが、胸が少しドキするようになつて思つた。「で、お宅の門を出てから、右へ行くのでしょうか、それとも左へ行くのでしょうか？」

「あんな犬のところへなんぞ行く道は、知らない方が身のためで

すぜ！」とソバケーヴィツチが言った。「あんな奴の家へ行くく  
らいなら、どこか曖昧あいまい宿やどへでも行つた方が、まだ言訳がたちま  
すからね。」

「いや、お訊ねしたのは別にその……ただ、いろんな処をちよい  
ちよい知つておきたいのが手前の性分ですてね。」とチチコフは、  
それに対して弁解した。

羊の肋肉に次いで凝乳饅頭が出たが、こいつは一つ一つが皿よ  
りもずっと大きかった。その次ぎには犢ほども大きさのある七面  
鳥が出た。これには、玉子だの、米だの、肝臓だの、そのほか訳  
の分らない、いろんな、さぞかし胃にもたれそうな代物が詰めて  
あつた。それで午餐はおしまいになつたが、食卓をはなれた時、

チチコフは四五貫も目方がふえたように思った。客間へ戻ると、そこには何時の間にか小皿に盛ったジャムが出ていた——梨とも、梅とも、他の果物とも見当のつかないジャムだったが、それにはもう、主人も客も手を出さなかった。主婦は、それを他の小皿へ取り分けるために部屋を出て行った。その隙を狙って、チチコフはソバケーヴィツチの方へ向き直った。ソバケーヴィツチは、あれだけ鱧腹つめこんだ後のこととて、安楽椅子に凭りかかったまま、時々ひくい呻き声を漏らしながら、口で何か訳の分らない音を立てるたんびに十字を切っては、その手で口を押え押えしていた。チチコフは彼に向つて、『ちよつと御相談いたしたいことがあるんですが。』と言つた。

「まだこんなジャムがありましたよ。」と、主婦が小皿を持って入って来ながら言った。「大根を蜂蜜で煮たのでございますがね。」

「それは、また後で食べるよ！」とソバケーヴィツチが答えた。「お前は自分の部屋へ行っていないな。わしはパーウエル・イワーノヴィツチと、上衣をぬいで一休みするからね！」

主婦は、ではすぐに羽根蒲団と枕を持って来させましようと言ったが、主人が『いや、それには及ばん、安楽椅子でちよつと休むのだから』と言ったので、そのまま部屋を出て行った。

ソバケーヴィツチは、ちよつと首を俯むけて、一体どんな用件かと、聴耳を立てた。

チチコフは、ひどく遠まわしに話を切り出して、まずロシア帝国の全般的な問題にちよつと触れ、その国土の廣大無辺なことを褒めそやして、いにし古えのローマ帝国でもこれほど大きくはなかつたから外国人が驚異の眼をみは瞠るのも無理からぬことだなどと言つた……。(ソバケーヴィツチは首を垂れたまま、じつと聴いていた。)

さて、この比類なき、栄ある帝国の現行法によれば、一旦戸籍簿に登録された農奴は、たとえこの世を去つても、次ぎの人口調査が行われるまでは矢張り生存者なみに取扱われるが、これは官庁に、無益なつまらない調査事項をあまり過大に負担せしめなためと、事務の煩雑を避けんがために他ならない。そうでなくとも、国家機関はすでに煩雑を極めているのだから……。(ソバ

ケーヴィツチは首を垂れて、じつと聴いていた。しかし、その便法べんぽうがどんなに結構なことであるにしても、生きたもの同様に租税を払わされる以上、多くの地主にとつてはかなり迷惑である。そこで自分は、貴下に対して個人的な敬意を感じるところから、その、まったく並々でない重荷を、幾分でもこの身に引き受けたく思っているのだと言った。チチコフは肝腎の目的物については極めて慎重な言葉を使って、死んだ農奴などとは決して呼ばないで、ただこの世にいないものと言った。

ソバケーヴィツチは矢張り、首を垂れたまま、じつと聴いていたが、その顔には表情らしいものは何ひとつ浮かんでいなかった。まるでこの男の軀からだには魂が全然宿っていないのか、それとも魂は

あつても、それがあるべきところにはなくて、あの不死身の\*7  
カシチエイの魂みたいに、どこかの山の向うで、厚い殻の中へで  
も閉じこめられているため、その中でどんなにあばれても表へは  
何の揺ぎも伝わって来ないのではないかと思われた。

「そんな訳なんですが?……」とチチコフは、流石にわくわくし  
ながら返答を待った。

「あんたは死んだ農奴が御入用なんですかね?」とソバケーヴィツ  
チは、まるで穀物の話でもするように、少しも驚いた顔は見せな  
いで、至極あつさりと言つてのけた。

「そうです。」とチチコフは答えたが、言葉を柔らげるために、  
「なに、この世にいない農奴やつをね」と言い足した。



「それあ、ありますよ。ない筈はありませんさ……。」とソバケ  
ーヴィツチが言った。

「もしおありでしたら、なんでしようね、きつと喜んで厄介ばら  
いをなさいましょうね？」

「よろしい、じゃ売りましょう。」とソバケーヴィツチは、今度  
は少し首をあげて言ったが、ハハアこいつめ、確かにこれで一儲  
けする気だなと、相手の肚を見抜いていた。

ちえつ、くそ！ とチチコフは心の中で忌々しく思った。こ  
ん畜生め、おれがまだ買うなんて、そこで今度は口に出して、

「では、仮りに値段はどれくらいで？ もっと尤もこんな代物に……値  
段のなんのというのは変ですがね……。」

「あんたと余計な掛引かけひきをするまでのことはないから、あつさり言いますが、一人あたり百ルーブリですな。」とソバケーヴィツチが言った。

「えっ、百ルーブリ！」と叫ぶなり、チチコフは口をポカンとあけて、相手の顔をまじまじと見つめたが、一体それは自分が聞き間違えたものか、それとも、生まれつきソバケーヴィツチは口くちお重もで舌廻りが悪いため、何か飛んでもない言い損いをしたものか、ちよつと見当がつかなかった。

「どうですかね、それでは高価たかいとても言いなさるんで？」と言つてソバケーヴィツチは、やがてこう附け加えた。「じゃあ、あんたの附値つけねはどの位なんで？」

「私の附値ですって！　どうもこりや、二人とも何か感違いをし  
ているんじゃないでしょうかね、それともお互いによく話が会得のみこ  
めないで、抑そもそも々その品物が何だったか、うっかり忘れているん  
じやありませんかね。じゃあ一つ私の方から誠心誠意のところを  
申し上げましょう。一人あたり八十カペーカ——これがもう、精  
一杯ぎりぎりの値段ですよ！」

「とんでもない、八十カペーカなんて。」

「そんなこと仰つしやつても、私の考えでは、どうもそれ以上は  
出せませんよ。」

「だが、草鞋わらじを売るのがたあ訳が違いますぜ。」

「ええ、ですがね、やはり人間とも違うつてことに御異存はない

でしよう。」

「じゃあ、あなたは、ちゃんと戸籍に載ってる農奴を、二十カペーカやそこいらで売る馬鹿があると思つてなさるのかね？」

「だがちよつと待つて下さい。あなたはどうしてそれを戸籍に載つてる農奴だなんて仰つしやるんですか？ その肝腎の農奴は疾とうの昔に死んでしまつて、もう影も形もない奴のことですよ。しかし、そんなことをこれ以上かれこれ詮議せんぎだてしたつて詰まらないから、じゃあ奮ふん発ぱつして一ルーブリ半ずつで買ひましょう。それ以上は出せませんよ。」

「あなたは、よくもそんな値をつけてしやあしやあしていられますねえ！ そんな掛引は止して、まともな値段をつけたらどうで

す！」

「駄目ですよ、ミハイル・セミヨノヴィツチ、まったく正直なところ駄目です。もうそれ以上は出せないといったら出せないんですからね。」チチコフはそう言ったものの、それでも、もう五十カペーカだけ奮発した。

「どうしてあんたはそうけちけちなさるのです？」と、ソバケーヴィツチが言った。「まったく、こりや高価たかありませんぜ。ほかの悪党だったら、あんたを誤魔化して、農奴どころか、くだらない代物を掴ませるところだが、わしとこのは、まるで胡桃うでみたいにがっしりした、選りぬきのやつばかりなんだからね。伎倆うでのしつかりした職人か、さもなければ丈夫な百姓ばかりでな。よう

がすかね、例えばあの馬車大工のミヘーエフじやて！ あいつは立派な弾機ばねつきの馬車より他にやあ拵らえなかつただ。モスクワ出来のによくあるような、一時間でぶっこわれるような代物とは違つて、とてもがっちりしたもので……ちやんと自分で革も張れば、漆も塗つたものでな！」

そこでチチコフは口を開いて、だがそのミヘーエフだつてもう疾うの昔にこの世を去つているのだと注意しようと思つたが、ソバケーヴィツチは、いわゆる自分の弁舌につりこまれて、滔々とまくし立てたものだ。

「それから大工のプローブカ・ステパンはどうだ！ わしはこの首を賭けてもいいが、あんな好い百姓は滅多にあるもんじやない。

大した力ちからもち持ちでな！ あいつを近衛兵このえへいにでもしたら、どんなえらい出世をしたか分つたものじゃないて——なんしろ背長が、六尺五寸一分からあつたんだからね！」

チチコフはまた、そのプローブカも矢張りこの世にはもういないのだと注意しようと思つたが、ソバケーヴィツチがすっかり調子に乗つて、無我夢中にまくしたてるので、黙つて聞いているより他はなかつた。

「煉瓦屋のミルーシキン！ あいつは、どんな家の暖炉だつて拵らえたものでしてね。靴屋のマクシム・テリヤートニコフはといえば、大針でもつてシクシクつとやつたかと思うと、もう素晴らしい長靴が出来あがつてるのです。それでいて酒は一滴も飲まな

いのですからね。それからエレメイ・ソロコプロヒョン！こいつ一人でも、他の奴をみんな合わせたぐらいの値打がありません。モスクワで商売あきなをしていましたがね、免役税オブロークだけでも年に五百ルーブリから入れておりましたからな。こういう粒選りの百姓ばかりですぜ！ どうしてどうして、プリューシキンなんぞの売りつける代物たあ訳が違いますかね。」

「ですがね、」とチチコフは、いつが果しとも知れない、その凄まじい弁口の勢いに辟易しながら、とうとう口を入れた。「どうしてあなたは、そんなものの特長を一々かぞえあげなさるんですか？ だって、そんなことをしたって今さら何の意味もないじゃないませんか、みんなもう死んでしまってますからね。諺に



も、死人<sup>しびと</sup>じや垣根にもならないというじやありませんか。」

「それあ、確かに死んでいますよ。」ソバケーヴィツチは、なるほど考えてみればその農奴たちはもう死んでいるのだと気がついたらしく、そう答えたが、すぐにこう付け加えた。「ですがね、現に生きている奴らにしたところが何です？ あんなものが一体なんですか？——人間じやなくて、蠅<sup>おと</sup>ですからね。」

「しかしそれでもまだ生きていますよ。だが、こちらはまるで空<sup>ゆめ</sup>みたいなものですからね。」

「いんにや、空<sup>ゆめ</sup>想<sup>ゆめ</sup>じやありませんぞ！ わしはそのミヘーエフツて奴がどんな人間だったかお話ししますが、鐘太鼓で捜したつてあんな奴あ見つかりっこありませんよ。とてもこの部屋へなんぞ

入りっこないような、どえらい図体の奴でしたからね。どうして、  
どうして、これあ空想ゆめどころじゃありませんわい！ あいつの肩  
の糞力ときたら、馬だつて敵いつこない位でしたぜ。あんたが何  
処かほかであんな奴を見つけないすつたら、お目にかかりたいもん  
ですわい！」こう、しまいにはもう壁に懸っているバグラチオン  
と\*8コロコトウローニの肖像画の方を向いて喋っていた。それ  
はよく、二人の人間が盛んに話し合っている最中に、その一方が、  
どういう訳が不意に当の話相手から眼をはなして、偶然そこへ入  
つて来た第三者に目をうつす、それが全く赤の他人で、そんな人  
間からは、何の返答も、意見も、確認も得られないことが分つて  
いながら、その癖その人物を仲裁に引き込もうとでもするように、

じつとその顔を見つめるのと同じで、何にも知らぬ第三者はすっかり面喰らつて、自分が何ひとつ聴いてもいない問題にいい加減のお座なりでも答えたものか、それともその場の礼儀だけに、黙つて暫らく立っていてから、折を見て逃げ出したものかと、立ち迷うものである。

「しかし、二ルーブリ以上は、どうしても出せませんよ。」とチコフが言った。

「それじゃあね、わしがひどく欲ばつてばかりいて、少しもあなたに譲歩をしないように思われるのも辛いから、それじゃあひとつ、七十五ルーブリずつにしておきましょう——もつと尤も、銀行紙幣でなきやあ御免ですがね——こりやもう、まったくお馴染甲斐なじみがいいに

するだけですぜ！」

この野郎、一体どうしやがる気だろう？ とチチコフは心の中  
で思った。おれを馬鹿にしてやがるのかな？ それから今度は  
口に出してこう附け加えた。「まったくどうも変な話ですねぇ。  
何だか我々はお芝居か喜劇でもやってるようじゃありませんか。  
それでも思わなきや、納得が出来ませんよ……。あなたは物の分  
つた方で、立派に教育のある方としか思われません。ところで、  
これは全くつまらない物で——ふ、ふ！ 一体どれだけ値打があ  
るといふんです！ 誰がこんなものを欲しがると仰っしやるん  
です？」

「ところが、それをあんたは買いなさるといふのだからね、して

見れば、まんざら見くびつたものでもなさそうですわい。」

こう言われるとチチコフは唇を噛むばかりで、ハタと言句にまつてしまった。しようことなしに彼は自分の内輪の話などを持ち出しかけたが、ソバケーヴィツチはにべもなくこう答えたものだ。

「何もあんたの身の上話なんぞ聴く必要はありませんよ。わしはひと他人の内輪のことにくちばし喙を容れるのが嫌いにして——それはあんな御自身の問題ですからなあ。あんなの方で農奴が欲しいと仰つしやるから、わしは売ろうというまでで、これを買わなかったら後で後悔しますぜ。」

「二ルーブリならね。」とチチコフが言った。

「まったく、どうも！ 諺にある馬鹿の一つ覚えってやつで、あんたは二ルーブリといいだしたが最後、同じことばかり繰り返していなさる。もう少ししまともな値をつけて貰いましょうや！」

ふん、ほんとに忌々しいつたらない！ とチチコフは心の中で思った。えい、もう五十カペーカだけ増してやれえ、犬にもお愛嬌だ！ —— 「じゃ、仕方がない、五十カペーカだけ奮発しましょう。」

「ふん、じゃあ、わしもぎりぎり決着のところ、五十ルーブリにしときましよう！ これじゃあ、まったく損ですがね。何処へ行ったって、こんないい農奴は、これより安く買えつこありませんぜ！」

どこまで吝んぼだろう！ とチチコフは肚の中で呟やいたが、その後を少し忌々しそうに、こう口に出して言った。「一体こりやどうしたんです？……さも重大なことみたいに仰っしやつてさ！ 他<sup>ほか</sup>処<sup>か</sup>でだったら無償<sup>ただ</sup>でもくれますよ。それどころか、一刻も早く厄介ばらいをしようと思つて、誰だつて二つ返事で手離しますよ。こんなものを後生大事にとつておいて、おまけに税金まで払おうつてのは、よくよくのおたんちんでさあね！」

「だがこれを一体どういう買物だと思いなさる——ここだけの内密な話ですが——これはおおつぴらに出来る取引じゃありませんぜ。わしか、それとも誰か他の奴が口でも割つてみなされ、それこそ信用が落ちてしまつて、もうどんな契約も結べなくなれば、

うまい取引にも手を出すことが出来なくなつてしましますからね。  
」

ちえつ、あんな当てこすりを言やあがる、悪党め！　こうチチ  
コフは思ったが、さも落着きはらつたような顔で、すぐに答えた。  
「あなたはこういうお心算つもりか存じませんが、私はあなたがお考え  
になるように、何か必要があつて買い入れる訳じゃないんで、た  
だその……自分の気紛れいさまにやつてるだけですからね。二ルーブリ  
半でおいやなら、お暇いとましますよ。」

こいつは、なかなか一筋縄じゃいかんぞ！　とソバケーヴィツ  
チも思った。「じゃあ、仕方がない、三十ルーブリずつにしとき  
ましょう、それでひとつ買って下さい！」



「いや、どうもあまりお売りになりたくなさそうですね。じゃあいとまお暇します！」

「まあ、そう言わないで、ちよつと待って下さい！」ソバケエヴ  
イツチは相手の手を放そうとしないで、こう言ったが、その途端  
に相手の足をいやというほど踏んづけた。それというのも我等の  
主人公がいうつかりしていたからで、——その罰で彼は、アツ  
と悲鳴をあげて片足で跳びあがらなければならなかった。

「これあどうも、御免なさい！ 飛んだ失礼をしましたようで。  
どうかまあ、ここへお掛けになって！ さあどうぞ！」そう言っ  
て彼はチチコフを安楽椅子に掛けさせたが、その手際は、まるで  
よく馴らされた熊がとんぼがえり翻筋斗を打ったり、『ミーシャ、女が蒸風

呂へ入つてる真似をして御覧!』とか、『ミーシャ、今度は子供が豆を盗む真似をして御覧!』などと言われて、いろんな芸当をするのによく似ていた。

「これじゃあ、まったく、無駄に時間を潰すばかりですよ。私は急いでるんですからね。」

「とにかく、もうちよつと待つて下さい。あんたに好いことを一つお話ししますからね。」そういうとソバケーヴィツチは相手の傍へにじりより、その耳へ口を寄せて、さも秘密らしくソツとこゝろ囁やいた。「どうです、一角かどじゃあ?」

「と仰つしやると、二十五ルーブリですか? 駄目、駄目、駄目! 一角の四半分だつて出せませんよ。あれより上は一カペーカ

だつて増しませんよ。」

ソバケーヴィツチは口を噤んだ、チチコフも黙りこんだ。二分間ばかり沈黙がつづいた。鷺鼻のバグラチオンが壁の上からじつとこの取引を見まもっていた。

「じゃあ、ぎりぎりのところ、幾ら出せるのです？」と、とうとうソバケーヴィツチが口を切った。

「二ルーブリ半。」

「まったく、そんな無茶な値つてあるもんですかい。じゃ、せめて三ルーブリだして下さい！」

「出せませんよ。」

「どうも、あんたにかかっちゃしかたがない、じゃそうしときま

しよう！ これじゃあ損だけれど、人を悦ばさずにはおられないという、まるで犬みたいな根性でしてね。ところで、万事正式の手續を踏むために、公正証書を作ることになりますかね？」

「勿論ですとも。」

「なるほど、そうだろうと思つてね。では一つ、市まちへ出かけなきやありませんなあ。」

こういうことに話がついた。そこで二人は、翌る日市まちへ出むいて売買登記の手續をすることにした。チチコフは死んだ農奴の名簿が欲しいと言つた。ソバケーヴィツチは二つ返事でさつそく書デ物卓スクへ近よると、自分の手で名簿の作成に取りかかったが、名前を書くだけではなく、一人々々の秀れた特長まで一々記載したも

のである。

チチコフは何もすることがないので、後ろに突つ立つたまま、相手のだだっぴろいからだ軀を隅から隅までしげしげと眺めていた。ずんぐりした\*9ウヤトカ馬の背中みたいにだだっぴろい背中や、歩道に立ててある鑄鉄の柱にそっくりの脚を見ると、彼は心のうちでこう叫ばずにはいられなかつた。まったく大したからだ軀を授かつたものだ！ これこそ、よくいう、裁ち方は拙いが縫いはしつかりしてるってやつだ！……そもそも生まれつきからこんな熊みたいな恰好をしているのか、それとも、こんな辺鄙な田舎暮らしをしていたので、すっかり熊みたいになつてしまい、麦蒔きをやったり、百姓どもとごてくさ騒いでいるうちに、いわゆるしぼりや搾取者

つていうやつに成りあがったのか？ いやどうも、おれの考えでは、お前なんぞは当世風の教育を受けて世間へ出て、こんな片田舎ではなく、ペテルブルグに住んでいたにしても、やつぱり今と変りがないだろう。ただ違ふところといえば、ここでは粥カーシヤを詰めた羊の筋肉を片割れも食った上に、凝乳饅頭で口直しをやらかしているが、そうなつたら、松露をそえたカツレツかなんかをガツガツ食うようになるぐらいのものだろう。それに今は農奴を手下に、まあ何とかうまくやりながら、無論やつらを酷い目に合わせたりはしないようだが、それというのも、農奴は自分のものだから、そんなことをしては自分の損になるからさ。ところが君が役人で、部下が官吏だったりしようものなら、そいつらは自分の農

奴とは訳が違うつてんで、容赦なくピシピシやつついたり、または国庫を平気でごまかしたりするだろうて！ いや、まったく、こういう搾取者しほりやになると、握った手をひろげようともしくさらないんだ！　ところがこんな手合いが指の一本か二本でもひろげようものなら、いよいよ碌なことにはならないのだ。ちよつとばかり学問の上つ面でも嚙らせてみるがいい、すぐに上座かみざへしやしやくり出て、本当に学問のある人にまで、それを見せびらかさうとするから！　その上にまだどうかすると、『よし、おれの偉いところを見せてやろう！』などと言いだしかねないのだ。そして、大抵の者が手を焼くような小賢しい規則きまりを考えだすのだ……。あ、あ、もし誰も彼もこういう搾取者になったら、どうだろう！……

「さあ、名簿が出来ましたぜ！」とソバケーヴィツチが振り返つて言った。

「出来ましたか？　じゃあ、こちらへ下さい！」チチコフは一通りそれに眼をとおして、その正確で几帳面なことに一驚を喫した。職業や、年齢や、係累の有無などが詳細に書いてあるばかりでなく、欄外には、その身持みもちや酒を飲む飲まないという特別な註まで、ちゃんと記入してある——要するに、見た眼にも気持のいいものであった。

「それじゃ、手附を頂いておきますかな。」とソバケーヴィツチが言った。

「どうして手附なんて仰っしゃるのです？　市で一度に全部お払



いしますよ。」

「だが、あんたも御存じのように、それが定法きまりでがすからね。」  
とソバケーヴィツチが言い返した。

「さあ、どうして差しあげたものでしょうか。手許には金を持っていないものですからね。じゃあ、ここに十ルーブリだけありますよ。」

「なに、十ルーブリですって！　せめて五十ルーブリはおいで行って下さらなくっちゃ！」

チチコフは無いと言って断わろうとしたが、ソバケーヴィツチが、いや確かに持もちあわせがある筈だと、しつこく言い張るものだから、とうとう紙幣をもう一枚とり出して、『じゃあ、もう十五

ループリだけ差しあげます。しめて二十五ループリですよ。では受取りを下さいませんか。』と言った。

「どうしてまた受取りなどが要るのですか？」

「いずれにしても受取りは頂いておいた方が好都合ですよ。どうも世智辛い御時勢で……どんなことが起こるか分ったものじゃありませんからね。」

「ようがす。それじゃあ金子かねをこちらへ貰いましょう。」

「どうして金子を先きにお渡しするのです？ 金子はちゃんここに持ってますよ！ 受取りさえ書いて下すつたら、すぐにお渡ししますからね。」

「だが、どうして受取りが書けますかね？ その前にちよつと金

子を拝ませて貰わないでは。」

チチコフは紙幣をソバケーヴィツチに渡した。すると相手はテーブルに近よつて、左手の指で紙幣をおさえながら、右手で紙切れに、国立銀行紙幣二十五ルーブリ、農奴売却代金の手附金として正に受取り もうしそろうなり 申候也と書いた。受取りを書いてから、彼はもう一度その紙幣を あらた 検めた。

「こりやだいぶ古い紙幣ですなあ。」と彼は、そのうちの一枚を日光に透かして見ながら、言った。「それに少しやぶれていますなあ。だがまあ、友達同士の間だから、かれこれ言うがものはありませんわい。」

えい、この握り屋め！ とチチコフは心のうちで思った。そ

の上、おまけに人非人だ！

「女の農奴は要りませんかね？」

「いや、もう結構ですよ。」

「安くしておきますぜ。お馴染み甲斐に一人一ループリずつでよ  
うがすがね。」

「いえ、女の方は要らないんです。」

「そう、要らないものは何とも話になりませんなあ。好き嫌いに  
は規則がなく、諺にも蓼喰う虫も何とやらと言いますからね。」

「ところで、この取引は我々二人の間だけのことにしておいて頂  
きたいんですがね。」とチチコフは、別れを告げながら、言った。

「それあ、いうまでもありませんわい。これは第三者の容喙ようかいす

べき事柄じゃありませんからね。近しい友達同士の話はどこまでもお互いの間だけのことにしておかなくつちやなりませんわい。じゃあ、御機嫌よろしゅう！ わざわざお訊ね下さって有難うござんした。これからもお忘れにならないようお願いしますよ。またお暇がありましたら、御飯でも食べたり、退屈しのぎにやつて来て下さい。何かとまたお互いに力になることもござんしようからね。」

いや、もう真<sup>まっぴら</sup>平だよ！ とチチコフは馬車の中へ乗りこみながら独り呟やいた。死んだ農奴一人に二ルーブリ半ずつもふんだくりやがって、忌々しい握り屋め！

彼にはソバケーヴィツチの仕打が業<sup>ごうはら</sup>腹でならなかつたのだ。

とにかく、何と行ったって、知事のところで、警察部長のところででも会って、知合いの仲じゃないか。それだのにまるで赤の他人みたいな遣り口で、あんなくだらないものに金を取り立てやがるんだ！ 馬車が邸を出た時、後を振り返って見ると、ソバケイヴィツチはまだポーチの上に突っ立ったまま、客がどちらへ行くかを見とどけようともするのように、じつとこちらを見張っていた。

「ろくでなし下劣漢め！ まだあんなに突っ立ってやあがる！」と彼は吐き出すように呟やいた。そしてセリファンに、百姓小屋のある方へ曲れと言いつけた。こうして地主館やかたから馬車を見られないようにして発たつてしまふ魂胆であった。彼はプリューシキンのところ

へ行こうと思つたのだ。ソバケーヴィツチの話では、その男の村では農奴がまるで蠅のようにバタバタと死んだということだ。だが、そこへ行くことをソバケーヴィツチに知られなくなつたのだ。馬車が村はずれまで来た時彼は最初に出会つた百姓を呼びとめた。その百姓は何処か途中で拾つたらしい恐ろしく太い丸太を肩にかついで、まるで疲れることを知らぬ蟻のように、それを自分の小屋の方へ曳つぱつて行こうとしているところであつた。

「おい、お鬚！　ここからプリューシキンのところへはどういったらいいのかね、旦那の邸のそばを通らないようにして行くには？」

どうやら百姓は、その質問に面喰らつたらしい。

「どうだ、知らないのかい？」

「へえ、旦那さま、知りましねえだ。」

「ちえつ、こいつ！ その白髪頭をひき撈つてくれるぞ！ あの吝んぼのプリューシキンを知らないのか？ 百姓に食うものも食わせない業ごうよく欲地主をささ？」

「ああ、あの檻ぼろ褌ぼろつさげのこつてすかね！」と、百姓が頓狂な声で言った。このぼろ檻褌つさげ という言葉には非常に穿った名詞がくつついていたが、それはしかし上品な会話にはちよつと用いられない言葉だから、ここでは故意わざとそれを抜かすことにした。だが、それが実に穿った表現であつたことは、その百姓の姿がもう疾とつくに見えなくなつてしまい、馬車がずいぶん先きへ進んで



からまで、チチコフがまだ馬車の中で独りクスクスと笑っていたところから容易に想像がつかだろう。まったくロシア人の毒舌にかかつては堪らない！ しかも、いったん渾名をつけられたが最後、それが子々孫々の代まで伝わり、その当人が任官しようと、退職しようと、ペテルブルグに住もうと、世界の涯へ引っこもうと、いつも彼について廻るのだ。そうなった暁には、もうどんなに自分の渾名に小細工をして高尚らしく見せかけようが、または代書人などの手を通じて古いけんもん権門の家名を賃借しようが、結局なんの役にも立ちはしない。いつも渾名の方が先にたつてカアアアと鴉みみたいな鳴声を出して、自分がどこから飛んで来た鳥かを、はつきり喋ってしまふから浅ましい。口から発せられたがいせつ剋切な

言葉は、文字に書きつけたも同様で、斧で断ち斬るわけにはゆかぬ。剗切な表現といえ、生氣澆刺たる生粋のロシア人ばかり住んでいて、ドイツ人もフィンランド人も、その他いかなる異種族も全然影を見せぬロシアの奥地から生まれた言葉を措いて他にはない。ロシア人という奴は決して言葉に不自由することがなく、巢ごもりをした雌鷄みたいに言葉を抱きこんで後生大事に温めておりもしないで、まるで肌身はなさぬ手形でも突きつけるように、早速ペラペラと喋ってしまう。そうすれば、鼻がどうの、唇くちがどうのと附けたす世話は更にいらぬ。一遍に頭の天辺から足の爪先まですつかりそれと分ってしまうのだ！

円頂閣や円塔や十字架を頂いた寺院や修道院が、聖なる信仰の

国なる我がロシア帝国に数限りなく散在するように、数限りない人種や、民族や、国民がこの地球上に群れつどい、ごたごたと入り乱れて、押し合いへし合いしている。そのどの国民もが、それぞれ才能の兆しを持ち、創造力に富む精神や、おのおの水際だつた特異性や、その他いろんな天分を兼ね具えながら、それぞれ個有の言語によつて他の民族との間に画然たる区別をつけている。然もその言語たるや如何なる事物を表現しても必ずその表現に独自の国民性の一部を反映している。イギリス人の言葉には人心の洞察力と、人生に対するどこまでも利巧な認識が感じられ、フランス人の儂<sup>はか</sup>ない言葉は軽佻な洒落となつてパツと輝くと、そのまま雲散霧消してしまい、また、ドイツ人の知的ではあるがぎこち

ない言葉は、ちよつと真似の出来ない独自の工風や発明を易々とやつてのける。けれど的確に表現されたロシア語ほど大胆不敵で、しかも心の奥底からほとばし迸り出て、生氣澆刺として沸き立つ言葉は他にないだろう。

\*1 ミハイル・セミヨーノヴィツチ ロシア人は熊 (Medve

Р 《メドウエーヅ》) を愛称でミーシャ又はミーシユカと呼ぶ。ところが、クリスチャン・ネームのミハイルの愛称も矢張りミーシャであるから、ここでは熊に似たソバケーヴィツチが然も熊のいみよ異名に縁のある名前を持っているのでチチコフが感心するのだ。

\*2 マヴロコルダート アレクサンドル (1791-1865) 公爵。

ギリシアの愛国者で大政治家。

\*3 ミアウリス アンドリアス・ウオコス (1770-1835) ギリシアの有名な水師提督<sup>すいし</sup>。

\*4 カナリス コンスタンチン (1790-1877) ギリシアの政治家。独立戦争(一八二二年—二五年)に戦功を立て、一八六二年の革命に際しては臨時政府の要人となる。

\*5 バグラチオン ピョートル・イワーノヴィッチ (1765-1812) アレクサンドル一世時代の名将。ボロジノの役に負傷して歿す。

\*6 ゴグとマゴグ 旧約聖書に出て来る悪人で、エゼキールの予言により、イスラエルの民を根絶せんがために北方

より聖地に来るが、神によって亡ぼされる。黙示録では、世界最後の日に悪魔に唆かされてキリストの国に反抗して立ち、結局悪魔と共に焦熱地獄で身を滅ぼす諸々の地上の国王を意味している。

\*7 カシチエイ ロシアのお伽ときばなし噺に登場する痩せた吝ん

坊で、不死身の老人ということになっている。痩せ男や吝嗇漢の渾名あだなに使われる。

\*8 コロコトウローニ フョードル (1770-1843) ギリシアの将軍。祖国の自由のために闘った英雄。

\*9 ウヤトカ馬 ロシア馬とフィンランド馬とを交配して出来た馬の種類で、体軀は小柄だが、非常に頑健である。

## 第六章

ずっと以前、私がまだ稚<sup>いと</sup>けなかつた頃のこと、もはや返らぬ夢と過ぎ去つた少年の日のころ私は見も知らぬ場所<sup>ところ</sup>へ初めてやつて行くのがとても嬉しかつたものだ。それが小さな部落であろうと、貧しい田舎町であろうと、乃至は大きな村であろうと、自由村であろうと、何でも構わない——あどけない好奇の眼は、到るところで多くの珍しいものを見つけた。どんな建物でも、また特に際立つた印象を与えるものでさえあれば、何でも<sup>ことごと</sup>尽くが私を引き留め、私を驚かせるのであつた。土地<sup>ところ</sup>の庶民階級の丸太づく

りの粗削りな一階建のささやかな家が、たごとと塊まっている中に、ぽつねんと一つだけ突き出している、窓の半分は見せかけだけという、きまりきった建築様式の石造の官衙かんがであろうが、雪のように真白に塗った新しい寺院の上に聳えている、白い鉄板で張ったまん丸い恰好のいい円頂閣であろうが、市場であろうが、町なかへひよつこり顔を出す田舎の伊達男であろうが——何ひとつ、私の若々しい鋭敏な眼を逃れることは出来なかつた。私は旅行馬車から鼻を突き出すようにして、まだこれまで見たこともない型のフロツクコートを眺めたり、八百屋の店の扉口から、干涸びたモスクワ製の糖菓を入れた壺と一緒にチラと覗く釘や遠くからでも黄いろく見える硫黄や乾葡萄や石鹼などの入っている木箱



を眺めたり、田舎で退屈するためにどこかの県からやって来たらしい歩兵将校が路の片側を歩いているのを見送ったり、短外套を著<sup>き</sup>て競走馬車で一散に駈けて行く商人を眺めたりした——そうして彼等の貧しい生活に想いを移すのであった。田舎の官吏が傍らを通りでもすると、私はすぐにこんなことを考えたものだ——あの人は一体どこへ行くのだろう、自分の兄弟の家の夜会へでも行くのか、それとも真直ぐに我が家へ帰って、夕闇のまだすつかり濃くなりきらないうち半時間<sup>とき</sup>ばかりをポーチに坐っていてから、お袋さんや細君や細君の妹や家族の者一同と共に、早い夕飯を食べるのだろうか、そしてスープが出た後でようやく、頸飾をつけた女中なり、ダブダブの上衣を著<sup>き</sup>た給仕<sup>ボーイ</sup>なりが、永年その家に伝

わる燭台に脂蠟燭をつけて持つて来る頃、彼等のあいだでは一体どんな会話が持ちあがるのだろうか、などと。また、何処かの地主の村へ乗りこんで行く時には、ひよろ長い木造の鐘楼や、だだっぴろい黝くすんだ木造の古い寺などを私は物珍らしく眺めるのであった。遙か彼方から如何にも蠱惑こわくてき的に地主館やかたの赤い屋根と白い煙突とが、樹々の緑をとおしてチラホラ見え出すと、私はそれを翳かざしている園が両方へ展ひらけて、一刻もはやく邸の全貌が、噫！ その当時は決して俗悪なものではなかった外観を現わすのを、じりじりと待ち侘びながらも、一体ここの地主というのはどんな人だろう、肥った人だろうか、息子があるだろうか、それとも娘ばかり六人もあって、よく響く少女らしい笑い声を立てたり遊戯をし

たりしていて、一番末の娘が万年美人ときているのではなからうか、彼女らはまた黒い瞳をしているのだろうか、そして当の主人は陽気な人だろうか、それとも、九月の末ごろの空模様みたいに陰鬱な顔をして、曆を覗きこんだり、若い者には退屈な裸麦のこ**と**ばかり話すような親爺ではなからうか、などと揣摩憶測を逞しゅうしたものである。

今では、どんな初めての村へも私は平気で乗りこんで行き、その俗悪な姿を冷やかに眺めるだけで、冷静になった私の眼には、これが昔だったらさぞ顔色を変えたり、笑ったり、無闇にお喋りをしたりせずにはいられなかつたような対象ものも、一向面白くもなければ可笑しくもなく、今は平気で見過ごすことができ、固く結

んだ私の唇にはただ無関心な沈黙が宿るに過ぎない。おお、私の青春よ！　おお、私の若き日よ！

さてチチコフは、百姓たちがプリューシキンに奉った例の渾名のことを考えて心の中でクスクス笑っている間に、自分が百姓小屋や通りのぎらにある広大な村の真中へ乗りこんでいることには気がつかなかつた。けれど間もなく、丸太を敷いた舗道のために物凄く馬車がかたつきだしたので、彼もようやくそれと気がついたが、この丸太敷きの道に較べたら、あの市まちなかのごろた石を敷いた道などは物の数ではなかつた。丸太がまるでピアノの鍵盤のように上ったり下ったりするため、ぼんやりしている乗客は、後頭部に瘤をつくったり、額に青紫斑をこしらえたり、またどうか

すると自分で自分の舌の先きを、いやというほど噛んだりもする。チチコフは、どういうものかこの村の百姓小屋が申し合わせたようにひどく荒廃しているのに気がついた。小屋に使つてある丸太はどす黒く古びており、多くの屋根は篩ふるいのように穴だらけになつている。中には上に棟木むなぎと、その両側へ肋骨のように張り出した垂木たるぎだけしか残つていないのもある。どうやら小屋の主人たちが、どうせ雨降りには屋根は繕えないし、天気の日には雨漏りの心配はない、それに居酒屋にしろ大道の真中にしろ、好きなどころに広々とした場所があるのに、何を好んでけちけちすることがあるうと、誠に至極しごくもつと尤もな理屈をつけて、自分で柿こけらいた板や屋根板を引っぱがしてしまったものらしい。小屋の窓には窓ガラスなど

はなく、中には檻ぼろ樓や古外套をつめて塞いだものもある。またどういう理由わけか知らないが、よくロシアの百姓小屋にしつらえてある、欄干のついた軒下の露台は横へ傾いて、絵にもならないほど黝くすんでいる。小屋の後ろには、あちこちに山のように積みあげた穀こくづか堆が列をなして並んでいたが、それはもうかなり長いこと積んだままになっているらしく、その色が焼きの悪い古煉瓦のようで、天辺にはいろんな雑草が生え、剩あまつさえ横からは灌木の繁みよが凭つかかっている。その穀こくづか堆はどうやら領主のものらしい。穀堆と荒れはてた屋根の向うから村の二つの寺が、馬車の方向が変るにつれて、右に見えたり左に見えたりしながら、澄みきった大空へせりあがって来た。その二つの寺は並びあっていて、一方は荒

れはてた木造、一方は石造で、壁は黄ばみ、全体に汚点しみと亀裂だらけになっている。地主館やかたの端々がチラチラと見えだしたが、やがて百姓小屋のつながりが切れて、その代りに、ところどころ壊れた低い垣根に囲まれた菜園か甘藍キャベツ島とおぼしき空地あきちへ出ると、ついにその全貌が現われた。この法外にだらだらと長い奇妙なお城は、どこか老耄おいぼれの廃兵といった恰好をしている。それは一階建のところもあれば、二階建になっているところもあつて、必ずしもその老朽を防ぐよすがにはなりそうもない黝くすんだ屋根の上には、二つの展望台が相向いにニューと突つ立っているが、どちらかつも曾ては塗つてあつた色の跡形だになく、今はもうぐらぐらになつてゐる。家の壁もところどころ剥はげて漆喰しつくい下地したじがむきだし

になつてゐるのは、雨や旋風かぜや、秋の氣候の変化など、あらゆる荒天さらに曝されて来たものと見える。窓のうち開あいているのは二つきりで、他の窓は鎧扉をおろしたり、中には板で釘づけにされたのさえある始末。開いている二つの窓も、辛うじて開いているといえるだけで、その一つなどには、青い砂糖の包紙を三角に切つたのが貼りつけてあるので至つて暗そうだ。

邸の裏から始まり、部落むらの後ろへずっとひろがって、末は野原につづいてゐる古い広大な園は樹木の生い茂るがままに荒れ果ててはいるが、どうやら、そのただっぴろい村に生氣を添えている唯一のものらしく、荒れ果てた絵のような姿で、ひとり精一杯の美を放つてゐる。伸び放題ほんもに繁茂した樹々の梢は、さながら緑の



雲か、木の葉のさやさやと顫える不規則な円頂閣の形に群らがつて、空高く浮かんでゐる。緑の密林の中から、暴風あらしか落雷のため  
 にぽつきり折れたらしく頭のない巨きな白樺の白い幹が一本、キラキラと光る形のいい大理石の円柱のように空中に聳えている。  
 柱カピテル頭の代理をつとめる尖った斜めの折れ口は、雪白の木肌に対して帽子か、それとも黒い鳥のように、どす黒く見えている。蛇ホ  
ツプ麻草の蔓が下では接骨木にわとこやななかまどはしばみや榛の繁みをすつかり枯ら  
 してしまい、それから柵という柵の天辺を匍はいまわつた拳句、上  
 へよじのぼつて、折れた白樺を半ばまでぐるぐる巻きにしている。  
 幹の中ほどまで登ると、そこから下へ垂れさがつて、今度はほか  
 の木々の梢にからみつきはじめたり、または空中にぶらさがつて、

己れの細くて粘つこい卷蔓ひげを輪にして、風のまにまにゆらゆらと揺れている。この日光を受けた緑の森がところどころで両方へ分れて、その間から日もささない空洞うつろが、まるで暗い落し穴のように、ぽっかり口をあけている。そこはすっかり暗い陰影かげにとざされて、暗がりの奥に僅かに仄ほの見えるのは、真直ぐに走っている細い小径や、壊れた欄干や、倒れかかった四阿あずまやや、老い朽ちて洞ろになった柳の幹や、柳の後ろから濃い剛毛あらげのように顔突き出している白毛頭の雀すずめのおごけや、あまりひどく茂っているため枯れ萎びて纏れあい絡みあっている木の葉や枝、さては横合いから緑の掌葉を差し出した楓かえでの小枝などであるが、楓の一枚の葉裏に、一体どうしてなのかは、まるで分らないが、不意に日光が

映して、パツとそれを火のように透明なものに変えて、濃い闇の中  
 で燦然と輝かせた。一方、園のいちばん端れはずには、他の樹木と  
 は不釣合いに背の高い はこやなぎ白楊が四五本、そのさやさやと揺らめ  
 くおのおのの梢に大きな鴉の巢をのせている。その白楊の中には、  
 枝が引き裂けたまま、幹からすっかり離れもせず、病葉わくらばと一  
 緒にだらりと下へ垂れさがっているものもあつた。一言にしてい  
 えば、何もかもが素晴らしかった。それは自然の風致も人工の妙  
 趣もついに及ばず、ただその両者が結びついた時にのみ見られる  
 佳よさで、人間がああでもないこうでもない、ややもすれば無意  
 味な苦心を重ねた後に、自然が最後の仕上げの鑿ふるを揮つて、重苦  
 しい塊まりを崩し、赤裸々な構図の見えすいている野暮な正しさ

や惨めな欠陥を除けて、きちんと寸法を測つたように清楚なだけが身上の血の氣のない人工に、いみじき暖かさを添える時、初めて生まれる美しさである。

一度か二度、曲り角をまがると、我等の主人公はついに地主館やかたの前へ出た。正面から見ると、それは一層いたましい姿であつた。柵や門に使つてある古い木には、もうすっかり青苔がついていた。下人部屋だの、納屋にわだの、穴倉だのといった、明らかに老朽した建物の群れが前庭を満たしており、その両側には右と左に別の庭へ通ずる門が見えている。すべてが、この邸で曾かつては非常に盛大に農産経営が行われていたことを物語るだけで、今は何を見ても陰気くさいばかりだ。あたりを活気づけるようなものは何ひとつ

見あたらず——扉が開け閉てされるでもなければ、何処からひとり出て来る人影もなく、住家らしい生き生きとしたいそしみの気配は何も感じられない！ ただ一つ表門だけが開いていた。それもこの氣息奄々たる場面を活気づけようとして、わざわざ姿を現わしでもしたように、塵がけの荷を積んだ荷馬車で偶々一人の百姓がそこへ乗りこんで来たればこそで、いつもだつたら、これもぴったり閉ざされていたに違いない。というのは、鉄の門におそろしく大きな錠前がぶらさがっていたからである。間もなく一つの建物の傍で、いま荷馬車を乗りつけた百姓と口論をはじめた人の姿をチチコフは見てとつた。久らく眺めていたけれど、彼にはその人物がいったい男なのか女なのか、さっぱり分らなかつ

た。著きている着物からしてどうもはつきりせず、女の上つ張りによく似ているし、頭には田舎の邸やしきおんな婢めかけがよくかぶるような頭巾をかぶっている。が、声だけは、女にしては少し噎かれているようだ。ありやあ女だな！ とチチコフは心で呟ささやいたが、すぐにまた、いや、そうでもないぞ！ と附けたした。それから又じろじろと眺めた後で、彼はついに 勿論、女だ！ と呟ささやいた。相手の方でも矢張り同じようにこちらをじろじろと眺めている。よつぽどお客というものが珍らしいらしく、チチコフだけではなく、セリファンや馬まで穴のあくほど眺めて、馬の尻尾から鼻面までまじまじと見まわした。チチコフは相手の帯にさげている鍵束と、百姓に向って使うぞんざいな口のきき方から推して、これ

はてつきり家政婦に違いないと思った。

「ねえ、小母さん、」と、彼は馬車から降りながら、声をかけた。

「御主人は？」

「留守ですよ。」と家政婦は、その問いのおわるのも待たないで遮ったが、ちよつと間をおいてから附けたした。「何か御用ですかい？」

「ああ、用事があつてね。」

「じゃあ、部屋なかへ入りなさい！」そう言うなり家政婦は、くるりと向うむきになって彼に背中を見せたが、その背中には何かの粉が一杯ついていて、少し下の方に大きな綻ほころびが出来ていた。

チチコフは何だか穴倉からでも吹いて来るような冷たい息吹の

感じられる、暗くてだだっ広い玄関へ入った。玄関の次ぎの間もやはり真暗で、わずかに扉の下の大きな隙間をくぐって這いこむ光りにぼんやり照らされているだけだ。扉をあけて彼はやっと明るみへ出たが、眼の前に現われた乱雑さ加減にすっかり仰天してしまった。まるで家じゅうの大掃除でもするため一時ここへ家具という家具を積みあげたといった塩梅だ。一つのテーブルの上には脚の折れた椅子さえ載せてあり、それと並べて振子の停った時計が置いてあるが、それには古風な銀器や玻璃ガラス罫はしや支那陶器などが入れてあった。真珠貝で象眼をした書物卓デスクは、もうところどころ象眼がとれて、その跡に膠にかわのこびりついた溝が黄いろっぽく残っており、その上にはいろんなものがごたごたと載せてある――



—上に卵形をつまみのある、少し青く変色した大理石の文鎮で押えた、何か細こまごま々と記入した書附の山だの、革表紙で、縁の赤い、ひどく古風な本だの、すっかり干涸びてしまつて、胡桃ほどの大きさもないレモンドの、挽もぎはなされた安楽椅子の腕木だの、手紙で蓋がしてあるけれど、中へ蠅が三匹もはまっている。何か液体の入った台附コップだの、封蝋のかけらだの、何処かで拾つて来たらしい襪はきつきれだの、インキでよごれっぱなしの、まるで肺病やみみたいにかさかさになつた二本の鷺ペンだの、おおかたフランス軍のモスクワ侵入以前にでも主人が使つていたらしい、もうすっかり黄いろくなつてしまつた歯ブラシだの、といったものである。

壁には幾つもの絵が処ところせまく乱雑に懸けてあつて、どこかの戦争の絵らしく、大きな太鼓だの、三角帽をかぶつて喚いている兵隊だの、死にかかった馬だのを描いた恐ろしく長い銅版画はもう黄ばんでしまつてゐるが、それは細い青銅の筋すじがね金を入れ、四隅よすみにもやはり青銅の円い座金ざがねをつけた、ガラスもないマホガニイの額縁に納めてある。それと並んで、花や、果物や、切り割つた西瓜や、野豚の頭や、倒さに吊りさげた鴨を描いた大きな黝くすんだ油絵が壁の半ばを占領してゐる。天井の真中には、麻布あさの袋でおおつたシャンデリアがさがつてゐるが、ひどい埃のために、まるで蛹さなぎの入つてゐる繭まゆそつくりだ。部屋の片隅には、もつとひどいからくたで、机の上へ載せるだけの値打もない代物が床に山と積ん

である。堆積やまの中には果して何かがあるのか、ちよつと見当もつかない、というのは、それに夥しく埃が積っているためで、ちよつとでも触ろうものなら、手がまるで手袋でもはめたようになってしまひそうだ。その中からどうやらはつきり形のわかるのは、木製の鋤すきの切れっぱしと、古い長靴の裏革ぐらいのものだ。もし、テーブルの上にある古いぼろの頭巾がここに人の住んでいることを証明しなかったら、この部屋が生きた人間の住まいだなどとはどうしても思えなかつただろう。チチコフがこの奇妙きつれつな部屋飾りを眺めまわしている間に、横側の扉があいて、さつき庭で逢つた家政婦が入つて来た。ところが今あらためて見ると、どうもそれは家政婦というよりは男の執事らしい。家政婦なら、

第一、鬚などを剃ったりする筈がないのに、この人物は、ちゃんと鬚を剃っておる、尤もそれは極く偶のことらしく、顎から両方の頬の下部が、まるで厩で馬を清掃するとき使う針金製の馬節ブラッシそつくりだ。チチコフは怪訝な顔をしながら、執事の方から何か言いだすのを、もどかしそうに待っていた。執事はまた執事で、チチコフが口を切るのを待っているのだ。とうとうこの珍妙な探りあいにしびれを切らしたチチコフが思いきって訊ねた。

「旦那はどうしたんだね？ 御在宅じゃないのかね？」

「主人はここにおりますだよ。」と執事が答えた。

「何処にさ？」とチチコフが訊きかえした。

「お前さん、眼が見えないのですかい？」と執事が言った。「え

え、焦じれたい！ このわしが主人でがすよ！」

ここで我等の主人公は思わず一步後へ退つて、しげしげと相手の顔を見なおした。これまでに彼はずいぶんいろんな人間にも会い、恐らく作者わたしや読者諸子が決して見ることはないような人間にも会つて来たが、どうもこんな人間に出会うのは初めてだった。顔に別段變つたところがあるわけではなく、大概の瘦せた老人に共通な顔をしていたが、ただ顎だけが恐ろしく前へ突き出ているため、唾を吐くたんびに顎を汚さないようにハンカチで蔽おほわなければならぬ。まだ生いき々いきとしてゐる小さな金壺かなつぽまなこ眼まなこは、まるで二十日鼠はつかねずみが暗い穴から尖とんがった鼻面はなを突き出して、耳みみをそばだてた、髭をピクピク動かしながら、どこかに猫か、悪戯小僧が隠れ

ておりはせぬかと外界そとを見廻したり、胡散くさそうに空気の匂いまで嗅ぎ廻す時のように、長いげじげじ眉の下からキョトキョトと始終あたりを窺っている。何より目立つのは彼の服装である。

どんなに手段を講じ、努力を払っても、彼の著きている部屋着がいったい何で拵えてあるかは、ちよつと突きとめることがむづかしい。袖と襟とは脂と垢でテカテカに汚れて、まるで長靴に使う鞣なめしがわ革めしがわそつくりになつてゐるし、背後うしろには、普通なら二つに割つ

てある筈の裾が、四つに裂けてビロビロとさがり、そこから芋屑のような木綿わたが垂れさがつてゐる！ 頸にもやはり、靴下と靴下止どめとも腹巻ともつかないが、どう見てもネクタイとは思われない代物を巻きつけてゐる。要するに、もしもチチコフが何処

かお寺の門かどぐち口あたりでこんな服装なりをした相手に出会ったとしたら、きつと二カペーカ銅貨を一枚くれてやったに違いない。これも我等の主人公の名誉のために言っておかねばならないが、彼はなかなか情け深い男で、乞食を見ると、どうしても二カペーカ銅貨を恵んでやらすにはおられなかつたからである。しかし、彼の前に立っているのは乞食ではなく、いま眼の前にいるのは地主なのである。しかもこの地主は千人の余も農奴を持っているのだ。またこれほど多くの穀類を、粒のままや、粉にしたのや、また刈り取つたままで貯えていたり、倉や物置や乾燥室を、こんなに夥しい麻布や羅紗らしゃや、羊の皮の鞣なめしたのや生のままのや、乾した魚や、いろんな青物や、肉製品で一杯にしている者が他にあつたら

お目にかかりたいものだ。彼の家の裏庭をちよつと覗いてみるがよい、そこには、いろんな木材きざいだの、決してこれから先き使われそうにもない器具の類がごたごたと並べてあるので、これはひよつとしたら、何か掘り出し物でも見つけようと思つて、足まめな姑婆さんたちが料理女をお供に毎日お百度を踏む、あのモスクワの荒物市場へ迷いこんだのじゃないかと疑われる位で、いろんな綴とじたり刳えぐつたり接はぎ合わせたり編あんだりした木工品うずたかが堆うく積かみあげてある。例えば、樽つるべだの、釣瓶ておけだの、片手桶かただの、そそぎくち注まげもの口の附いたのや附かない木の酌器ひしやくだの、柄杓ひしやくだの、白樺まげものの皮でつくつた曲物まげものだの、よく女が苧はこやなぎやいろんなくだらしないものをに入れる桶だの、薄い白楊はこやなぎの板を曲げて拵はこやなぎらえた箱だの、



白樺の皮で編んだ籃かごだの、その他貧富の別なくロシア人が日常つかうさまざまな道具の山であった。こんな細工物の山をプリューシキンは一体どうしようというのだろうか？ 彼の持っているような村が二つあったところで、とても一生のうちにこれだけの道具は使いこなせるものではないのだが、それでも彼はまだ足りないと思っっているらしい。どうもそれだけでは満足が出来ないので、彼はいまだに毎日、自分の村の往おうかん還かんをぶらぶら歩きまわりながら、橋の下を覗いたり、溝板の下を窺うかがったりして、眼にとまったが最後——たとえばそれが古靴の底だろうが、女の捨てた襪くつだろうが、鉄の釘だろうが、瀬戸物の破片かけらだろうが、何でもかまわず自分の家へ持って帰っては、チチコフが部屋の隅に見つけた例の

がらくたの山へ投げこむのである。『そうれ、また爺さんが漁あさりに出かけたぞ！』こう百姓たちは、彼が獲物を探しに行く姿を見かけると、いつも言いあつた。実際、彼が通つた後は、往還きんがまるで掃いたようにきれいになつた。通りすがりの士官が拍車を落したことがあつたが、その拍車は忽たちまち例の山へ移されていた。どうかして女がうっかり井戸端に釣瓶を置き忘れたりすると、彼はさつさとその釣瓶を持って行つてしまふ。尤もつとも現場を見つけた百姓が直ぐその場で咎めさえすれば、そのまま何の文句もなく、彼は掠かすめた品をこつそり置いて行くが、それが一旦くだんの堆積やまへなげこまれてしまつたら万事休すで、これは斯かく斯くの時かに斯く斯くの人から買ったとか、祖父から譲られたとか言つて、飽くま

で自分のものだと言張する。彼は自分の部屋の中でも、封蠟だろうが、紙屑だろうが、鳥の羽毛はねだろうが、なんでも床に落ちているものを拾いあげては、書物卓デスクの上なり窓枠の上へ載せておくのだ。

だが彼とても単に勤きんけん儉あるじな主人であつた時代もあるのだ！ 妻もあれば子供もあつて、隣村の地主たちが訊ねて来ては食事を共にしたり、家政のやり方や上手な経済の切盛きりもりについて彼から教えを受けたりしたものである。一切万事が生き生きとして進行し、判で押したようにきちんきちんと片づいて行つた。磨粉場こなひきばや晒さ布場らしばが活動すれば、羅紗織場や指物さしもの工場や紡績場いとひきばがどしどし働いていた。万事にかけて主人の鋭い眼光が到るところに行きわ

たっていた。彼はまるで勤勉な蜘蛛のように、家政という網の目を隅から隅まで、せかせかしながら、しかも抜け目なく馳はせまわっていた。彼の顔色には、あまり烈しい感情は現われていなかったが、眼に理知の光りが見えていた。彼の話は処世の知識と経験けいけんとに充ちあふれていたので、客にはそれを聴くのが楽しかった。愛想がよくて、お喋りの主婦は、客あしらいがいいといっているので評判だった。二人の可愛らしい娘がよく客を迎えに出て来た。どちらも金髪で、薔薇の花のように瑞みずみず々しかった。また活発な男の子も一人あって、お客の前へ飛び出すなり、相手が喜ぼうが喜ぶまいが、そんなことには一向お構いなしに、片っぱしからみんなを接吻して廻った。邸の窓という窓は残らず開け放たれており、

中二階には家庭教師のフランス人が住んでいた。この男はいつもきれいに髭を剃っていて、射撃の名人でもあった。よく蝦夷山鳥えぞやまどりや鴨を御馳走に持って帰ったが、時には雀の卵より他には取つて来ないこともあつて、そんな時には自分の分だけそれでオムレツを拵らえて呉れと言つた。家じゆうに他には誰もそんなものを食う者がなかつたからだ。その中二階には又、彼と同国人で、二人の娘の方を受持つている女の家庭教師も住んでいた。当の主人はといえば、食卓につく時いつもフロックコートで出て来たが、それは少々著古きふるされてはいたけれど、さつぱりと手入ていれがしてあつて、肱などもきちんとしており、補布つぎなどはどこにもあたつていなかった。ところが、善良な主婦が亡くなつて、鍵の一部と共にこま

ごました心遣いがプリューシキンの肩にかかつて来た。彼は妙に落着きがなくなり、大抵の男おとこやめ鰥おとこがそうであるように、だんだん疑い深くなり、吝嗇けちくさくなくなつて行つた。どうも姉娘のアレクサンドラ・ステパーノヴナには信用が置けない——この考えは成程まちがつていなかった。というのは、間もなくアレクサンドラ・ステパーノヴナが、一体どこの連隊に属しているとも分りもしない或る騎兵の二等大尉とかけおち驅落をして、父親が軍人という奴はみんな博奕ぼくちうちで道楽者だという不思議な偏見から士官嫌いなことを知っていたので、大急ぎで何処か田舎の教会で結婚式を済ましてしまったからだ。父親は娘の前途を呪のろつただけで、行方を捜ゆくえしようとしなかつた。家の中はいよいよ落莫らくぼくたるものにな

った。主人の吝嗇りんしよくはますます露骨になってきた。吝嗇には好い相棒である白髪が彼の剛こわい髪この毛けに光り出して、それと共に吝嗇の度が一層くわわった。家庭教師のフランス人は息子が官途につく時期に達したというのを口実に解雇された。女教師マダムの方はアレクサンドラ・ステパーノヴナの誘拐を幫助した疑いで追放された。息子は、父の意見で最も健実な勤め口だという裁判事務を見習うために県の首都まちへ送られたが、裁判所へは行かずに父の意見そむに叛いて軍隊へ入ってしまい、勝手に父の許もとへ軍服を買う金を請求してよこした。それに対して彼が父親から、いわゆる『\*1馬鹿握り』というやつを受取ったことは言うまでもない。最後に父親と共に家に残っていた妹娘が死んだため、いよいよこの老人は莫大

な自分の財産の番人として、管理者として、所有主として、一人ぼっちになつてしまつた。孤独な生活はいやが上にも彼を吝嗇にした。周知のとおり、吝嗇というやつは狼のように貪欲なもので、がつがつと貪れば貪るほどいよいよ貪婪どんらんになるのである。彼の心には、さなきだに人間らしい感情が乏しかつたのに、それが刻一刻と薄れて、見る影もない廃残の身からは日毎ひごとに何ものかが喪うしなわれて行つた。時も時とて、わざわざ軍人というものに対する父の考えを確実にしようとするように、彼の倅はすっかり賭博に身を持ち崩してしまつたのである。彼は心底から倅に対して父親の呪いを送り、その後は倅がこの世に生きていようがいまいが、一切そんなことはもう気にかかけまいと思つた。年毎としごとに彼の家の



窓は次ぎ次ぎと閉ざされて行つて、とうとうしまいには開いてい  
るのはたつた二つきりになつてしまひ、その一つには、読者もす  
でに御存知のとおり、紙が貼りつけてある始末だ。家事の大切な  
方面が年と共にだんだんお留守になつて行き、その代りに、けち  
けちした彼の眼まなざし差は紙かみきれ片だの鳥の羽毛はねだのといったものに向  
けられて、そんなものばかり自分の部屋に寄せあつめているので  
ある。彼はまた自分のところへ生産物を買ひに来る仲買人に対し  
ても、いよいよ頑固一点張りになつた。仲買人どもはいろいろ掛  
引をしてみるが、とうとう愛想をつかして、こりやあ人間じやな  
い、悪魔だと言つて、さつぱり寄りつかないようになつた。乾草  
も穀類も腐つてしまひ、穀堆こくづかや禾堆いなむらはキャベツでも作るのに

持つてこいの、申し分のない堆肥に変わってしまった。穴倉にしまつてある麦粉は、まるで石のように塊まつて、斧で割らなければならぬ程になり、羅紗や麻布やいろんな手織布は、手を触れるのも怖ろしいくらいで埃と見わけがつかなかった。彼は自分の家には何がどれほどあるのやら、もうすっかり忘れてしまつて、ただ憶えているのは、戸棚のどこかに、何かの浸酒の残りを入れた壇があつて、それをこつそり誰かが盗んで飲まないように自分でちやんと記号しるしをつけておいたのと、それから鷲ペンや封蝋がどこにあるという位のことである。ところが、収穫の方は前々まえまえどおりオプロークにどしどし集まつて来た。百姓は昔どおり免役税を持つて来なければならず、女たちもそれぞれ元どおりに胡桃を年貢に納め

なければならなかった。また機織はたおり女は、やはり以前と同じ機織はたかの麻布を織らなければならなかった。こうして集まって来たものは皆、倉庫に山と積まれたまま腐って廃物となってしまうが、しまいには彼自身までが、一種の人間の廃物くずになってしまったのだ。アレクサンドラ・ステパーノヴナはいつか二度ばかり小さい男の子を連れて、何か少しでも貰えまいかと思つてやつて来た。どうやら、例の騎兵大尉との放浪生活が、結婚まえにそう思つたほどうまくは行かなかつたらしい。プリューシキンは、しかし彼女を赦して、いたいけな孫にテーブルの上に載つかつていたボタン鈕かなんかを持たせて遊ばせたくらいだったが、金子かねは一文もや  
らなかつた。二度目に来た時、アレクサンドラ・ステパーノヴナ

は子供も二人づれで、父への土産にお茶うけの丸麵麩クリーチと新しい部屋着を持って来た。というのは、お父さんの部屋着はみつともないどころか、恥かしくて見ていられないほどひどいものだったからだ。プリューシキンは二人の孫を可愛がり、自分の右と左の膝クに二人を乗せて、お馬ハイドウドウといって揺ぶゆすつてやった。丸麵麩リーチと部屋着は有難く頂戴したが、娘には絶対になんにもやらなかった。アレクサンドラ・ステパーノヴナはそのまま空むなしく帰って行った。

さて、チチコフの面めん前ぜんに立っているのは、こういう類いの地主だった！ どうもこんな現象はロシアでは甚だ稀なことといわねばならぬ。ロシア人はだいたい誰も彼もが、縮こまって小さく

なっているよりは寧ろどしどし発展することを好む。それに、例  
のロシア式の無茶と奢りで精いっぱい放蕩をやり、一生を浮い  
た浮いたで暮らしているような地主がそこいらにごろごろしてい  
るのだから、なおさら不思議だ。そういう連中の住居を見ると、  
初めてやって来た者は吃驚して立ちどまり、見る影もない地主  
たちの間へ一体どんな御領主の公爵様が不意に姿を現わしたのだ  
ろうとおつ魂消てしまう。上には数知れぬ煙突や望楼や風見が聳  
え、ぐるりには傍屋だの来客用に建てたいろんな家屋だのの夥  
しく並んでいる白い石造の邸宅は、まるで宮殿のように見える。  
何一つ欠けているものがあるだろうか？ 芝居もあれば、舞踏会  
もあり、篝火や油燈で照らされた庭園は、耳を聳するような楽

の音とともに夜もすがら輝きわたっている。県下の大半の人間が衣裳を著飾きつて樂しげに木蔭を逍遙しょうようしているが、煌々こうこうたるこの照明の中では誰にも何ら不思議なものとも怖ろしいものとも思われぬ。とはいえ、人工の光線に照らされた木枝は本来の鮮やかな緑の色を失つて樹々の茂みのなかから芝居がかりにニユツと顔を出し、上の方ほど暗く、いかつくなつて、この夜の空にいつもより二十倍も怖ろしい姿を浮き出させており、また永遠の闇にとざされた気難しい樹々の梢は、はるか空中で葉をふるわせながら、自分の根本を明々と照らす安っぽい光りに向つて憤慨をもらしているのだ。

もう数分のあいだプリューシキンは一言も物をいわずに突つ立

つていたが、チチコフの方も主人の風体ふうていと部屋の中の有様とに  
すつかり心を奪われてしまつて、容易に口を開くことが出来な  
つた。長いこと彼は、自分の訪問した理由をどう説明したものか、  
適当な言葉が思いつけなかつたのだ。初め彼は、あなたの徳行とっこう  
と類い稀れな御人格については予々かねがねお噂をうかがっていたから、  
ぜひ一度お目にかかつて親しく敬意を表したいと考えて参上した、  
というようなことを言おうと思つたのであるが、どうもそれでは  
あんまりだという気がした。彼はもう一度、部屋の中のがらくた  
をチラと流眇ながしめで見たが、ふとその時、徳行 だの 類い稀れ  
なる人格 だのという言葉は止して、その代りに 経済 と 秩  
序 という言葉を持つてくれば 上乗じょうじょうだと気がついた。そこで

咄嗟とつさに文句をかえて、あなたの経済にかけての御手腕と、稀めずらしく秩序のととのつた御領分については予々お噂を承わつていたら、ぜひお近附をねがって御挨拶がいたしたく、罷り越した次第ですとやった。無論、これより他にもつとよい口実がない筈はなかつたが、その時はどうしてもこれ以外の名案が浮かばなかつたのだ。

それに対してプリューシキンは、何かもぐもぐ唇を動かして呟やいた——というのは齒がなかつたからだ——が、いったい何を言つたのか、はつきりは分らないが、多分その意味はこんなようなことだつたらう。『手前の挨拶なんざ、糞くらえだ！』が、我が国には客を好遇する道が広くゆきわたつていて、その法則はど



んな吝嗇漢けちんぼでも無視することが出来なかつたので、すぐに彼ははやはつきりした言葉で、『さあ、どうかまあ、お掛け下され！』  
と言い足した。

「わしはもうだいぶ前から、お客さんに来て貰ったことがあります  
せんのでな。」と彼は言葉をついだ。「それに、正直なところ、  
あんまり得になることでもごわせんしね。お互いに往つたり来た  
りするなんて、ありや碌な習慣じゃごわせんわい、  
家うちのこと事は疎おろそ  
かになるし……それに、お客の馬にだって乾草はやらにやなりま  
せんしね！  
ところで、わしはもう疾とつくに食め事をすましただが  
ね。なんしろ家の台所うちときちやあ、天井が低くて、汚ならしくて、  
おまけに煙突がすっかり壊れておる始末でな、火でも焚たこうもの

なら、さつそく火事騒ぎですからね。」

成程なあ！ とチチコフは心に思った。—— これじゃあ、ソバケーヴィツチのところでは凝乳饅頭や羊の筋肉をしこたま詰めこんで来て、よかつたわい。

「それにお恥かしい話じやが、屋敷じゆう探しても乾草一束ない始末でな！」プリューシキンはまた言葉をつづけた。「第一、そんなものをどうして貯たばっておけますかい？ 地所は狭いし、百姓は怠け者で、働くことを嫌って居酒屋へ行くことばかり考えてけつかる……これじゃあ悪くすると、今にこの年齢としで物乞いをして歩かなきゃならないかも知れませんわい！」

「ですが、私の伺ったところでは、」とチチコフが、控え目に聞

き咎めて言った。「お宅には千人以上も農奴がおりだというじやありませんか。」

「誰がそんなことを言いましたね？ お前さま、そんなことを言った奴の顔に唾でも吐っかけてやりなさればよかつたのに！ そいつは屹度そんなことを言つて、あんたを<sup>からか</sup>揶揄おうと思つたのですよ。農奴が千人もあるなんて、飛んでもない話じや、ひとつ勘定をして貰いたいものさね、なんの、そんなにあつて堪りますかい！ この三年ばかりというもの、忌々しい熱病がはやりおつてな、わしがとこでは農奴をどえらく<sup>や</sup>殺られてしまいましたわい。」

「へえ！ それで、余程たくさん死んだのですか？」とチチコフは同情をこめて叫んだ。

「左様、ずいぶんえらく奪とられましただ。」

「いったい、どのくらい死んだのですか？」

「八十人ばかりも殺やられましたで。」

「まさか？」

「なにも嘘なぞ言やしませんわい。」

「では、もう一つお訊ねしますが、その今おつしやった人数は、この前に人口調査があつた時以来のお話なんでしょう！」

「そうなら、まだしもですがね、」とプリューシキンが答えた。

「この前の調査以来だと、ざつと百二十人からになりますわい。」

「へえ、ほんとですか？　かつきり百二十人も？」思わずこう叫んだままチコフは、驚きのあまりぽかんと口をあけた。

「お前さま、この年寄のわしが嘘なぞつきますかい、もう七十にもなるのに！」とプリューシキンが言った。どうやら彼は、殆んど嬉しそうな相手の叫び声に少し気を悪くしたらしい。チチコフも、他人の不幸に対してこんな同情のない態度を見せるのはまったく不謹慎だと気がついたので、さつそく溜息をついて、まことに御愁傷の至りだと言った。

「そんなお悔みなんぞ言つて貰つても、一文にもなりませんわい。」とプリューシキンが言った。「この近所にも大尉が一人おりましてな、どこの馬の骨とも分らない癖に、わしの親類じやなどと名乗つて、伯父さん、伯父さん！と言つてからに、悔みを言いだしたが最後、急いで耳を塞がずにやおられないような大声

を立てますのさ。もう面つらからして真赧まつかでな、おおかた強い酒を浴びるほど喰らってけつかるのでがしようよ。きつと軍隊にいた頃、湯水のように金を使ってしまったか、でなきや、芝居の女役者にもすすつかからかに剥むかれてしまったのでがさあね、それで今頃になって、わしがそこへやって来ては、お悔みなんぞこきやあがるんで！」

チチコフは、自分の同情は決して大尉のお悔みなどと同じものではない、自分はそんな口先だけではなく、行為によってそれを証拠だてるつもりだと、大おお童わらわになって説明すると共に、もはやごてくさ言っている場合ではないと思つて単刀直入に、自分はそういう災厄のために死んだ農奴全部に対する納税の義務をこの

身に引受けたいのだと、その場で言明した。この申し出は少なからずプリューシキンに驚かせたらしい。彼は眼を皿のようにして、<sup>しば</sup>久らく相手の顔をまじまじと見つめていたが、ようやく最後に、『それじゃあお前さまは、軍隊にお勤めになった方じゃござんのかい?』と訊ねた。

「いいえ。」とチチコフは、かなり狡く、こう答えたものだ。

「勤めは文官の方でして。」

「文官にね?」と、プリューシキンは鸚鵡がえしに繰り返して、それから、何か食べるような具合に、もぐもぐ唇を動かした。

「じゃが、どうして又そんなことをなさるんで? みすみすあなたの損じゃござせんか?」

「あなたの御満足のためなら、損失などは何でもありませんよ。」  
「それはそれは！ お前さまはまったく御親切なお方じゃ！」プ  
リューシキンは喜びのあまり、鼻の孔から嗅煙草の滓かすが、まるで  
濃い珈琲の雫しずくみたいに甚だ不体裁に、によりりと覗いたことも、  
また部屋着の前がはだけて、ちよつと見るのも憚られるような下  
着が顔を出したことも気がつかずに、喚きたてた。「ほんとにお  
前さまはこの老としより人を慰めて下さるのじゃ？ ああ、有難や有難  
や！ あんたはわしの救いの神様じゃ！……」それ以上プリュー  
シキンはつづけて言うことが出来なかつた。しかし、ほんの一分  
か二分も経たない中うちに、さつき彼のぶつちようづら仏頂面にこつぜん忽然として現  
われた歡喜の色が、同じように忽たちまち跡形もなく消え失せて、再び



その顔には気懸りらしい表情が浮かんだ。彼は手巾で顔を拭きなごしたが、今度はその手巾を小さく丸めて、それで上唇をこすつたりしだした。

「何ですかね、甚だ無躰ぶしつけなことを申して、お腹立ちになつちや困りますが、その税金は毎年納めておくんなさるのでがしようねえ、そしてその金は、こちらへ廻して下さるだか、それとも直接じかに国庫おかみへ納めておくんなさるだかね？」

「じゃあ、こういうことにしましょう。つまり、その農奴は現に生きているものとして、それをあなたが私に売って下さった形にして売買登記の手続きをしますのです。」

「なるほど、売買登記をね……。」「そう言つたまま、プリューシ

キンはじつと考えこんで、またしても唇をもぐもぐやり出した。

「じやが、登記をするととなると、だいぶの費用ものいりでがしてな。なにせ役所の書記といえは至つて厚かましい野郎ばかりでな！

以前は、銅貨で五十カペーカに、麦粉の一袋もやればまあよかつたものだが、当節じやあ、搗麦を荷馬車にまるまる一台と、おまけに赤紙幣あかさつの一枚もつけてやらなくちやなりません、——まつたく、欲張りつたらない！ わしはどうしてあれに眼をつける者がいないのか、不思議でなりませんわい。ほんとに、ああいう手合には物の道理を言つて聞かせてやった方がええのじや！ 言葉ちゆうものは誰にだつてこたえるものじや。誰が何といおうが、道理に叛くことは出来ませんからな。」

どうだか、そういうお前こそ叛くだろう！ とチチコフは心に思つたが、すぐに、自分は謹んでその登記の費用も一切こちらで負担するつもりだと言つた。

プリューシキンは登記の費用まで相手が持つと聞くと、このお客はよつぽどの馬鹿に違いない、そして役所勤めをしていたなどというのもいい加減の出鱈目で、以前はもときつと軍人で女優にでも現うつをぬかしていたのだらうときめてしまった。が、それにも拘らず、彼は自分の喜びを隠すことが出来ずに、チチコフに対してばかりか、そんなものがあるかないか聞きもしないで、彼の子供に対してまで、ありとあらゆる祝福の辞を述べたものだ。それから窓際に立ち寄ると、指で窓ガラスをガタガタたたいて、『おー

い、プローシカ!』と呼んだ。間もなく誰か慌ただしく玄関へ駆けこんだ気配がして、そこで何か久らくしばごそごそやっているようだったが、やがて長靴の音がどたばたと近づいて来ると、扉があいて、プローシカが入って来た。十三四の男の子で、歩きたんびに今にも足が抜けてしまいそうな、おそろしく大きな長靴をはいていた。プローシカがどうしてこんな大きな長靴をはいていたかということとは直ぐに分る。つまり、プリューシキンの家では召使が何人いようが、みんなに対して長靴が一足しか宛がわれないで、それをいつも玄関に置いておくことになっていた。大抵、誰でも主人の居間へ呼ばれると、庭はずつと裸足で飛んで来るが、玄関へ入るなり、その長靴をつっかけて、それから主人の部屋へ顔を

出すのであつた。主人の部屋を出ると、彼はまた長靴を玄関で脱ぎすてて再び赤あかはだし裸足で帰つて行くのである。秋もさなかの、殊に薄霜のおりた朝などに、誰かが窓から覗いてみたら、召使という召使が、どんな達人な舞踏家だつて、舞台の上でもやらないよ  
うな恐ろしい勢いで跳ねまわっているのが眼につくことだろう。  
「ほうら、見てやつて下され、このまあ、馬鹿面を！」とプリューシキンはプローシカの顔を指しながら、チチコフに向つて言つた。「から木偶でくの坊のくせにな、ちよつとでも何か置いとくと、すぐに盗とりくさるのでがすよ！　こりや、阿房あほう、貴様は何しに来たのじやい？　さあ言つてみる、何の用だか？」ここで彼は暫らく口を噤んだが、それに対してプローシカの方も黙りこくつてい

た。「サモワールを支度するのじゃ、分つたか？ それから、この鍵を持って行ってマヴラに渡すのじゃ、彼女あれに倉へ行つて来いってな。倉の棚に、いつかアレクサンドラ・ステパーノヴナが土産にもつて来た丸麴麴の固くなつたのがあるでな、あれをお茶受けに持つてこさせるのじゃよ！……こりや待て、どこへ行くのじや？ 阿房め！ しょうのない阿房じや！……足もとに火でもついたように、何をそう周章あわてくさるのじや？……話をよく聴いていけ。その麴麴パンはな、おおかた上つつらは腐つとるじやろうからナイフで削り落すのじやよ。じゃが、その屑はうっちゃつてしまわないで、鶏とりこや舎へ持つて行くのだぞ。それから、ええか、貴様は倉へ入つちやならないぞ。入りでもして見ろ、ええか？ 白樺

の答で思いきり堪能させてくれるから！　ちようど今貴様はガツガツしておるから、答でも喰らつたらさぞよかろうに！　まあ、入るなら入ってみろ、ちゃんとおれは、この窓から見張っておるから。まったく、あいつらには何一つ油断がなりませんからな。」と彼は、プロシカが長靴を曳きずつて出ていってから、チコフに向つて言った。その後で彼は、チコフにまで胡散くさそうな目を向けはじめた。どうも、相手のそんなべらぼう棒な太つ腹が本当らしく思われなくなったので、彼は肚の中で　こりや何とも分つたもんじやないぞ。ひよつとするとこの男は、あの道楽者どもと同んなじに、口先だけで駄法螺をふいとるのかも知れないぞ。無駄話をしたり、お茶の一杯もよばれようと思つて、いい加減な

出鱈目をしやべりまくった挙句に、ハイ左様ならとくるんじやないかな？　と思つた。それで彼は、警戒かたがた、ちよつと相手の心を試してみようと思つて、売買登記はなるべく早く済ましたいものだ、人間というものは一向あてにならないもので、今日あつて、明日の命も分らないのだからと言つた。

チチコフは今すぐに手続をしてもいいと答え、ともかくその農奴の全体の名簿が欲しいと言つた。

それでプリューシキンはすっかり安心した。彼は何か思案をしているようだったが、やがて鍵を持って戸棚へ近よると、戸をあけて長いことコップや茶碗のあいだを掻きまわしていたが、しまいにこんなことを呟やいた。『どうも見つかりませんがね、どい



つか、あれを飲んでしまいさえしなきゃ、たしか素晴らしいリキ  
ユールがあつた筈じゃが、なにせ、そろいもそろつて泥坊ばかり  
じゃでな！ おや、成程、これじゃなかつたかな？』チチコフが  
見ると、相手の手には埃で袋でもかぶせたようになった一本の玻  
璃壘ラスが握られていた。『これは、死んだ家内が拵らえたもんでな  
、』とプリューシキンは言葉をついで、『女中頭の阿魔あまめが、す  
っかり投げやりにして、栓もしないでおきくさつたのですがすよ、  
畜生め！ 黄金虫だの、いろんなものが中へ落ちていましたかね、  
そういうごみはわしがとつておきましたでな、今は綺麗なもんで  
がす。あんたに一杯つぎますわい。』

だがチチコフは、もう飲んだり食つたりした後だからと言って、

極力そのリキュールは御免を蒙った。

「酒も食事ももうお済みになった！」とプリューシキンが言った。  
「成程なあ、やつぱり育ちのいい方というものは、すぐに分りますわい。いつでもお腹がいっぱいだと仰つしやつて、何にも召上がりません。ところが、やくざなそこいらのコソ泥どもときた日には、いやはや幾ら食わせても食わせてもな……。あの大尉がそうなんで、ここへやつてきちやあ、『伯父さん、何か食べさせて下さいよ!』と、こうでさ。わしがあいつの伯父なら、あいつはわしの祖父だともいうのですかい。きっと自分の家には何も食うものがないものだから、それでああほつつきまわつておるの  
でがすよ! そうそう、あなたは、あの亡者どもの名簿が御入

用なんでがしたな？　おやすい御用で！　わしはな、今度の人口調査に戸籍から削除けずつてもらおうと思つて、ちゃんと別の紙に一人のこらず書きつけておきましたわい。」プリューシキンは眼鏡をかけると、書附を引つ掻きまわしはじめた。そして、いろんな書類の束を解くたんびに、お客に恐ろしい埃の馳走をふるまつたため、チチコフは頻しきりに嚏くしゃみをしたものだ。そのうちによく、隙間もなく何か書き埋めた一枚の紙が取り出された。それには百姓たちの名前が、まるで蟻ぶよ子でも集たかつたようにぎっしり書きこんであつた。いろんな名前がある。パラモノフだの、ピーメノフだの、パンテレーモノフだの、中にはグリゴリー・\*2ドエズジャイ・ニエドエジョーシなどという変つた名前まで飛び出して

来るのだ。みんなで百二十幾人あつた。チチコフはその夥しい数を見て、思わず北叟笑ほくそえんだ。彼はそれをポケットへしまうと、プリューシキンに向つて、登記の手續をするため、いちど市まちまで御足労を願わなければならん、と言つた。

「えつ、市まちまで？ 飛んでもない！……家をあけるのは困りますわい。なにせ、わしのとこの奴らは盗ぬす人か悪者ばかりでがしてな、一日で洗いざらい盗み出して、外套を懸ける釘まで抜いて行つちまいますからね。」

「じゃあ、どなたかお知合いはありませんか？」

「知合いなんぞありますかい？ 知合いはみんな死んじまつたり、なかつたが仲違なかつたがいをしちまいましたな……あ、そうそう！ なあに、ない

ことはごわせんよ！ ある、ある！」と彼は叫んだ。「あの裁判所長がわしの知合いでがしてな、昔はよくここへもやつて来たものじやて。よく知っておりますわい！ お互いに同窓どうそうの友でな、一緒によく垣根へなんぞ這いあがったものじやて！ なんて知らんことがごわしよう！ 旧ふるい知合いでがすよ！……じゃあ、あの男へ手紙でも書きますかな？」

「そりやあ結構ですよ、あの方なら！」

「ようがすとも、ありや旧友でごわしてな！ 学校時代にもいい相棒でしたわい。」

するとその木偶でくのような顔に、不意に一種の暖かい光りが閃めいて、感情とは言えないまでも、仄かな感情の残影とでもいうよ

うなものが現われた。それはあたかも水に溺れた人がひよつこり  
思いがけなく水面へ顔を出したのと同じで、岸に寄り集まった群  
集は期せずして歓呼の声をあげ、喜び勇んだ兄弟姉妹は岸から繩  
を投げてやって、もう一度背中なり、<sup>もが</sup>跪き疲れた腕<sup>かいな</sup>なりが見えて  
来ないかと待ち侘びるけれど、その甲斐もなく、さつき顔を見せ  
たのが最後のおさらばだったのだ。その後では<sup>ばんしやうせき</sup>万象寂として  
声なく、ひっそり静まりかえって呼べども答えぬ水面は、ひととき  
わ怖ろしく、ひととき<sup>こうりよう</sup>荒寥たるものになってしまう。プリユ  
ーシキンの顔もそれと同じく、一瞬、感情の影がチラと掠めすぎ  
た後では、いつそう無表情な、いつそう下卑たものになった。

「机の上に新らしい四つ切<sup>きり</sup>の紙が一枚あつたはずじゃが、」と彼

は言った。「はあて、何処へ紛れこんでしまったかな。なにせ、うちの奴らはみんな手癖が悪いだから？」そこで彼はテーブルの上や下をあちこち覗いてみたり、方々をひつかきまわした挙句、『マヴラ、これマヴラ！』と喚きたてた。呼び声に応じて、手に皿を持った女が姿を現わしたが、その皿には、読者も先刻御承知の固<sup>かた</sup>麵<sup>パン</sup>麩が載っていた。そこでこの二人の間に次ぎのような言葉のやりとりが持ちあがった。

「この泥坊女め、貴様あの紙をどこへやった？」

「旦那さま、本当にわたしや、旦那さまがコップの蓋になすった小さな紙<sup>かみきれ</sup>片よりほかに、何も見たこともありませんねえだよ。」

「いんにや、貴様の顔を見れあ、ちやあんとお主<sup>ぬし</sup>が盗んだことが

分るわい。」

「あれ、なんでハア、わたしがそんなものを盗りますかね？ そんなものは、わたしにや何の役にも立ちましねえだよ、別に読み書きが出来るわけでもなしね。」

「嘘をつけ、お主はあれを寺てら男おとこに持って行ってやったのじや。

あいつは文字をどうやらぬたくりおるからな、それであいつのところへ持って行つたのじやろ。」

「ふん、寺男は紙ぐれえ欲しけりや自分で買いますだよ。あの人がお前さまの紙片なんぞ知るもんですか！」

「ようし待っておれ、今にその罰で閻魔の庁へ行つてから鉄の刺さすまたすまたにさされて、じりじりと鬼ひあぶに火焙りにされるからな！ 見て



おれ、じりじりと火焙りにされるのじゃぞ！」

「だって、そんな紙なぞ手でさわったこともねえだのに、なんで火焙りにされる訳がありますかね？　なんぞ他の、女の弱みで責められるなら、仕様もねえだが、わたしやまだ盗みをしたちゆうて責められる覚えはありましねえだよ。」

「なあに、ちゃんと鬼が火焙りにするわさ！　こりや泥坊女、貴様は主人を瞞したから、こうされるのだぞ！　そういつてな、鬼どもがお主を真赤な刺叉で火焙りにするわさ！」

「そんなら、わたしやこう言つてやりますだよ。そんな覚えはねえだ！　金輪際そんな覚えはねえだ。わしは何にも盗んだことあねえ……　つてね。おや、紙はあのテーブルの上にあるでねえ

かね。いつでも旦那さまはこうして無実の罪でわたしを責めなさるだよ！」

成程そこに四つ切の紙があるのを見つけると、プリューシキンはちよつとたじろいで唇をもぐもぐやっていたが、『ふむ、なにをそうがみがみ言うのじやい？ この怒り虫め！ こちらが一言いうと、十言も口答えをしやがって！ さあ行って、手紙に封をするだから火でも持って来い。待て待て！ お主はまた脂蠟燭でも持って来るつもりじやろうが、脂は溶け易くて、すぐ燃えて無くなってしまふから損じや。だから附木つけぎを持って来な！』と言つた。

マヴラが出て行くと、プリューシキンは安楽椅子に腰をおろし

てペンを取ったが、それから長いこと札の四つ切紙をあちこちひねくりまわしながら、何とかしてそれを八つ切にする工風くふうはないかと骨折ってみた。が、結局それも駄目と諦めがつくと、かび黴が生えてどろどろになった液の底に蠅が無数に沈んでいるインキ壺へペンを突つこんで、まるで楽符のお玉杓子たまじやくしそっくりの文字をならべながら手紙を書きにかかった。彼は、絶えずブルブル震えて紙面全体を跳ねまわりたがる手を制して、いかにも吝けちくさくぎよう行と行とをくつつけるように書いて行つたが、そうすると今度は余白がたくさん残るので、それも気が気ではないのだ。

まったく人間というものが、これほど下劣で卑賤ひせんしゆうあく醜悪なものに墮落することが出来るのだろうか？ これほど変るものだろ

うか？　これが果して真相に近いことだろうか？　ところが、すべてこれが真実の相すがたで、人間はどんなものにもなり得るのだ。いま熱情に燃えさかっている青年が、もし自分の老いさらばうた後の姿を見せつけられたなら、恐れ戦おのいて飛びすさることだろう。ものやわらかな青年時代を過ぎ、がさつで粗剛そこうな壮年に達しても、心して人間的な行いを保持してゆくように努め給え。途中で取り落してはいけない。後で取り返すことは決して出来ないから！　未来に横たわる老齡はつれなく怖ろしいもので、何一つもとへ返してくれはしないのだ！　まだしも、これよりは墓場の方が慈悲ぶかい。墓の上には　ここに人間が葬られている　とでも書かれようけれど、老齡の冷酷無情な面影からは、何一つ読みとること

も出来はしないのだ。

「ときに、あんたのお友達で、」と、プリューシキンは手紙をた  
たみながら訊ねた。「逐電ちくでんした農奴が欲しいって人はごわせん  
かな？」

「お宅には逐電した奴もおありなんですか？」と、チチコフはハ  
ツと我れに返つて、急いで訊き返した。

「ごわすとも、大ありでな。婿もつとが搜索してくれましたが、さつ  
ぱり行方が分らないそうでな。尤も彼奴は軍人だから、ガチャガ  
チャ拍車を鳴らして踊ることは名人じゃが、法律上のことであ  
ちこちする段になると……。」

「で、そんな農奴がどのくらいおありなんですか？」

「左様さ、これも七十人ぐらいにはなりまさあね。」

「まさか、そんなに？」

「いや、まったくの話でがすよ！ なにせ、わしがとこじや毎年、逃げますのでな。どいつもこいつも恐ろしい喰らい抜けばかりでな、のらくらして大喰らいばかりしてけつかるだ。で、わしの食うものが第一ごわせんような始末で……。逐電した奴なんざ、幾らでもかまいませんよ。ひとつお友達にそういつて勧めて下され。せめて十人も見つけ出しゃあ、ええ金になりますまさあね。調査簿に載つとる農奴なら、一人あたり五百ルーブリが相場でがすからな。」

「なんの、そんなことを友達なんぞに匂わせもするもんか。と

チチコフは心の中で呟やいたが、口へ出しては、そんな友達ばかりよつといそうもないし、第一その手続だけでも大変で、着物の裾がすりきれるほど役所へお百度を踏んでも、結局費用だおれになつてしまうから、手を引くに限ると説き聴かせて、しかし本当にそれほどお困りのようなら、お気の毒だから、自分が引受けてもよい……が、値段のところは、全くお話にもならない安いものだと言つた。

「で、幾ら出して下さるだね？」そうプリューシキンは訊いた。が、彼の顔は忽ちユダヤ人みたいな浅ましい相好になつて、両手が水銀のようにブルブル顫えていた。

「さあ、一人あたり二十五カペーカだしましょう。」

「それで、どうして払って下さるだね？  
正しょうぎん金きんでかな？」

「ええ、この場で現金で払いますよ。」

「ですがね、お前さま、わしの貧乏世帯に免じてせめて四十カペーカに買つて貰えませんかね。」

「御主人！」とチチコフが言った。「なんの四十カペーカどころか、私は五百ルーブリずつでも出したいところです！ほんとに私は喜んでそれだけ払いますよ。だって、あなたのような尊敬すべき善良な御老人が、正しいお心ゆえに苦しんでいらつしやるのを眼まのあたり見るのですものね。」

「いや、まったく、そのとおりがすよ！  
金輪際、ほんとのこととでがす！」とプリューシキンは、頭こうべをたれて無性にそれを振り



たてながら、言った。「何もかも、みんな馬鹿正直のお蔭でがすわい。」

「で、よござんすか、私にはあなたのお人柄ひとがらが一目で分つたのです。それなのに、どうして一人あたり五百ルーブリぐらい差上げないことがありましよう。しかしながら……私にはそれだけの財力がないのです。だから、お愛想に五カペーカだけ奮発させて頂きましよう、そうすると、農奴は一人あたり三十カペーカの勘定になりますねえ。」

「そりやまあ、なんでがすか、せめてもう二カペーカだけきば気張つておくんなさいよ。」

「二カペーカですな、ようござんす、気張つておきましよう。で、

一体どれだけあるんです？ たしか七十人と仰っしやいましたね

え？」

「いんにや、みんなよせると七十八人になりますわい。」

「七十八人、七十八人と、それが一人あたり三十二カペーカだから、こうつと……。」「ここで我等の主人公は一秒ばかり考えた、たしかにそれ以上はかからなかったが、彼は俄にわかにこう言った。

「ええ、二十ルーブリと九十六カペーカになりますね！」彼はなかなか数理に長けていた。で、彼は早速プリューシキンに受取りを書かせて金を渡したが、それを両手で受けた老人は、絶えずこぼしはしないか、こぼしはしないかとビクビクしながら何か液体デスクでも運ぶ時のように、恐ろしく用心深く書物卓の方へ持つて行っ

た。書物卓デスクのそばへ行くと、彼は仔細にもう一度その金をあらためてから、やはり非常に用心深く、それを抽斗ひきだしの一つへしまつた。てつきりその金は、カルプ師とポリカルプ師という、この村の二人の僧侶が彼を埋葬する時まで、そのまま抽斗の中に死蔵しぞうされて、さぞかしその時になったら、娘や婿や、また恐らくは、自から彼の親類と称している例の大尉ひっしなどの筆紙がたにつくし難いほどの喜びとなる運命だろう。金子を蔵しまうとプリューシキンは安楽椅子に腰をおろしたが、どうやらもう何にも話の種がなくなつたらしい。

「なんでがすい、もうあんたはお帰りなんで？」彼はチチコフがちよつと身動きをしたのを見て、そう言ったが、その実じつこちらは

ポケットからハンカチを取り出そうとしただけであつた。

「そう言われるとチチコフも、成程この上こんなどころに一刻も愚図ぐずぐず々々ぐずぐずしていることはないと気がついた。『ええ、もうお暇いとましなくちやありません!』そう言つて彼は帽子を手に取つた。

「が、お茶は如何で?」

「いや、お茶はまた、いつかこの次ぎの時にして頂きましょう。」

「どうしてね? もうサモワールは言いつけましただよ。じやが正直なところ、わしはあまりお茶は好きじやごせんわい。贅沢な飲みもので、それに砂糖が滅法高くなりましてな。プローシカ! もうサモワールはいらぬぞ! それで麵パン麩はマヴラのところへ返して来な、分つたな? 前のところへしまつとくだぞ。いん

にや、そうでねえ、ここへよこしな、おれが自分で持つて行くだから。それじゃあ、お前さま、御機嫌よろしゅう！　どうかまあ、お前さまに神さまのお恵みがありますように！　で、その手紙は裁判所長に渡しておくんなされ。そうじゃ！　あの男に見せて下され、あれはわしの古い友達だでな。そうだとも！　同窓の友でがしたからな？」

それから、この不思議な<sup>ばけもの</sup>化物のような<sup>しわ</sup>皺くちやの老人は、お客を屋敷の外まで見送ったが、その後ですぐに門をしめるように言いつけた。その足で彼は、番人どもがめいめい<sup>もちば</sup>持場についているかどうかと、倉庫を見まわりに出かけたが、番人どもはちやんと<sup>よすみ</sup>四隅に立って、木の<sup>しやくし</sup>杓子で鉄板がわりの小さい<sup>あきだる</sup>空樽を<sup>たた</sup>敲い

ていた。それから台所をちよつと覗いて、召使たちが満足な物を食っているかどうかと調べるような顔をして、玉菜汁シチイカーシヤと粥を鱈腹つめこみ、一同を誰彼なしに、手癖が悪いの、身持がよくないのと罵りちらしておいてから、自分の部屋へと戻つた。一人になると彼は、きょうのお客の、全く底の知れない親切に対して、どんな謝礼をしたものかと考えてみたりした。一つあの男に懐中時計でもやるかな。と彼は肚の中で考えた。あれはなかなか立派な銀時計で、真鍮や赤銅あかがねの品とはどだい物が違うわい。すこし破損いたんじやいるが、なあに、そりや自分で直すじやろうて。あの男はまだ若いから、花嫁の気に入るために懐中時計ぐらいは欲しかろうさ。いや、それよりも、と彼は、少し考えてから付け

たした。　　いつそあれは、死んだ後でおれの形見かたみとしてあの男にやるように遺言に書いておこうわい。

だが、我等の主人公はそんな時計などは貰わなくても、この上もない上乘の御機嫌だった。あんな思いもよらぬ収穫こそ、何よりの贈物であつた。まったく何と云つたつて、死んだ農奴ばかりか、おまけに逐電したやつまで合わせると、みんなで二百人を越すのだから堪らない！　無論まだプリューシキンの村へ乗りこんだばかりの時から、何か旨いことにありつけそうな気はしたが、こんな余録よろくがあろうとは夢にも思わなかつた。道すがらも彼はいつになく愉快そうで、口笛を吹いたり、拳を口にあてて喇叭らっぱを吹くような塩梅に唇を鳴らしたり、はては何か唄までうたいだした

りしたが、その唄が実に変つていたので、セリファンもじつと耳を澄まして聴いていたが、その中<sup>うち</sup>にちよつと頭<sup>かぶり</sup>をふつて、『へつ、旦那は何をうたつてござることだか!』と眩やいた位だ。彼等が市へ近づいた頃には、もう濃い夕闇がせまっていた。影と光りがまったく溶け合い、それに物の姿までが溶けこんでしまつて、ように思われた。だんだら模様の関門も変にぼやけた色を帯び、立<sup>たちばん</sup>番をしてゐる兵隊の口髭が、眼よりずっと上の額の辺にくつついてゐるようで、鼻はまるでなさそうに見えた。轍の音が急に高くなり、車体がひどく跳<sup>おど</sup>りだしたので、いよいよ馬車が丸石の舗道へ乗りこんだことが分つた。街灯はまだ点<sup>とも</sup>されず、ただそこここの家の窓に灯影<sup>ほかげ</sup>がさしはじめたばかりであつたが、横<sup>よこちよう</sup>町



や袋小路ふくろこうじでは、兵隊や馭者や労働者がわんさきといて、赤いシヨールを掛けて素足すあしに短靴たんぐつをはいた特殊な婦人がまるで蝙蝠のようつじつじに辻々を素早く走り廻っているような市まちではどこでもこの時刻にはつきものの、或る種の場面や会話が持ちあがっていた。チコフはそんな手合いには眼もくれなかつた。そればかりか、郊外へ散歩に行つての帰りらしい、ステツキをついた多くの華奢な役人たちの姿にさえ、彼は見向きもしなかつた。ただ時おり彼の耳へ入るのは、どうやら女の声らしく『なに言つてんのさ、酔っぱらいさん、失礼なことすると、承知しないよ!』とか、『お放ししたら、馬鹿つ、警察へ突きだして、油をしぼつてやるから!』などという叫び声であつた。つまりそれは、夢みがちな二十歳前はたち

後の若者が芝居の帰り道に、スペインの街や夜や、額に捲毛まきげをた  
らしてギターをかかえた素晴らしい女の姿などを胸に描きながら  
歩いている時、いきなり熱湯でもぶっかけるように、浴びせられ  
る言葉なのだ。何かこういう若者の頭に浮かばない空想があるだ  
ろうか？ 彼は天国へも昇れば、シルレルのところへお客にも行  
く——ところがまるで霹靂へきれきのように、こうした致命的な言葉が  
突然、彼の頭上で鳴り渡ると共に、彼はやはり自分が地上にあつ  
て、それも\*3センナヤの広場か、酒場の近くに佇んでいるのに  
気がつく、そして又もや味気あじけない日常生活が彼の面前にそそり立  
つのである。

ブリーチカ  
半蓋馬車はガタリと一つ最後に揺れると、まるで穴の中へでも

入るように旅館の門へ吸いこまれて行つた。ペトウルシカが出迎えたが、この男は、前がはだけのを嫌つて片手でフロツクの裾を押えたまま、片手でチチコフを馬車から助けおろした。給仕もナプキンを肩にかけて、蠟燭を捧げながら駈けだして来た。ペトウルシカは旦那の帰りを喜んでいるのかどうか——それはよく分らなかつたが、とにかくセリファンと<sup>めくば</sup>朥せをした時には、いつもの気難しい顔が、どうやら少しは晴れやかになつたように思われた。

「ずいぶんごゆつくりでございましたねえ。」と給仕は、階段に灯りを見せながら言つた。

「ああ。」チチコフは階段へ足をかけながら答えた、「で、君の

方はどうだね？」

「はい、お蔭さまで。」と給仕は、お辞儀をしながら答えた。

「昨日、何でも中尉だと仰つしやる軍人の方がお着きになりました、十六番にお泊りでございます。」

「中尉だつて？」

「何だかよくは存じませんが、リヤザーニからおいでになったとかで、鹿毛の馬をつけたお馬車でございました。」

「うん、よしよし、まあこれからも、せいぜい宜よろしくやるさ！」

そう言つてから、チチコフは自分の部屋へ入つた。控室を通りながら、彼は鼻をくくんいさせたが、ペトウルシカに向つて

『こら、せめて窓ぐらい明けといたらどうだ！』と小言をいった。

「時々あけといたですがすよ。」とペトウル―シカは言ったが、それは嘘にきまつている。主人の方も嘘だとは知っていないながら、別に何も言わなかった。旅から帰ったばかりのこととて、彼はひどくがっかりしていた。ほんの仔豚の肉だけという極く軽い夕食を認したためると、さっそく彼は着物をぬぎすてて、夜具やぎの中へもぐりこむなり、ぐっすりと深い眠りにおちた。それは痔の気も知らねば、蚤の煩わしさも知らず、また大して頭の能はたらき力もないといった、誠に仕合せしあわな人々だけが享受する、あの実に素晴らしい眠りであった。

\* 1 馬鹿握り 中指と食指の間へ母指の頭を出して握った拳

で、これを相手の鼻先へ突き出して愚弄嘲笑の意味を表

わす。ここでは愚弄と同時に拒絶を意味し、我が国の

『赤んべえ』に相当するものと考えれば間違いない。

\*2 ドエズジャイ・ニエドエジョーシ 『行けども行けども

涯<sup>は</sup>て知らず』という意味の、変な名前である。

\*3 センナヤ ロシアの大抵の市にある特殊な一角<sup>いっかく</sup>。本来

は乾草市場であるが、多くは場末<sup>ばすえ</sup>の盛り場になっている。

第一部未完







# 青空文庫情報

底本：「死せる魂 上」岩波文庫、岩波書店

1938（昭和13）年7月1日第1刷発行

1952（昭和27）年6月1日第9刷発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「茲→ハハ」 不図→ふと 兎に角→とにかく 兎も角→ともかく

莫斯科→モスクワ 露西亞→ロシア 欧羅巴→ヨーロッパ 彼

得堡→ペテルブルグ 伊太利→イタリア 仏蘭西→フランス 希

臘↓ギリシア 巴里↓パリ 洪牙利↓ハンガリー 芬蘭↓フィン  
 ランド 留↓ルーブリ 哥↓カペーカ 桃花心木↓マホガニイ  
 釣燭台↓シャンデリア 卓子↓テーブル 襯衣↓シヤツ 刷子↓  
 ブラシ 切子硝子↓カットグラス 硝子↓ガラス ※「#濁点付  
 き片仮名中、1-7-83」↓ヴィ 互り↓わたり 互って↓わたって」  
 ※「没」と「歿」の混在は、底本通りです。

※底本は巻末に訳註をまとめていますが、中見出しごとに「\*番  
 号」で設定しました。

※訳註の頁数は省略しました。

入力：山本洋一

校正：高柳典子

2016年6月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 死せる魂

または チチコフの遍歴 第一部 第一分冊

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫  
著者 MYORTVUIE DUSHI (МЕРТВЫЕ ДУШИ)  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks  
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>